
パッション・アイデンティティー

瀬見尾津凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パッション・アイデンティティー

【NNコード】

N9481N

【作者名】

瀬見尾津凪

【あらすじ】

男子高校生の美音は出会い系で一人の青年と出会い、その彼が親友である夕樹の兄だと知った美音は、青年に恋せずにはいられなくなる。夕樹には何も知らず、彼との関係を続けていこうとする美音だが、夕樹の女装趣味が周囲にばれてしまつたことで事情が変わり始め……。それぞれの登場人物が葛藤し、成長していく様を描く青春群像劇。

第4章に入りました。

1・美音 ?（前書き）

1 / 16

誤字等修正。

1・美音？

何もかも知った振りで、全てを悟ったような顔をして、なるようになると身を任せて、この世界で生きていけると思った。
ただ、それが甘い考え方であることに気づいている自分がいることも知っていた。人波を縫うように困難を交わしていくと、信じていたかつた。逃げていた。楽な方法を選んで、他人と違う生き方に身を任せていた。

この狭い世界で、まだ何も知らない幼い自分を、自覚するのが怖かつた。

けど、その生き方こそが自分の人生だとも、頭の隅で思っていた。
自分らしくある為なら、それも良かつたんだ。

「ミオ、だな？」

顔を上げると、おれの考えていたよりもマシな顔をした青年がそこ^{みち}にいた。

「よるじさん？」

「ああ」

相手を確認したおれはにつこつ笑つてみせてから携帯電話を閉じる。

「行こう」「うー

夜の街は平日にも関わらず賑わっていた。派手な格好の女性とか、
スースイ姿のおじさんとか、疲れ切った顔の学生とか。

「場所は？」

「好きにして。おれ、付いていくから」

上目遣いで相手を見上げる。よるじはこの街に慣れているのかいないのか、よく分からぬ調子で歩き出した。

今夜の相手は久しぶりに若かった。メールのやりとりによると、
彼は大学四年生。就職活動真っ最中の学生らしい。写メをもらわな

かつたのであまり期待はしていなかつたが、実物は背が高くてそこ

そのイケメン。性格が良ければ両性に愛されそうな人だつた。

駅から離れていくと、代わりに電飾が眩しくなってきた。まだ日

が沈んで一時間ほどしか経つていないのに、街はすっかり夜の顔だ。

「あ、一回五千円ね」

「は？」

よるじがおれに丸い目を向ける。おれはいつものように言い返した。

「冗談だよ。別にお金はくれなくても良いよ」

くれるって言つならもううけど、と相手を見れば、よるじは前方に目を向けて言つ。

「考え方」

おれは少しだけ笑つた。大学生ならそんなにお金は持つていないはずだから、期待はしない。

「無理しなくて良いよ」

そういう声をかけると、よるじは苦笑した。

「生意気だな。もつと大人しい奴かと思つてた」「おれは猫被つてるだけだよ」

よるじが言葉を失う。身体はどちらかといつと受け身だが、性格はうに近い。おれは人を困らせたり、いじめるのが好きだった。やがて左へ角を曲がると、先ほどとは違つた雰囲気の場所へ來た。ホテル街だ。

よるじは奥へと進み、おれはその後を追う。

他と比べて目立たない建物の前でよるじが立ち止まる。おれがそこの隣へ立つのを確認して中へ入る。

前に何回か來たことのあるホテルだつた。家が近いからと自宅へ誘う男が大半だが、その他は八割の確率でここだつた。

いつものように受付を相手に任せて、その後すぐに部屋へ向かう。部屋へ着くと、この先は一択だ。シャワーを浴びるか、浴びずにやるか。

後者は未だに好きじゃない。おれは妙に神経質で、そのままベッドで抱かれると不快なのだ。とはいっても主導権は相手に渡してある。さあ、今夜の相手はどちらがお好みだろう？

「先にシャワー浴びていいぞ」

と、よるじがおれを振り向いた。

「いいの？」

おれが聞き返すと、彼は無表情に頷く。

「ああ」

やつた。おれはすぐさま、よるじに背を向けて風呂場へ向かう。

温めのシャワーを浴びながら、おれは無意識に考える。

「こんなことを始めてまる一年。最初は小遣い稼ぎが目的だったけれど、最近はむしろ出会いが目的だ。いろんな男に抱かれるのは構わないが、そろそろ決まった人だけ付き合いたい。」

理想は背が高くて男らしく体格の良い人、それでいて温厚で優しくて可愛い人。普段はおれがいじめるんだけど、ベッドの上ではそれが逆転するのだ。

現実にはそんな人と出会ったことなど一度もない。今夜の彼も背は高いがひょろひょろに痩せている。おれは草食系よりも肉食系が好きなのに。

身体を綺麗にして部屋へ戻ると、入れ違いによるじがシャワーを浴びた。まあ、顔は悪くないから良いか。おれの彼氏候補に挙げておこう。

ベッドで待っていたおれを、よるじは乱暴に押し倒した。

それから身体中を愛撫して、舐めて、口づけて、外見とは裏腹に強い力でおれを屈服させてくれた。思わず、きゅんとした。

「他の奴は、金くれるのか？」

おれの中を犯しながら、彼が問う。

「くれる人もいるし、くれない人もいる」

「もらった金は、どうするんだ？」

と、荒い息をつく。

「……あんまり使わない」

彼がおれから抜け出して、己を放送出する。

「そりゃ」

よるじはしばりくおれを見下ろすと、また発情した。

汚いことをしていると自分では思わないけれど、汚いおれを夕樹ゆうつきは知らない。

「高内さん、大丈夫かな」

「ただの突き指だろ？ 別に心配することないって」

「うん……」

高校に入つて同じクラスで、最初の席替えで隣になつた夕樹は心身共に中学生みたいだった。平均より低い身長に痩せた身体に幼い顔。クラスの中でも可愛い男子として女子から密かにもてはやされていることを、こいつは知らない。

「つづーかさ、コイ」

「ん、何？」

まだ主の戻つてこない席を見つめたままの夕樹へ、おれは言ひつ。

「高内のこと、好きなの？」

「え？ えつ？」

夕樹は顔を真つ赤にして照れた。

「そそ、そんなこと、あるはずな、あれ、ないはずある？ ちがうな、あれ？ えつと、だから」

分かりやすく反応する夕樹、言葉すらまともに言えないほどの動揺っぷりだ。

おれは意地悪に笑つて彼の頭に手を置いた。

「分かつたから落ち着け。あんな奴のどこが良いか分からんけど、応援するぜ」

「だつ、だから!! オ、違つんだって」

と、必死に否定する夕樹だが、おれは構わずに頭をぽんぽんと撫

でた。

「ま、お似合いなんじゃね？」

「つ……み、美音！」

高内といつのは男勝りな女子のことでの、誰に対しても変わらない強気な態度が特徴的な奴だつた。彼女とは中学が一緒だつたのである程度のことは知つてゐるし、悪口だつて言い合う仲だ。

「あいつはやめた方が良いと思つけどなあ」

一学期に入つて間もなかつた。夕樹はまだ高内のことによく知らない。

「何で？」

「あいつ……」

言おうかどうか迷つて、おれは結局、夕樹の耳元に口を寄せた。

「中学ん時、レズビアンじゃないかつて噂だつたんだぜ」

夕樹はびっくりした顔から傷ついたような顔へ変える。

「そんなの、ただの噂でしょ。高内さんが可哀相だよ」

「ははっ。まあ、信じるか信じないかはお前の勝手だ」

すると教室に噂の彼女が戻ってきた。夕樹がぱっと視線を逸らし、おれを見る。

「……分かりやすっ」

夕樹に聞こえないくらい小さな声で、おれはそう呟いた。

高内は付き添つてくれていた友人に笑顔でいくつか言葉をかけると、すぐに席へ着く。

中学の時から変わらないショートカットが彼女をボーグッシュに見せる。おれは、ほら、男に抱かれて金をもらうような悪ガキだから、彼女がレズビアンでも構わない。むしろ仲間意識が芽生えそうで、ちょっと期待する。類は友を呼ぶくらいだし。

夕樹はどうやら信じたくないようだけれど、その一方でどこか悩んでもいる様子だ。

授業開始のチャイムが鳴るのに構わず、おれは言った。

「そういや、お前ん家に泊まるつていう話、どーなつた？」

「ああ、許可是もらえたよ。夏休みの間にきつちり掃除もしたし、いつ来てくれたって大丈夫」

と、夕樹がにっこり笑う。

「そうか。じゃあ、また後で」

「うん」

数学の教師に注意される前に、おれは自分の席へ着いた。

彼氏候補は今のところ、三人ほどいる。最年長は32歳の営業マンで、最年少はこの前のよるじ。彼らの他にもっと良い人がいるかもしれないから、とりあえずはキープだ。

帰りの電車でそんなことをぼーっと考えていることを、隣に立つ夕樹は知らない。知らなくて良い、と思つ。

夕樹は綺麗だ。純粋で無垢で、小さな悩みにしか直面したことの無いような奴だ。おれの性指向やおれのしていることは、卒業するまで秘密が良い。

2・夜司　?

大学四年にもなると、授業よりも就職活動の方に時間を割く。時代が求めているような気がして環境経済学なるものを専攻した俺は、今更後悔していた。道を誤った。

何故なら、内定がもらえないのだ。どの企業も俺を必要とはしないらしい。

「お前だけじゃないだろーよ」

と、友人のサクマは言つたが、そんな言葉は救いにならない。

「いつのこと、東大受けりやよかつた」

「しね」

俺のぼやきにすかひず舌を出すサクマ。

「受験勉強をサボつた罰だ」

と、俺は机に頃垂れる。

「就活もサボつちまえ」

「嫌だ」

いくら就職難の時代とはい、これは死活問題である。俺があの家を出て優雅な一人暮らしをするためにも、必要不可欠なのだ。

「学歴つて大事だよな……ああ、こんな中途半端な大学で妥協するんじゃなかつた」

「中途半端とか思つてるの、お前くらいだぞ？」

「……そうか」

顔を上げてサクマの顔を見る。

「で？」

「オレも落ちました。これで十一連敗。もうやる気でねえ」

「だよなあ」

乾いた笑いを返し、俺はまた頃垂れる。

「履歴書書くのにも飽きてきた」

頬にひんやり冷たい感触が伝つて、しばしその冷たさを味わう。

「『パーしたいよな、特に左側』

「同意」

自分の名前と生年月日、住所や学歴を書くだけの左側。どの企業を受けるにしても共通する部分。

「内定さえもらえば、安心して遊べるのにな」

「うん」

何十枚もの履歴書を心込めて書いたって、負けてしまえばただの「ミミだ。無意味になつて、捨てられる。資源を無駄にしている、立派な環境破壊だ。

サクマが大きな溜め息をついて、俺は反対に久伸を漏らした。

「よし、帰ろ」

と、顔を上げる。

「え、何、愚痴りに来ただけ？」

田を丸くするサクマへ俺は言った。

「あと暇つぶし。家にいたつてつまらねえんだもん」

「お前も不真面目だなあ」

「ありがとう。じゃあな、サクマ」

と、俺は席を立つた。

「夜司！^{やっかさ} 可愛い妹がいるんだから、今日くらいまっすぐ帰れよ！」

背中にかけられた声に、俺は彼を振り向いて叫ぶ。

「うっせえ、口利きン」

サクマはただ笑っていた。

一人で外食する気もなかつたので素直に帰宅すると、玄関に見慣れない靴があつた。誰か客でもいるらしい。

珍しいと思いながら靴を脱ぐ。

居間へ向かうと、夕食の支度をしていた母が先に俺を見つけた。

「おかえりなさい」

「うん、ただいま」

食卓から離れたところで弟とその友人と思われる男子が妹と戯れ

ていた。ちらりと見ただけで目を逸らし、俺は母へ問う。

「誰、あれ」

「夕樹のクラスメイトよ。ほら、前に友達泊めても良い？ つてある子が聞いてきたでしょ？」

と、母。いつもはだらしない格好なのに、今日はつらうらと化粧している。

「ふうん」

特に興味がなかったので自分の部屋に行こうと思う。夕飯まであと十分はかかりそうだし。つづーか、六歳の妹相手に何をあんなにはしゃいでるんだか。

呆れた視線を向けてぼーっとしていると、弟の友人の顔が見えた。

「……」

幼い弟と違つて大人びていて、悪戯っぽい切れ長の奥二重、整つた鼻と口。見たことがある。

はつとした俺は相手に見られる前に居間を後にした。

あれは、確かにこの前……あの時は夜だったから顔なんてそんなに意識しなかつたけれど、確かあいつも高校生で……そんな馬鹿な。自室に入るなり鞄を放り投げ、携帯電話を取り出す俺。すぐにメールの受信箱を開いて、あいつと会った日がいつだったか探し出す。……一週間前だった。高校生はまだ夏休みだと言つていた、そう、八月の終わりの。

「嘘だ」

出会い系で知り合つて一晩を共にした少年が、俺の弟のクラスメイトだと？

携帯電話を閉じ、ベッドに放り投げる。

「嘘だ……」

信じられなかつた。信じたくなかった。ならば、信じなければいい。相手のことなど俺は全く覚えていなくて、初対面を装うのだ。きっと相手も俺のことなど覚えては……一週間しか経っていないのに、忘れている方が不自然か。

床に座り込んで、天井を見上げる。

部屋から出るのをやめようか。夕飯は食べてきたと言えば良いし、風呂だつて別に……あれ、確かあいつ、十八歳つて言つてなかつたか？俺の弟は十六だぞ。まさか、嘘ついたのか？

いろんなことが疑心を生み、頭の中がもやもやする。

そうして静寂の中に鳴り響く腹の音。……どうしてこんな口に限つて腹が空くのだろう。自分が憎い。

「お前、何で兄貴のこと名前で呼んでんの？」

「え、何でだろ？母さんがいつもやつちゃんつて呼ぶから、かな」扉の外から聞こえてくる声は、やがて俺を呼んだ。

「やつちゃん、『』飯出来たよ」

扉を開ける習慣がないのが、せめてもの幸い。

「ああ、すぐ行く

と、いつものように返してしまつて後悔。時間だけでもずりせば、あいつと顔を合わせないで済んだかもしれないのに。

「行こう、ミオ」

弟が友人を連れて離れていく。ミオ、はあいつと全く同じ名前だ。ハンドルネームかと思ったが、実名らしい。……これでもう、信じない根拠が無くなつた。やつぱりあいつだ、間違いない。

変装して行こうかと考えたが、やめた。相手を欺くことは出来ても、家族に怪しまれる。

仕方なく覚悟を決めて部屋を出た。

食卓ではいつも帰りの遅い父の席にあいつが座り、賑やかな食事が開かれていた。

なるべく顔を合わせないよう気につけながら、俺は炊飯器の横に置かれた自分の茶碗に『』飯をよそる。

それから自分の席へ着こうとして、一瞬戸惑つた。どこに座つても顔を見られてしまうじゃないか、当たり前だ、ここは俺の家だ。

溜め息で誤魔化して席へ着く。

「やつちゃん、こいつ僕の友だちの滝口美音くん」
たきぐちみおん

と、弟が俺の方を見て隣の彼を紹介する。

美音は俺の顔を見て無表情になると、すぐににっこり笑った。

「初めまして」

「あ、ああ」

驚いた。相手の方から初対面を装つてくれるだなんて。
「で、さつき話した僕のお兄ちゃん」と、俺を紹介する。

「夜司、です」

伺うように俺が名乗る。

それから話題はまた他愛のない話になつて、俺は一人、もくもくと食事を始めた。

とりあえず明日は昼前まで寝ていよいよ。美音がいつまでこの家にいるかは分からぬけれど、明日は土曜日だから一人でどこか遊びにでも行くはずだ。俺は最低限の言葉しか交わさないし、不必要に顔を合わせないぞ。

心に決めて、さつさと食事を終える。

茶碗と箸、コップを台所の流しに持つて行くと、弟の口からとんでもない言葉が飛び出した。

「今日は一緒に風呂入るんだよね、ミオ」

思わず手を滑らせて茶碗を落としてしまう。弟たちがこちらを見たが、幸い茶碗には傷一つ無かつたので会話は続行された。

「あんまり騒がしくしちゃダメよ」

と、母。

俺は平静を装つて茶碗を流しに置くと、逃げるようにその場を離れた。廊下へ出て、自室へ向かつ。

風呂場で、裸で、一緒でつて……あ、あいつ、大丈夫かな。まさか弟に変なことを教える気じゃ。

そこまで考えて、俺は溜め息をつく。

考えすぎだ。一人は単に仲の良い友人同士だろうし、美音だって年上相手に身体を売るだけで同じ年には興味がないはずだ。：

…否、そうであつて欲しい。

自室の扉を開けながら、俺は密かに祈る。せめて美音が、初対面を続けてくれますように。何事もありませんように。

3・美音 ?（前書き）

1 / 1
6

一部修正。

びつくりした。夕樹の兄貴が、まさかよるじだつたとは。聞くところによると、「夜」を「司」どるで「夜司」らしい。読みを変えたら、よるじ。

相手もどうやらおれに気づいていたようだけじ、結局一度と顔を会わせることはなかつた。まあ、それが一番良い方法だ。だつて相手はおれを抱いた人だし、おれが売春することも知つてゐる。でおれは相手がゲイだつてことを知つてゐる。家族も知らないであろう秘密を、おれだけが知つてゐるのだ。なんて優越感。

とはいへ、おれは猫被りだから、友人の家庭を壊すような真似はしない。でも……。

『これつて運命じゃない?』

『ただの偶然だろ、もう連絡してくるな』

『冷たいなあ、よるじつてば。ねえ、今度会つて話そつよ』

『断る』

返つてきたメールは「ことじ」とくおれを拒否していた。『今度はお金いらないから。おれ、よるじに会いたい』と送信したら、ついに返信が途絶えてしまつた。

溜め息をついて、携帯電話を閉じる。

夕樹から聞いた話だと、いじめ甲斐のありそうな素敵なお兄さんだつた。それがよるじだと分かつたら、そりやあ接近せずにはいられないだろう。

そうして猫被りのおれは考えた。

「なあ、ユイ。またお前ん家行つても良い?」

「え? 別に構わないけど」

と、夕樹は何も知らずに受け入れる。

「朝子ちゃんとまた遊びたいんだ。おれ、下に弟妹いないから新鮮

で

「ああ、そうだね。朝子もきっと喜ぶよ」

おれの言葉にまんまと騙される夕樹。ありがと。」

「つて」とは、また泊まるの？」

「んー、別にどうでも良いけど」

とりあえずよるじに会えれば良い。あつちは嫌がるかもしれない

けど、おれは会いたいのだから仕方ない。

「あ、あと、お前の兄貴とも話してみたいんだ」

と、おれは言うだけ言ってみた。

「あー、それはどうかな。やっちゃん、結構気まぐれな人だから…」

…

まあ、そうだろうな。

「そうか、無理そくならいいや」

「あ、じゃあ、話だけはしておくよ」

と、言つてくれる夕樹。夕樹は素直で優しいから好きだ。付き合つていて気が楽、とも言つ。

「さんきゅ」

と、おれは笑つた。

その日の放課後、帰り支度をしているおれに高内が声をかけてきた。

「滝口、あんた数学好きだったわよね？」

「は？」

おれが顔を上げると、高内が偉そりに言つ。

「ノート、貸しなさい」

今日は久しぶりに夕樹と軽く遊んで帰るつもりだったので、おれは言つ。

「嫌だ」

と、席を立てて、おれに近づいてつこも高内がいてどうせやめている夕樹の方へ向かつ。

「明日には返すって。今日は気分悪くて授業出られなかつたのよ
おれが立ち止まつて振り返ると、彼女は言つた。

「いーしゃが

と、教室の隅でこちらをちらちらと見ている女子を指さす。塙田
依紗、仲の良い人からは「いーしゃ」と呼ばれる消極的な大人しい
子だ。

「お前じゃないなら貸すよ」

「あ、ひどーい」

鞄から数学のノートを取り出し、高内へ手渡す。

「まあ、いいや。ありがとね、滝口」

と、笑顔を浮かべて夕樹の田の前を通り過ぎていく。酷だ。無意
識だらうから責められないが、夕樹の視線は彼女に釘付けである。
「行こうぜ、ユイ

肩に手をやつて彼の意識をこちらへ向ける。

「あ、ああ、うん」

はつとした夕樹は鞄を持ち直すと、小さく溜め息をついた。
下駄箱へ向かう最中に夕樹は言つ。

「塙田さんの鞄って、可愛いよね」

「じゃらじゅらいっぱい付いてるだけじゃね?」

と、おれは言つ。彼女の鞄にはフリルの付いたリボンのストラッ
プとか、マスコットキャラクターのぬいぐるみなどがいくつかつり
下げられていた。

「うん、でも僕たち男子は、あんなにいっぱい付けないでしょ?」

夕樹の言いたいことが分からなかつた。代わりに分かつたことを、
口にしてみる。

「そういうお前、ぬいぐるみ好きだつたな
「つ、す、好きっていうか……た、溜まつただけだよ。ゲーセンと
かで、ほら」

と、慌てる夕樹。彼の部屋に泊まつた時、ベッドの枕元に愛らし
いぬいぐるみがいくつも置かれていた。妹にあげれば喜びそうなも

のを何故か枕元に置くところ、おれにはひみつと理解できることである。

「別に良いよ、言訳しなくて」

「あ、う……」

夕樹は口を閉じて俯いた。恥ずかしいのか、少し顔が赤い様子だ。「あれがないと眠れないんだろ?」

「眠れるよ?」

と、声を荒げる。彼は見た目に似合って中身も幼い。ぬいぐるみと一緒に眠る女子はよく聞くが、男子でもいるなんて驚きだ。だが、夕樹は可愛いので良しとする。

下駄箱で靴を履き替え、外へ出た。

残暑の名残の温い風に沿つて道を歩く。一人ともあまり喋る方ではないから、帰り道で互いに口を閉じているのはよくあることだった。

その時におれは今日あつた嫌なこととか、良かつたこととか、夜のことを考えたりする。

いつもこの時、夕樹が何を考えているのか、おれは知らない。高内のことを考えているかもしだれないし、勉強のことかもしだれない。家族のことや、妹のことかも分からない。

「ねえ、ミオ」

と、夕樹がふいに口を開いた。おれは視線だけ向ける。

「やっぱり僕つて、変かな?」

どうやら先ほどの話の続きらしい。

「変だけど、特に悪いことじゃないと思つぜ」

自分のことも含めてそう返すと、夕樹は言つ。

「昔から、すごく好きなんだよね。だからつい、手に届くところに置きたくて」

「……ふうん」

「ミオは、そういうのつてない? 昔から変えられない趣味、みた
いな」

と、夕樹はおれを見た。

ないと答えると嘘になるから、おれは答えに迷つた。男に抱かれたい願望が幼い頃からあつたなんて、言えない。けれど、おれは夕樹がぬいぐるみに対して愛着を持つように、男を好きになる自分に愛着を持っていた。

「あると言えば、ある。けど、無いと言えば無いな」曖昧な答えで誤魔化した。冗談っぽく笑つてみせて、おれは言つ。

「つづーか、そんなの誰だつて一度は考えるよ」

夕樹は納得のいかない顔でおれをじつと見つめた後、溜め息をついた。

「そうだね、そんなものかもね」

どうやら彼はもつと違う答えを求めていたようだ。夕樹が落ち込むのを見て、おれは仕方なく口を閉じる。

高内のこと以外で悩むこともあるらしい。まあ、おれも似たようなものか。

暮れ始めた夕空を見上げて、考える。

今日の夜に、またメールしてみよう。よるじにつけて、おれはもつと知りたい。夕樹の兄貴だし、深く入り込むつもりもないけれど、もう一度抱かれたい。

「恋つて、どんな感じかな」

ふと呟いてみた言葉は、夕樹の目を丸くさせた。

「え？ ミオ、どうしたの？」

「ど、若干引き気味。

「いや、何となくそう思つただけ。おれ、恋つてよく知らないからわ」

「……な、そんなの、僕だつて同じだよ」

と、夕樹はどこか呆れたように言つた。

だからおれは、いつものようにへらりと笑う。

「だよな。恋なんて、頭で分かるもんじゃないよな」

きつとそれは感覚で知るものだ。ドキドキしたり、きゅんとした

り、きゅうっと胸が締め付けられたりして、自分の身をもつて知るものなんだろ？。

4・夜司　?

会社説明会は退屈だった。会社によって違う箇所はいくつもあるが、根本はどこも似たり寄つたりだ。

それにまして、こういうところへ来るとライバルたちに圧倒されてしまうので落ち込む。しつかりした調子で質問をする奴は、たいてい見た目からして優等生だ。

就活を始めた頃は俺も頑張ったものだが、最近ではかつたるくで仕方がない。印象が大事だとか、常に見られているとか言つけれど、いちいち気にしてられるかつての。

そりやあ、俺なんかは頭の回転は速いけれど不真面目だし、大学の講師に気に入られても社会で通用するとは思えない。成績ばかりが目立つから優等生に思われがちだが、実際は真逆だ。

むしろ優等生だったら、今頃は東大に籍を置いているはずだ。高校の担任に強く推されて反抗したのは紛れもなく俺。当時、受験戦争に興味はなかったのだ。

説明会が終わると、隣の席にいたライバルに声をかけて情報を得ようとする奴らが目立つ。

俺はそういう奴らが好ましくなかつたので、さつとその場を離れる。何故ならいくら情報交換したって、内定がもらえる訳じやないからだ。

だつたら一刻も早く家に帰つて寝る。またはインターネットでもやって、次に狙う会社を探す。

会場を出たところで、俺はネクタイを緩めた。もし会社の誰かに見られていたとしても、今回はバスさせてもらつつもりなので構わない。

辺りは早くも薄暗くなつており、街は静かだ。オフィス街なので当然と言えば、当然か。

駅までの道を歩いていて、ふと自分が苛立っていることに気がつく。不真面目なのは自分なのに、良く出来た奴を見ると劣等感が増す。自分もそつすれば良いだけなのに、そつできないのがもどかしい。

横断歩道は赤だった。

鮮血のよう光るそれを睨み付けて、息をつく。一年前はまだ余裕があつて、こんなに苛つくこともなかつた。

青に変わったのを確認して、歩き出す。

だから、出会い系なんてちやちな方法に逃げることもなかつた。

俺は男が好きだけど、それは飽くまでも「好き」というだけ。将来は親の気に入る女性と結婚して、家庭を築いて、平凡に老いていく予定だ。そういうことが長男の務めだし、両親にとつての幸福である。

道行く男性に目を奪われることがあつても、俺は特定の誰かと一緒になる気はない。

駅へ着き、改札を抜ける。

慣れない路線なので、きちんと案内板で方向を確認してからホームへ降りた。

一分もしないうちに到着した電車に乗り込み、空いていた席へ腰を下ろす。

「……」

溜め息をついて、俺は携帯電話を取りだした。

乗り換える駅までは遠い。暇つぶしにウェブを起動し、見慣れたサイトにアクセス。

それはゲイ向けの出会い系サイトだった。ここで俺は、何度か男に会っている。年上を相手にしたこともあるし、年下を相手にしたこともある。

掲示板は相変わらず新しい書き込みで賑わっていた。写真を載せている奴もいれば、写メなしで出会おうとする奴もいる。

俺は基本的に顔で相手を選ぶ。だから写真付きじゃないと連絡は

しない。

この数年間で年下の方が好きだと気づいていたので、出来るだけ好みに合つ相手を探す。年上でも、見た目が好みなら構わなかつた。いくつか品定めをして、俺は溜め息をついた。

今夜はあまり良い奴がない。すぐに会える相手が良いので、そ
う上手くいくものでもなかつた。

携帯電話をポケットにしまい、ぼーっとする。

物心ついた時から、男が好きだつた。幼稚園では、一番仲の良かつた男の子と結婚したいと言つて母親たちを困らせたのを覚えている。だから俺は、あれ以来何も言わなくなつた。

けれども、男が好きだという気持ちはどうしても無視できなかつた。

中学生の時、初めて本当の恋をした。それまで比較的優等生を貫いていた俺は、そのあまりの辛さに現実逃避をして、苦しすぎて死さえ願つた。相手が同じクラスの女子に恋していることを、知つていたから。

高校受験は頑張つたけれども、第一志望は落ちた。第一志望でも周囲から羨まれたので、それで妥協した。

もう恋なんてしない、と心に決めていた。

不真面目に高校を卒業して、今の大学に入つて、俺は今、壁に突き当たつている。

今にも崩れそうな弱々しい壁なのに、手を伸ばすとぐにやりと曲がる。どんなに手を打つても、壁を破ることは出来なくて、苛立つ。数ヶ月前に俺が抱いた男は、言つた。

「親には、カミングアウトした?」

してないと俺が答えると、彼は目を伏せて言つ。

「そうだよな。でも、いつかは言わなきゃいけないことだよ
俺には隠し通す自信があつた。

「……無理だよ。少なくとも僕は、嘘をつき続けたくない」

「嘘じやない。ただ黙っているだけだ。」

「 よるじは、きっと何にも考えたことがないんだな
はつとして、力が抜けた。 そうかもしない。

自宅の最寄り駅へ着いたとき、携帯電話が着信を告げた。メールだ。

取り出して見るとミオからだつた。一体何を考えているのか、俺との再会を運命だと思つていやがる。ただの偶然だ。何故なら俺はその日にすぐ会つてセックス出来る相手を探しているのだから、近くに住んでいたつておかしくはないのだ。

仕方なく開くと、俺を誘う文章が並んでいた。

『 今日、会える?』 すでに改札を抜けてしまったので無理だ。『 嫌なら電話番号教えてよ。それで話そつ』 何を話すといふのか。『 教えてくれないなら、直接会いに行つちやうよ? おれ、よるじの家知つてるし』返信画面に移動し、自分の電話番号を打ち込む。ただでさえ苛ついているのに、会いに来られちゃかなわない。

メールを送信し終えると、俺は携帯電話の電源を切つて家路に着いた。

父親の帰つてくるのがだいたい二十一時を過ぎた頃だ。その一時間前から弟と妹と母親が順に風呂に入つてしまつので、必然的に俺が風呂に入るのは遅い時間になる。そして最後に父親。

「 やつちゃん、お風呂どうぞー」

と、扉越しに弟が声をかけてきて、俺はむくりと起き上がる。

弟の友達と密かに関係しているという後ろめたさで、俺はあまり弟と顔を合わせて話をしなくなつていた。以前にも別の理由から話さなかつた時期があるので、家族は誰も不思議に思つていなかつた。弟が自室に入つていいくのを耳で聞き、俺は廊下へ出た。風呂場へ向かおうとすると、ふいに弟が顔を出す。

「 ねえ、やつちゃん

「 な、何だよ

ちゅうとびっくりした。

少し開けた扉から頭だけを出して、弟は言つ。

「明日つて家にいる?」

「は? こるけど

と、俺はさつと歩き出す。

「それは良かった。明日、ミオが遊びに来るから」
はつと後ろを振り返つたが、弟はすでに扉を閉めていた。ミオが遊びに来る、だと? ふざけんな、あいつ嘘つきやがったな。十六歳のくせに生意氣だ。

苛々を抑えきれずに風呂へ向かう俺。ダメだ、すっかりいつもに振り回されていい。俺は就活で忙しいっていうのに、何てことだ。

熱い風呂にいつもより長く浸かって、少しの間目を閉じた。明日になればこの苛々もおさまるだろ?否、明日また苛つくなかもしれない。

美音は俺に接近しようとしている。弟をどんな風に騙しているかは知らないが、美音の目的は絶対に俺だ。とんでもない奴に気に入られちまつたな、俺。うん、深く考えるのはよそ。

風呂から上がり、さつさと寝間着に着替えて自室へ向かう。

明日は家にいない方が良い。何か適当な理由を付けて..... そうだ、サクマがいるじゃないか。

放置していた携帯電話を取りだし、電源を入れる。

アドレス帳を開いてサクマを探し出し、すぐに電話を入れた。たぶんバイトも終わってる時間だろうから、つながるとは思うんだけど

れど。

「お、バイト終わったか?」

やつぱりつながらつた。

『ちょうど終わったと』。何の用だよ?

「ああ、明日なんだけどさ、久しぶりにどこか遊びに行こう

誘つてみると、サクマは言った。

「せひいじに行こう

『悪い。明日は会社見学なんだ』

「ああ? その後は?」

『その後は……女子大生と合コン』

「しね

間髪入れずにそつ返すと、サクマは笑った。

『あはは、悪いな、ほんと。お前、明日ヒマなの?』

「ヒマだから誘ってるんだろ』

『そつかー。お前も合コン来る?』

「断る」

『相変わらず固いんだからあ。一度くらい来てみりよ、面白^{ハマ}いざ』

「メンバーによるな。行く気はないけど」

『つれないねえ。そんなんだからモテないんだよ、夜司^{ヤツカキ}は』

「うるせえ。もう用は済んだから切るぞ』

『はいはーい。じゃあ、またな』

「おう」

耳から離してボタンをぱちっと押す。

携帯電話を閉じると同時に溜め息をついた。出かける予定が作られないなら、一人でどこか出かけるか……めんどうだな。

だつたらいつそのこと、風邪でも引いたと仮病を使って部屋に引きこもろうか。あ、でも母親が無駄に心配して風邪薬とか飲まされるな。

まあ、俺が部屋に引きこもるのはよくあることだし、扉には鍵をかけて誰も入れないようにしよう。あと窓も閉め切ってカーテンかけて……ダメだ、これでは何の解決にもならない。

仕方がない。明日はむしろ、あいつがどう出るか伺つていよう。俺の方が大人で一枚上手だつてこと、思い知らせてやる。

5・美音 ?（前書き）

1 / 1
6

一部修正。

「滝口くん、ありがとう」「
と、差し出された数学のノート。

「ああ、どういたしまして」

と、受け取るおれ。塚田はおれの目をじっと見て、少し笑う。
「すごく見やすいノートだったよ。試験前とかに、また見せてもら
つても良い?」

大人しいだけの女子かと思ったが、意外とそういうでもないらしい。

「うん、良いよ」

「ありがとう」

につっこり笑つて自分の席へと戻つていく塚田。比較的自由な校風
だからか、彼女の髪を束ねるリボンはピンク色のふりふりだつた。
夏休み前まではまったく言葉を交わさなかつたのに、高内のおか
げで距離が縮まつてしまつたようだ。別に良いけど。

なんて悠長に構えていると、昼休みに高内がやつてきた。
「ジユースくらいはおごつてあげる」「は？」

怪訝な顔を彼女へ向けるおれ。

「いいしゃにノート貸してくれたでしょ？ そのお礼よ」

しかし生憎とおれは、通学途中のコンビニで飲み物と昼飯を一緒
に購入するタイプだつた。購買を使うのは、むしろ夕樹の方。

「気遣わないでいいよ。だつたら、あいつにおごつてやって」

と、おれは席を立つて夕樹の元へ行く。のんびりと勉強道具を机
の中にしまつていた夕樹は、おれらの会話に聞き耳すら立てていな
かつた。

「ユイ、高内がジユースおごるつて」

「ああ、ミオ。つて、ええ！？」

おれの隣にいる高内を見て、ドキッとする夕樹。分かりやすすぎると、

るだろ。

「まあ、滝口がそう言つなりお」ひてあげるけど」

と、高内。

「ちょっと、え、どうこう」と、

慌てる夕樹へおれは言つ。

「だつてお前、いつも購買で飲み物買つだろ?」

夕樹はぽかんとする、はつとして立ち上がつた。

「そんな、高内さん、別にいいよ。僕、何もしてないし」
なんとなく状況は飲み込んだらしい。

「そう?」

「う、うん」

高内に見つめられて息を飲む夕樹。やばい、面白い。

「りのちゃん、それなら今日はみんなで食べない?」

と、入ってきたのは塙田だつた。

「ああ、それ良いかも。あんたたち、いつもどこで食べてるの?」
高内がおれを見て尋ねる。夕樹は視線を逸らしながらも、未だにドキドキしているようだつた。

「食堂か、たまに中庭」

「じゃあ中庭行こう! 今日は秋晴れだもん」

と、高内がにっこり笑う。……秋晴れ、ねえ。

そんなこんなで女子一人とおれたち二人、合計四人で昼休みを過ごすことになつたわけだけれど……。

「つづーか、何でおれがノート貸さなきゃいけなかつたの? 高内の見せれば良いだろ」

「残念ながら、昨日の数学は眠つてました。あの先生の話つて、どうも眠くなつちゃうのよねえ」

中庭に設置された机と椅子を四人で囲む。向かいに高内が座つたせいで、夕樹は若干おれの方に寄り気味だ。

「ひでえ奴。こんなのとよく一緒にいれるな、塙田」

「でも、りのちゃんのノートって黒板を写してるだけだから、見て
も参考にならないんだよ」

と、塚田は笑う。

「だつて眠くなっちゃうんだもん。板書だけで精一杯なのー」
そう言つて口を尖らせる高内。他愛のない話をしているだけなら、
そこら辺にいる女子と大して変わらない。言つてしまえば、普通だ。
「勉強以外だつたら頼りになるんだけどね」

と、塚田。

「たとえば?」

どこか嫌味っぽく尋ねる高内。塚田はおれの方をちらつと見ると、
言つた。

「昨日だつて、滝口くんにノート借りてくれたでしょ?」

「ああ」

「わたし、人見知りだから話しかけるのつて苦手で」

と、塚田は優しく苦笑する。

「まあ、そうね。あたし、嫌いな奴以外なら誰とでも話せるし」
と、高内も納得した様子だ。

確かに塚田の方が勉強は出来そうだし、それで互いにバランスを
とつているのかもしない、と思う。

「それなら、おれとお前もそんな感じだよな」

と、黙りこくつていた夕樹に話を振る意地悪なおれ。

「え、あ、うんっ」

話は聞いていたらしいが、動搖してしまつ夕樹。こうこう中学生
つているよな、なんて思いながら言つ。

「おれは人見知りしないけど、ユイはすげー激しいんだよ」

女子二人が夕樹を見て、夕樹がぱっと口を開く。

「人見知りつて言つても、最初だけだよ! 確かに、ちょっと、苦
手ではある、けど……」

決して高内の方を見ようとしない夕樹。

「認めたな、ユイ」

と、おれはやつぱり意地悪く笑う。今日は最高に楽しい昼休みだ。
夕樹が俯くと、塚田が口を開いた。

「前から思つてたけど、藤堂くんって可愛いよね」

その言葉に高内がうとうとと頷く。

「滝口がいじめたくなる気持ち、すこしくよく分かるわ」

高内が夕樹をじっと見つめれば見つめるほど、夕樹はおれに助けを求めて寄つてくる。

おれは何も言わずに夕樹の肩を掴んで押し返してやつた。

放課後、夕樹の家に向かう最中も、彼はにこにこしていた。高内と一緒に昼飯を食べられたことが嬉しいらしい。

「どうぞ、上がって」

と、先に玄関へ入る夕樹。

「おじゃましまーす」

藤堂家へ足を踏み入れるのは二度目だった。よるじ、いるかな。靴を脱いで上ると、すぐに廊下の奥から朝子ちゃんが出てくる。

「おかえりなさい」

「ただいま」

と、にっこり妹の頭を撫でる夕樹。

「こんちは、朝子ちゃん」

と、おれも両線を下げて挨拶すると、朝子ちゃんがおれに向かって飛び込んでくる。

「みおおにこちやん、こんちはーっ」

ぎゅう、と抱きしめられて胸がほんわかする。何で子どもらつて、こんなに癒されるものなんだろう。

「朝子、母さんに飲み物ちょうどいいって言つてきてくれる?..」

と、夕樹。朝子ちゃんはおれから離れると、すぐに来た道を戻つていった。

「まーまー、ゆいがののみものちょうどいいってー」

可愛すぎる。兄貴のことを名前で呼ぶのがおれには違和感だが、

藤堂家のルールなんだろ？

夕樹が自分の部屋へ向かって歩き出す、おれもその後を追う。

「兄貴は？」

「さあ？ 部屋にいると思つよ」

部屋の扉を開けて、中に入る。

夕樹が鞄を机の横に置いて、おれは前と同じように適当な場所へ腰を下ろした。

「そういうば、前に話したゲームだけ、昨日ついでクリアしたんだ

ど、夕樹が思い出したように、そのゲームソフトを棚から取り出す。

「ミホ、やりたいて言つてたでしょ？ 貸すよ」

「お、マジで？ センキゅー」

それは流行のアクションゲームだった。おれもついにいたものにはそれなりに興味がある。

すると、扉がこんこんとノックされた。

夕樹がすぐに扉を開けて、ジュースの入ったグラスを一つお盆に載せたおばさんが入つてくる。

「美音くん、いらっしゃい。ゆっくりしていつてね」

言いながらおばさんは机にグラスを一つ置き、部屋を出る。それと入れ違うようにぬいぐるみを抱えた朝子ちゃんが入つてきた。

「あーセーボー」

遊ぶ気満々の朝子ちゃん。良いなあ、妹つて。

夕樹は少し笑うと、グラスを倒れないように机の中央へ移した。

「何して遊ぶ？」

おれの間に朝子ちゃんはベッドの上にのぼつて言へ。

「おまえ」と！

と、夕樹のぬいぐるみの一つをおれに手渡す。え、おまえ、どういぐるみつて要るの？

「ゆこはいの！」

と、別のぬいぐるみを夕樹にさしだす。夕樹は呆れまじりに手を伸ばして、はつとした。

おれに背を向けるようにしゃがみこんで、朝子ちゃんへ言つ。

「……朝子、僕の部屋に入つた？」

「うん」

「……えつと」

朝子ちゃんの抱きかかえたテディベアに手を伸ばし、何かする夕樹。

「これ、どこで見つけたの？」

「いすのした」

「勝手に僕のものとっちゃダメでしょ」

「だつて、かわいいんだもん」

「朝子、いい？ そういうの、どうぞうつて言つんだよ」

おれにはよく見えないので分からない。そつと身体を横に倒してみると、夕樹の手には先ほどまでテディベアが被つていたふりふりひらひらの何かが握られている。確か、ヘッドドレスとかいう名^{チヤ}称じやなかつたつけ。

「……ごめんなさい」

と、泣きそうな顔で謝る朝子ちゃん。夕樹はそれを手にしたまま、妹の頭を優しく撫でた。

そして、落ち着いたところでおれを振り返る夕樹。

「……えつと」

手にしたものをとつさに引き出しへ隠すが、意味はない。

「それ、何？ つづーか、お前の持ち物なの？」

夕樹が苦い顔で視線をさまよわせる。朝子ちゃんはベッドの上に座り込んでぬいぐるみと見つめ合つていた。

扉を開けて外に誰もいないのを確認して、夕樹があれのすぐそばへ腰を下ろす。

「見なかつたことにしてくれないかな？」

「無理」

即答すると、夕樹が泣き出しそうな顔をする。

「言つても、笑わない？」

「笑わない」

「僕のこと、嫌いにならない？」

「なるわけねーじゃん」

だつておれがよるじに接近するには、夕樹の存在が必要不可欠なのだから。

夕樹は深く溜め息をつくと、ジュークを一口飲んでからベッドの下に手を伸ばした。

「じそ」そと取り出されたそれは、衣類を入れるために使うプラスチック製の箱だった。その中から、綺麗にたたまれて袋に封印されている衣装を取り出す。

広げて見せた衣装は、ふりふりひらひらの愛らしさピンク色のローラータ服。

「……僕、女装するのが、趣味……なんだ」

と、小さな声で告白をする。

「……」

あー、なんて言つかな。意外だつたといふか、ショックといふか、でも夕樹なら似合いそうだとか。

朝子ちゃんがおれらの空氣を読んだらしく退室していった。

「へ、変だよね。自分でも、分かつてはいるんだけど……その」と、夕樹は顔を赤くして俯いた。おれは箱に手を伸ばし、他にも似たような服があるのでないかと探る。

「あ、ダメ……っ！」

夕樹が声を上げたが、構わずに一つ取り出してみる。今度は黒、いわゆるゴスロリである。

隣の部屋からよるじが聞き耳を立てるような、がたつといふ物音がしたが、夕樹はそれどころではない様子だった。

ゴスロリを再び箱にしまって、おれはふりふりひらひらの服を抱きしめてくる夕樹へ言つ。

「別に良いんじゃね？」

夕樹だって人間だ、ひとつくらいおかしな趣味嗜好があつたっておかしくはない。それどころか、おれは不思議と安心していた。

変なのは自分だけじゃなかつた。

「むしろすりきつしたよ。お前、『J—Y』のが好きだつたんだな」

「……ミオ」

夕樹は手にした服を丁寧にたたむと、また袋へしました。

「ありがとう、ミオ」

「ううん」

それから夕樹は先ほど引出しにしまつたものを取り出して、小さな声で言つ。

「僕つてさ、漢字で書くと『ゆつき』にしか読めないでしょ？ 女の子でも通用する名前だから、それでネットで買い集めてるの」「へえ」

夕樹でも悪知恵は働くらしい、ちょっと意外だつた。

「たまに、宿題やるから誰も入らないでつて嘘ついて……着てみたり、して」

「それで興奮するの？」

「こひ、興奮！？ 違うよ、僕はただ

顔を真つ赤にさせながら、夕樹が言つ。

「可愛いものが、好きなんだ。だから、人から可愛いって言われるのも、けつこう好きで」

そんなお前もまた可愛いわけだが、おれの趣味じゃないので手は出さない。隣にはよるじもいるだらうじ。

「そつか。コイも、やつぱり変だつたんだな」

「へ、變つて、確かにそうだけど、僕は……っ」

「はは、やつぱり類は友を呼ぶんだな。何か楽しくなつてきた、おれ

と、笑う。

夕樹は不満そうにしながらも、箱に入った袋たちを見つめると言

つた。

「……ちょっと、お願いがあるんだけど、良い?」

「何? 出来る範囲で引き受けれるよ」

おれが彼に視線をやると、夕樹はおれの目をじっと見つめた。

6・夜司　?

結局、あいつはずっと弟の部屋にいた。何か話をしていたようだが、「あ、ダメ……っ！」とか「興奮するの？」とか、何だかいやらしい言葉しか聞こえなかつた。だが、その後の弟の様子はいたつて普通だつたので、俺が想像するような事態にはなつていねいはずだ。

それにしても、だ。

「ちょっと出かけてくる

「あら、こんな時間にどこへ？」

母親の質問には答えずに、玄関の扉を開ける。

「夕飯までには帰つてくるのよ

と、背中に声がかかつたが、俺は振り返らなかつた。

向かう先は駅前だ。

あいつは家に帰ると見せかけて、俺に電話して来やがつた。『よるじに会うの忘れてたから、外で会おうよ』とか言つて。

弟の部屋で何をしていたか気になつていた俺は、仕方なく家を出た。

「あ、来た来た」

と、にっこりする美音。

俺は彼を見んただままで問う。

「さつき、弟の部屋で何してた？」

美音はじつと俺を見つめると、言つた。

「場所、移そう」

そして駅の中へ入つていく。

着いたのは、この前一人で来たホテルだつた。まあ、男一人で静かに話せる場所と言つたら、ここくらいしかない。美音は俺を誘つ

てくるだろ？し、予想は出来ていた。

「朝子ちゃん、可愛いね」

と、美音はこつこつ笑つてベッドに座つた。

「……まあな」

俺は相手から距離をとり、扉近くの壁にもたれかかる。

「よるじは、夕樹と仲良し？」

「……そんなに仲は良くない。この数年、互いの部屋に入つたことないし」

素直に答えを返すと、美音は「ふうん」と、考える様子を見せた。「じゃあ、知らないのか。よるじも家族には内緒にしてるんだもんね」

何を言つているのか分からなかつた。

「自分が同性愛者だつてこと、隠してるんでしょ？」

はつとして、俺は彼を睨み付ける。

「ばらすつもりはないよ。おれはただ、よるじが好きなだけ」

「……何が言いたいんだ、はつきり言え」

「んー、言えないよ。おれはただ、あんたと付き合いたいだけだし」と、立ち上がる。静かに俺の前まで来ると、弟の前では決して見せない顔をする。

「キスしてみれば、分かるよ」

俺の肩に手を置いて、唇を近づけてくる。仕方がないので、俺も普段と違つて気を引き締めた。

「お前と付き合つ氣はない」

「何で？」

あと数センチのところだつた。

「弟の友達と付き合つなんて、馬鹿げてる。それにお前は最初、俺を騙した」

「別に年齢を詐称するくらい、どうつてことないでしょ」

高校一年生にしては妙に色っぽい声を出す。

「生意気な奴は気に食わない」

強く言うと、美音は離れた。

「何だ、残念。猫被つておれの方が好き?」

と、またベッドに腰を下ろす。俺は何も返さなかった。

「たぶん違うとは思うけど、一応聞くよ。夕樹は、男が好き?」「田を逸らしていた。俺はそんな彼を見据えて答える。

「まさか。どうしてそう思うんだ?」

「うん……類友だから」

意味が分からなかつた。いくら何でも、兄弟揃つて同性愛者なんて……俺が言えたことではないが、ありえなかつた。

「夕樹は普通の子だよね、うん」

と、一人で勝手に納得する美音。ついて行けなくて、俺は言つ。

「話はそれだけか?」

「おれの彼氏になつてよ」

「断る」

「……何で?」

どこか寂しそうに言つて、美音は制服のネクタイを外した。彼が何を求めているかは分かつていて。顔を背けて俺は言つ。

「さつきも言つただろう。お前は弟の友達だ」

「でも、好きになつちやつたらしようがないでしょ?」

美音はワイヤーシャツのボタンを外して上半身を晒す。

「ねえ、やつちゃん?」

家族にしか呼ばれない愛称で呼ばれて、ムカツと来た。

「その名前で呼ぶな」

「じゃあ、何て呼んだらいい?」

今まで通りで良い、と答えそつになつて口を閉じた。相手のペースにはまつたら最悪だ。

「やつくん? それとも、夜司? ^{やつかさ}今まで通り、よるじの方が良いかな」

「つむさい、黙れ」

苛々していた。彼のほつそりした身体が、見たくないのに見えて

しまつ。

誘うだけで、行動に移してくれないのがせめてもの救いだった。下手に身体を触られたら、苛々が性欲へと変換されてしまいそうだった。

「もしかして、他に好きな人がいるの？」
「いない」

「じゃあ、何で？　おれと付き合つてよ」

「もう、恋はしないと決めたんだ」

「……どうして？」

俺はどう答えるべきか迷つた。美音には全てを見抜かれてしまつた。
気がして、何故だか怖かつた。

「苦しい思いでもした？」

「……」

「そうだよね、おれなんかより長く生きてるもんね。おれは、むしろ恋がどんなものか知らないから、もしかするとあなたのことも、本当は好きじゃないかもしねー」

「……」

「でもおれ、もつ身体売るのに飽きたんだ。誰か特定の一人だけに抱かれたい」

まだ十六年しか生きていないのに、ませたことを言つ。それが俺は気に食わないのに、美音は分かつていなか、ただ無視しているだけか。

「そして今は、おれはあんたに抱かれたいと思つてる」

田を向けると、美音は自嘲するように微笑んでいた。

「おれ、男の人抱かれている時が、一番、自分を感じられるんだ」

「……」

「みんなそうだと思つけど、おれ、誰かに必要とされていたいから」
それは十六歳の主張だった。思春期まつただ中の、誰もが通り過ぎる思考の渦の中。

「それと同時に、おれは誰かを必要としてる。それが、あんたなん

だよ「み

そう言つて美音は俺を見た。何かを見透かすような、真っ直ぐであどけない瞳だった。

ああ、彼はちょっとませでいて生意氣だけど、弟と大して変わらない普通の少年だ。

過ちを犯して、自分を責めて、悩んで、迷つて、怒つて、自分を許して、甘えて、泣いて、わめいて、もがく。

「呼び捨てにしてくれれば良い」

俺もまだその渦から抜けきれずにいるから、思わずそう言つてしまつた。

「……夜司」

美音が小さな声で俺の名を呼ぶ。

俺は溜め息をつくと、ベッドに腰を下ろした。

「まだ付き合いつわけじゃないからな」

と、彼の唇へ唇を重ねる。ファーストキスだった。

7・夕樹？

ふりふりのスカート、ひらひらしたレース、愛らしい花柄にきらきらした髪飾り。考えるだけで気分が高揚する。

塚田さんみたいな可愛い女の子に生まれたかった。けれども、僕は女の子になりたいわけではなくて、女の子の好きなものが好きなだけ。

女装だつて、最初はそんなに興味がなかつた。中学一年の時、たまたまインターネットで女装をしている男性のブログを見て、意外と出来るものなんだなつて思つたから、やつてみた。結果は今の僕につながつている。

今年のお正月にもらつたお年玉は、ほとんどが服に換わつていた。今では女装専門のネットショップもあるので、時間を見つけては品定めをして、家族に内緒で購入しているのが現状。

本当はメイクにも挑戦してみたいのだけれど、買う勇気がなかつた。買つたとしても、メイクの仕方が分からぬ。母さんに聞くのはまずいから、どうしようもなかつたりする。

だけど、美音が理解のある人で良かった。内心は「お前、変態なんじやねえの？」と、言われやしないかドキドキしていた。けれども現実は僕を嫌うこともなく、これまでと変わらずに接してくれて、本当に嬉しかつた。

「……なんつーか、完璧だな」

「え、本当？」

僕が思わず表情を明るくさせると、美音は言つた。
「悪い意味で、な」

「……」

やつぱり美音は意地悪だ。

僕がしょんぼりして床に座り込むと、美音が僕に手を差し伸べた。

「それじゃあ行こうぜ、お姫様」「ドキッとして、きゅんとする。

「う、うん！」

手を取つて立ち上がる。美音は今日、僕の願いを叶えようとしてくれていた。

「あ、ちょっと待つて」

はつとした僕は鞄から靴を取り出す。衣装に合わせたピンク色の厚底ワニストラップシューズ。

「……靴まで」

と、美音が少し目を丸くする。

「だつてこれがないと歩けないでしょ」

「そうか？」

「そうだよ」

実際に靴を履いて出歩くのは初めてのことなので、靴擦れしないかちょっと不安だ。こういう靴つて、けつこう痛いらしいし。

この時のために購入したポシェットの中には財布と携帯電話、家から持ってきた絆創膏と定期兼用のエコカード。よし、準備万端。意外とこのポシェット、色々入るんだよね。

「行こう、ミオ」

「おう」

美音が部屋の電気を消し、廊下へ出る。

相変わらず静かな家だった。

「本当に、誰も帰つてこないの？」

ちょっと心配になつて尋ねると、美音は笑つた。

「帰つてこないよ。姉ちゃんは大学の寮に入つてるし、両親は朝から晩までドライブデート

「ミオの両親つて、ラブラブだよね」

ちょっと羨ましいなと思いながら僕は言つた。すると美音はどこか冷めた調子で言つ。

「離婚しないように、無理してやつてるだけだ」

そんな言い方はひどいと思うが、彼の家庭に口を挟むことは出来ない。

玄関で靴を履き、青々と晴れた外へ出る。

「……ちょっと歩きにくく、かも」

厚底の分だけ重みが出るので、いつものよろこびには歩けなかつた。玄関の鍵を閉めた美音が僕を振り返つて言つた。

「手、繋ぐか？」

「ううん、いい」

いくら美音でも、一緒に手を繋いで歩くのは嫌だつた。なんとうか、僕の乙女心が暴走しそう。

もう九月も終わりに近づいていた。風はすっかり冷たくなつて、季節の移り変わりを感じる。

「うーん」

僕の方をじろじろと見て、美音が唸る。

「な、何？」

「いや……コイ、身長伸びちゃダメだなと思つて」

「ダメ？」

「うん。兄貴みたいになつて欲しくない」

「……そ、そう?」

美音のこの意味がいまいち分からない。確かにやつちやんは背が高いし、男らしい顔だけれど。

「それにほら、成長期来たらお前、その服似合わなくなるぞ」

「ええ!?

ドキッとした。男であるからには一刻も早い成長期を望むが、そう言わてしまつと複雑だ。ただでさえ、高内さんとは身長差がほとんどないというのに。

美音が僕から田を離し、僕は少し俯きながら歩く。

今日はこれから、二人で原宿に行く予定だった。ピンクを基調とした花柄のロリータドレスに白のハイソックスと厚底靴、白のレースがあしらわれたポシェット。ロリータするならやつぱり髪は

長い方が良いのでエクステでカバーして、頭にはピンク色のヘッドドレス。これこそ、僕が望んだお姫様。

マイクはしていないのですっぴんだが、眉を整えるくらいはした。もつとも僕はまだ顔が幼いので、上手くすれば女子中学生に見えるかもしない。それなら、別にマイクしてなくても良いよね？

ちなみに美音は、黒で統一したロックスタイルだった。本当は王子様スタイルが良かつたのだけれど、美音にそこまでさせられない。僕の隣を歩いてくれるだけで、ありがたいのだから。

幼い頃から密かに胸に秘めていた願望を、こんな風に形に出来ただけで僕は満足だった。僕はお姫様で、隣を歩くのが僕の王子様。愛らしいお姫様を、かつこいい王子様がエスコートしてくれるのだ。

「で？ 原宿行つてどうするの？」

駅が近づいてくると、美音が僕に尋ねてきた。

「歩くの。竹下通りとか、表参道？ とか」

原宿は僕の憧れだつた。ふりふりひらひらのお店がたくさんあるつて言うし、行き交う人も僕みたいな……否、ゴシック&ロリータの女の子たちだと聞くし。

「お前、原宿知らないな？」

見抜かれた。

「え、あ、うん」

「まあ、いいや。休日は人が多いから、はぐれないようにじろよ」と、美音は言った。

移動はちょっと窮屈だつた。ふわりと広がつたスカートは潰されし、厚底のせいで階段の上り下りも苦労する。美音がそばでサポートしてくれなかつたら、確實にこけてた。

原宿駅ではいろんな人たちが電車を降りて、僕たちもその中に交ざつた。

狭い通路の先に改札があり、美音が僕を見て言つ。

「あれが竹下」

改札の向こう、横断歩道を渡つた先に広がる賑やかな通り。

ドキドキする胸を抑えつつ、改札を抜ける。

「うわあ、人がたくさん

「だろ？」

行き交う人々で混雑し、賑わう。今にもはしゃぎ出したかった。竹下通りへ入ると、僕は何度目かになる視線を浴びる。電車の中ではおじさんやおばさんにじろじろ見られ、ここではむしろ同年代の子たちから憧れのような視線を向けられていた。僕、女の子だと思われるかな？

「ミオは、来たことあるの？」

がやがやする道を歩きながら、隣にいる僕の王子様へ言ひ。

「一回くらこな」

「そりなんだ……いつもは、どこ行くの？」

美音は少し考えると、僕を見て笑った。

「特に決まってないな。一度目は姉ちゃんの付き添いだったし、二

回目だつて大して遊んでねえもん

「そりなんだ

と、納得する僕。

思つていたよりもロリータ人口は少なかつた。どちらかといふとカジュアルや古着系が目立つ。たまに派手な色に髪を染めた人もいたけれど、それは本当にごく稀で。

「……意外と僕、目立つてる？」

すれちがう女の子たちが僕を見て何かひそひそと言葉を交わすのが見えた。

「だろうな。遠目に見たら可愛いんだけどな

「え！？」

「嘘だよ

「……もう、ミオってば意地悪なんだから

別に、男だとばれたって構わないのだけれど、やっぱり好奇の目

にさらされるのは怖かつた。だけど、それ以上に僕はこの可愛い格好で原宿を歩きたかったんだ。

「あ、良い匂い」

「クレープ屋だな。食うか?」

向かつて左の方にあるお店でクレープが焼かれていた。甘くて良い匂いがする。

「……うん」

悩みに悩んで、僕は頷いた。どうせお腹は空くのだから、先に腹ごしらえしたって良いだろう。というよりも、普通にクレープが食べたい。甘い物はそんなに好きじゃないけれど、今日は特別だ。

しつこいようだけど、僕は女の子の好きなものが好きであつて、可愛い女の子のやることと同じようにやるのが好きなだけだ。

僕は男性だし、ホモでもない。性同一性障害でもない。僕は大多数の男性がそうであるように、女の子が好き。

ただ、ふりふりひらひらの可愛いものが大好きだけの、男の子だ。

許されるなら毎日女装して過ごしたいし、可愛いものに囲まれて暮らしたい。

僕は夕樹。^{ゆいづき}男として生まれて男として育ち、男としての自覚がある。ただ趣味が少し、人と違うだけ。

人混みの中を歩くのにはもう慣れたが、竹下通りはやつぱり異常だと思う。疲れた。
夕樹はむしろ、夢を叶えて満足げ。以前よりも明るくなつた気さえする。

「滝口」

欠伸をしているおれの元へ、高内がやつてきた。

「何」

眠いんだけど、という含みを込めて言ひ。高内は教室内をちらちら見渡すと、言った。

「静かなところで」

「おれに告白でもするつもり？」

「違うわよ」

即答されでちょっとがっかりした。

仕方なく席を立ち、高内の後を追つて教室を出る。

あまり人の来ない奥の方まで来て、高内は立ち止まつた。

「昨日、あんたどこ行つてたの？」

「は？ えつと……原宿」

高内があれの田を見て、尋ねる。

「可愛い女の子と歩いてたでしょ？ 口リータの」
目が覚めた。

「……え、何のこと？」

知らない振りをしてみるが、時すでに遅し。

「あたし、見ちゃつたのよ。地元の駅で」

「へ、へえ」

「へえじゃないでしょ！ 誰よ、あの子」

「……えつと、おれの妹」

「あんた、妹いないでしょ」

さすがに中学からの付き合いだと、嘘で誤魔化すのも難しい。

「顔がよく見えなかつたから分からんだけど、なんか知つてる人のような気もするのよねえ」

「その時、いーしゃもいたんだけど、やつぱり分からないつていうばれるかと思つた。否、ばれるのも時間の問題か。
「その時、いーしゃもいたんだけど、やつぱり分からないつていうし……」

せめてクラスが違つていれば何とか誤魔化せそうなのだが、生憎と高内の言う可愛い女の子は夕樹なわけで。

「滝口、原宿でデートしてたの？ あんな素敵な子と？」

「いや、えつと、まあ、うん」

「羨ましい！ 教えなさいよ、誰なの？」

「それは言えない」

「どうして？ あ、疑つてるわね？ 安心しなさいよ、襲つたりしないから」

やつぱり高内はレズビアンなんじゃなかろうか。

「でも、言つなつて言われてるし」

と、おれは最後まで口を閉じているつもりで言つ。

「じゃあ、名前は良いから高校の子かそれ以外か、答えなさいよ」

「え？ えつと……」

高校の人だと言つたら、彼女はどんな行動に出るだらう？ 考えているとチャイムが鳴つた。

「あ、チャイム」

「大丈夫よ、まだ予鈴だもの」

高内は相変わらずおれの顔をじつと見つめていた。おれは困惑しながら、仕方なく「高校の子」と、返した。

ただでさえ疲れているのに、もつと疲れた。高内は可愛い女の子が大好きらしい。そんなことを平氣で口にするから、レズビアン疑惑が浮上するのに彼女は分かつていないのであつた。
更衣室で体操服に着替えていると、誰かが言つた。

「雨が降つて來たから体育館だつて」

ああ、やつぱりか。……傘、持つてきてねえや。

男子たちが口々に何か言つ中、夕樹もおれへ言つ。

「体育館か、何するんだううね」「なううね

「バレーかバスケあたりじゃね？」

と、返して、おれはジャージを羽織つた。

雨足は意外と速く、あつといつ間に大粒の雨になつた。体育館の屋根を叩く音がうるさい。

「やつぱりバレーだつた」

体育教師の指示で、みんなで手分けして館内にネットを張る。反対側では女子が同じようにバレーボールの準備をしていた。

「眠い」

やることがなくなると、おれの脳きに夕樹が言つた。

「保健室行く？」

「行つてどうするんだよ」

と、おれは笑う。そして、コートの中央でチーム分けをしているクラスメイトたちの中へまざつた。

おれはそこそこ運動神経が良い。クラスの中では背の高い方に分類されることもあり、バレーボールではしたくもないのに活躍出来てしまう。

一方、未だに成長期の来ない夕樹はちょこまかするばかりで、バレーボール向きではなかつた。サッカーなら、少しは上手かつた気がするのだけれど。

適当なチーム分けのおかげで夕樹と同じチームだつた。おれとしては、敵チームにいる夕樹の方をばんばん狙つて打つのが楽しいのだけれど、仕方がない。

チームメイトもすっかりおれを頼つてている様子だし、つまらなかつた。またこうして、退屈に授業が終わつてしまふのかと思うとむなし。

試合が終了し、コートの外へ出て休憩する。その間に別の奴らが

試合に臨む。

女子の方は男子よりも賑わっていた。体育会系の女子が多いからだろうか。

夕樹は相変わらず高内の方をちらちら見ていた。高内も体育会系ではあるが、たまにすこいドジをする。ほら、今もサーブが強すぎて壁にぶつかってるし。怪力だな、あいつ。

「やっぱり、運動出来る人の方が良いよね」

と、夕樹が呟き、おれは男子の試合に目を向けて言つ。

「大して違わないと思うけどな」

顔が良ければ運動が出来なくてもモテるし。

「……うん」

女子の試合が終わった。一方、男子の方は白熱していた。気分が乗ってきたのか、良い試合展開だ。

「だけど、男ならやつぱり、さ」

と、また何かを呟く夕樹。どうやら満足行くまで女装した反動で、今度は男としての自分に悩み始めたようだ。

「勝手にしろ。今更、男らしくなるうなんて

床を蹴る音がして振り向くと、夕樹の姿がなかつた。かと思えば、夕樹は高内の目の前で頭を抱えていた。どうやら、ボールが飛んできたらしい。

「藤堂くん！？」

「つ……怪我は、ない？」

「な、ないけど……藤堂くん、頭つ」

男らしかつた。好きな女を身を挺して守る。馬鹿らしいけど、男らしかつた。

夕樹の頭を直撃したボールを塚田が取りに行き、コート内にいる女子へ渡す。

「大丈夫だよ、これくらい」

と、笑う夕樹。普段は頼りない奴だけに、高内もドキッとしている様子だ。

「ダメよ、保健室行きましょ！」

と、高内は言つと、夕樹の腕を取つて体育館を出て行つた。分かれやすく慌てる夕樹が面白かった。

青春だなあ。

「ねえ、滝口くん」

「何？」

一メートルほどの距離をとつて、塚田がおれの隣へ座つてきた。
夕樹の様子が変だとでも言つつもりか？

「りのちゃんから聞いたと思つけど、昨日のあの子」

「……またその話か」

と、おれはうそばらうする。塚田は他の奴らに聞こえないよつな声
量で、言つた。

「藤堂くん、だよね」

はつと塚田を見る。ばれた！？

「わたしね、そういうの見抜く自信だけはあるの」

塚田の横顔は綺麗だった。正面から見た時とは違つて、大人びて
いる。

「でも、高内は」

「りのちゃんに言つと、色々危険な気がするから言わなかつたの」

「……そうか」

「うん。どうしてあんなことしてたのか、聞きたい気持ちはあるけ
ど、りのちゃんみたいに聞き出すことはしないよ」

「……うん」

大人しくて消極的で、自分から行動するのが苦手だと言つていた
はずの塚田とは、別人のように思えた。

「罰ゲームつて感じでもなかつたし」

塚田は見抜いていた。ただ、他の奴らに聞かれては困るだらうと
気を遣つてくれているのだ。

「お前って、良い奴だな」

素直に思つたことを口にすると、塚田はうううとおれの方を見て、

照れたように笑つた。

「そんなことないよ」

女友達なんてのも、案外悪くないかもしねり。

履歴書が無くなつた。買いに行くのもめんどくさい。

一次で受かつても、二次の面接で必ず落ちる。成績は悪くないのに、どうしてだ？ 答えは、俺の態度が悪いから。

とりあえず髪の毛は清潔な長さにして黒髪で、スーツもばっちり着こなして、鞄も無難なものを選んでいる。言つてしまえば、典型的なリクルート。模範的。

「なかなか決まらないわね、就職」「

と、嫌味に言つてくる母親。

「しようがないだろ、今はどこも募集人数が少ないんだ」「でも、やつちゃんならすぐ見つかりそうなのに」

期待されても困る。

「まだ来年だつてある。一つくらいは内定くれるつて」と、俺は自分へ言い聞かせるように言つ。でないと、就活そのものを諦めてしまう気がした。実際、何人かは家を継ぐとかフリーランで良いとか言つて、就活を諦めるらしい。

「そうね。前向きにならないとな」

母親の声援は嬉しいが、そんなことだけで頑張れるほど俺は器用じゃなかつた。

「最近どうよ？」

「二十五連敗達成

「奇遇だな、オレもだ」

サクマは相変わらずへらへらしていた。

「面接で、やる気あるの？ って聞かれた」と、俺が言つと、サクマは笑い出す。

「何それ、マジで？ お前、ダメじやん」

「どうも俺は、相手に何も伝わらない顔をしてこらしー

「あつははは、ひつでえー」

俺がひどいのか、それとも面接官か。どちらにしても、サクマの笑い声は「うざい」。

「だからもう一回、模擬面接受けようと思つてゐる」と、溜め息をつく。しかし、何度も模擬面接をして、「ばつちりよ、

藤堂くん」と、言われるだけなのだが。

「何が悪いんだろうな、本当に」

と、サクマも笑うのをやめて言つ。

「お前の場合はあれだな、控え室で大人しくしてられない」

「え、そうかな？　じゃあお前はあれだ、えつと、顔が怖い」

「は？」

俺が睨み付けると、サクマはまた笑つて言つ。

「クールなのは良いんだけど、感情表現乏しいじやん

……図星だつた。笑うことはしても、怒ることはしない。落ち込むことはしても、楽しむことはしない。それがここ数年の俺だつた。「それにさ、お前つて緊張しても、してないよう見えるよな」「そういうことは、もっと早くに言つてくれ」

と、俺は苦笑する。今更ありがたい指摘をされても、活かすまでに時間がかかるじゃないか。

「あれ、自覚なかつた？　悪いね、やつかさ夜司」

そう言つてサクマはまた、へらりと笑う。

しかし、そうと分かれば努力をするだけだ。緊張してるつてことをアピールして、もつとこいつ感情表現豊かに……めんどくさい。

「ダメだ、めんどくせえ」

と、机に頃垂れる。

「そんなんみんな同じだろー？　頑張ろうぜ」

「そうだな。頑張れ、サクマ」

「オレだけかよつ」

普段と変わらず突っ込みをしてくれるサクマ。大学では、こいつくらいしか仲良くしている相手はいなかつた。顔見知り程度の知人

なら他にもいるが、ぐだらない話で盛り上がるのはサクマだけだ。

「あーあ、お前が内定もらえれば、オレだって頑張れるのこなあ」

「何で?」

「だつてさあ、お前に負けたくないじゃん?」

「……そつか」

サクマはこう見えて負けず嫌いな一面がある。そのことを思い出して、俺はまた息をつく。

「一ヶ月くらい、何も考えないで過ごしたい」

「内定もらえりや、あとは好き勝手できるだろ」

「就活のことで頭がいっぱいになるのが嫌だ。うさん臭いだ

「確かに。けどさ、他の誰かのせいにしたといひで何も変わらねえじやん」

「そうなんだよな……でも、もしも一日だけ社会の枠から外れて生

活できるなら」

「……可愛い女の子と遊ぶ」

「妹はやらんぞ」

「な、幼女とは言つてないだろ」

「お前は危険人物だ。俺なら……」

そう言つて俺は顔を上げた。そのまま仰け反つて天井を見上げる。「好きな奴と、だらだら過ごしたいな」

社会の枠組みから外れたら、俺は両親の幸福に応えなくとも許されるのだろう。それなら、好みの奴と一緒にぐだらない話をしても、どうでもいいことをして、だらだら過ごしたい。

「お前、好きな奴いんの?」

姿勢を戻すと、サクマが頬杖をつきながら俺を見つめていた。

「いや」

そう答えを返すと、頭の中に美音の顔が浮かんだ。すぐにかき消して、俺はまた言つ。

「いたら、とにかく口止めしてくる

出会い系サイトを見ても、良い奴がいなかつた。年下がまず少ない。

二十六社目の面接を終えて、乗り換える途中にある喫茶店で軽く食事をした。俺みたいなリクルートスーツを着た奴らは、どこにいたって見かける。それだけみんな、切羽詰まって行動を起こしているのだろう。

時間はまだ十五時だつた。

あまりにも退屈で、けれども家に帰るのも億劫で、残り僅かなコーヒーを飲む振りをする。

悩んでいた。俺は他の奴らよりも感情を表に出すのが苦手だつた。俺の信頼する大人には、一度大きな声で泣けばいいと言われたが、そんなこと出来ない。なら一度、思い切り怒つてみると良い、とも言られた。けれども、何に怒ればいいか分からなかつた。

俺の目の前に立ちはだかる壁は、相変わらず破れない。まるで元の形を記憶しているかのように、いつも変わらずそこにある。

「そつちから連絡くれるなんて、嬉しいな」

と、美音は笑つた。

「良い奴がいなかつたんだ」

そう返して、俺は目的地へと歩き出す。

「おれ、今日どうして言われちゃつた」

「は？」

「夕樹に」

と、ここにこしたまま言つ。

俺は何も言わずに溜め息をついた。自分のしていることは、美音を喜ばせるだけだった。

これまでと同じようにホテルへ着くと、美音も少しは落ち着いた様子を見せる。

部屋へ入ると、美音が口を開いた。

「スース、かつこいいね。おれ、ドキドキしちゃう」と、抱きついてくる。

キスを乞う美音を振り払い、スースを脱ぐ。

「脱いじゃうの？」

「当たり前だ。汚れたら困るだろ」

美音は名残惜しそうにしていたが、構わずに俺はネクタイをほどく。

「……ねえ、夜司」

俺の方へ再び接近し、美音が問う。

「男女の間に、友情って成立するとと思つ？」

「は？」

思わず彼を睨んでしまつ。それはノンケ特有の疑問じゃないか。
「成立したつておかしくないだろ」

世の中にはレズビアンの女性とゲイの男性が友情結婚することだってあるのだ。むしろ、疑問に思う方がおかしい。

「……そつか

と、またキスを乞う。

呆れながら触れるだけのキスをすると、俺は美音へ背を向けた。

「シャワー、浴びてこい」

「うん」

美音は俺に従順だった。それが何故か悲しくて、俺は心底嫌悪に陥る。純粋な少年の恋心を、俺はもてあそんでいた。

よりにもよって、高内さんと塙田さんに女装姿を見られていた。美音から聞いた話では、塙田さんは完全にばれていた、という。確かに美音と高内さんは同じ中学校だから家が近かつたり、最寄りの駅が同じだつたりするのは当然だ。けれども、見られていたとは思わなかつた。もつと注意深く周囲を見ておくべきだつた。

ああ、どうしよう。

「でもさあ、高内は悪い奴じゃないし、塙田にはばれてるんだし、告白した方が早くね？」

「と、ある日の帰りに美音は言つた。

「告白つて言つても……」

戸惑う僕に彼は言つ。

「高内なんて可愛い女の子大好きつて公言してたし、むしろ評価上がつたりしてな」

そしてにやにやと意地悪な笑み。

僕は真剣に悩んでいるのに、美音はいつも不真面目だ。

「塙田さんは受け入れてくれたのかもしないけど、高内さんまで分かってくれるとは思えないよ」

無意識に俯いた僕はそう言つと、じつと口を開じた。

「……でも、ユイ」

十月の寒い風を感じながら、とぼとぼ歩く影一つ。

「おれにカミングアウトした時、どう思つた?」

「え?」

顔を上げて美音を見る。

「お前のこと、嫌だつて拒否しなかつたじゃん? その時、お前はどう思つた?」

珍しく真剣な目をしていた。

胸の痛いところを突かれたように、僕はドキッとして前を向く。

「……気分が軽くなつた。なんか、不安とか後ろめたさとか、そういうのがなくなつた感じ」「だろ？ それがあの二人にも分かってもらえたたら？」

「……す」ぐ、樂

家族には言えることを理解してくれる友人がいるのはありがたい。自分を隠す必要が無くて、ほっとする。

「言つだけ言つてみようぜ。少なくとも塚田は、理解あるはずだから」

「うん……そうだね」

美音が僕の背をぱしつと叩く。不思議と勇気が沸いてきて、僕は再び「うん」と、頷いた。

「わー、滝口の家入るの初めてー。お邪魔しまーす」と、遠慮無く上がる高内さん。塚田さんはむしろ遠慮がちに「お邪魔します」と、言うだけだ。

先に美音の部屋に来て荷物を置いていた僕は、これから起につる出来事を頭の中で繰り返しては、そのたびに緊張していた。「部屋で待つて。飲み物取つてくる」と、美音が奥に消えていき、僕は高内さんと塚田さんを彼の部屋へ案内する。

美音の部屋はすつきりしていた。子ども部屋と違うよりも、一人暮らしが住まうような部屋だった。

「あつさりしてるわね。男つてこんなもんなの？」

「でも、滝口くんつて感じがする」

口々に感想を漏らす二人へ苦笑しながら、僕は床に置いた自分の荷物を隠すように腰を下ろす。

間もなく美音がグラス四つとジュースのペットボトルを抱えて戻ってきた。

「つていうか、今日は何の用なのよ」

と、高内さんがガラステーブルにグラスを並べている美音へ言つ。

抱えたペットボトルをテーブルへ置いてから、美音は言った。

「お前の知りたがつてたロリータ、教えてやるよ

はつとする高内さん。

「え？ 誰だれ？」

美音はグラスにジュースを注ぎながら、あいとで僕を示した。塙田さんは何も言わずに様子を伺つてゐる。

高内さんは僕を見ると、もう一度美音へ尋ねた。

「え？ 誰？」

「だから、そこそこいるだろ」「

と、ペットボトルの蓋を閉める美音。

高内さんがまた僕を見て、今度は大きな声を出した。

「ええ！？ うつそー！？」

僕、苦笑い。塙田さん、おかしそうにくくすくす笑い。

「嘘じやないよなー、コイ」

と、美音が僕へ言つて、ついにその時は訪れた。

「うん。あの、その……」

言葉で言つのが難しくて、僕は鞄から服を取り出した。

「これが、その時に着てた服なんだけど」

ピンク色の花柄。ふりふりひらひら。

「……え、藤堂くん？」

「ぼ、僕の私物、です」

高内さんは目を丸くして、口をぽかんと開けていた。

「あ、あとポシェットと、エクステ……」

身につけていたものを取り出して見せると、塙田さんが言つた。

「ああ、だから髪の毛長かつたんだね」

開いた口がふさがらない高内さん。そんな彼女を見て、美音が意地悪に言つ。

「高内、その顔ぶさいくだぞ」

「つ！ だ、だつて、ちょ、ちょっと……待つて、あの、いーしゃ

？」

「何？」

「あんた、分かつてたの？」

「うん」

友人の裏切りに、高内さんはとつとつ頭を抱え込んでしまう。「それで、藤堂くんは男の娘なの？」

と、何事もなかつたかのように塚田さんが僕へ問う。男の娘、といふのは女装をする少年のことで、僕は言つてしまえばそうだった。「うん、実はそうなんだ。僕、女装が趣味で……」

全てばらした。塚田さんはいつもと変わらない笑顔を見せて、言う。

「そりなんだ。素敵な趣味だね」

「……え？」

予想外の反応に、僕は目を丸くした。

「わたし、そういうのって嫌いじゃないよ」

と、塚田さん。その微笑みはまるで、天使のようだった。否、女神か？ どちらにしても素晴らしい！

「ありがとう、塚田さん！」

すると突然、高内さんがテーブルを叩いた。びくっとして僕は思わず縮こまってしまう。

「藤堂くん、ひどいじゃない

「え……？」

「まさかこんな、こんな……」

と、肩を振るわせる高内さん。美音と塚田さんが見守る中、僕はただ彼女の様子をつかがうしかできない。

沈黙が部屋を包み、やがて高内さんがぱっと顔を上げた。

「可愛い子だなんて！」

「……は？」

「藤堂くんなら似合うわ！ 似合つに決まってるじゃない！ 何で今まで教えてくれなかつたの？」

えつと、あの、状況が飲み込めません。

美音に助けを求めるが、美音もびっくりしてころよつて首をひねるばかりだ。

「女装？ そんなの、どんと来いよー。」

と、高内さんは興奮した様子で叫ぶ。「いや、僕は何か、彼女の中の押してはいけないスイッチを押してしまったようだ。

「りのちゃん、一人が困つてから落ち着いて」

塚田さんがそう言って、高内さんを落ち着かせる。

「ああ、そうね。」「めんなさい」

と、息をつく高内さんだが、すぐにまた僕を見て叫ぶ。

「でも、可愛すぎる藤堂くんがいけないのよ」

「え、あ……」「めん、なさい」

思わず謝ってしまった。

「それよりも、その服着て見せてよ」

と、期待するような目を向けて、僕はようやく彼女に拒絕されていなかつたことに気がついた。というよりも、美音の叫ぶように評価が上がつた。

「じゃあ、お前ら外出る」

美音がそう言って部屋の扉を開ける。高内さんと塚田さんが廊下へでると、美音はすぐに扉を閉めた。

「良かつたな、コイ」

と、僕へ笑う。

「…………う、うん」

何だか胸がドキドキしていた。あの一人に理解してもらえて、それがどうか気に入つてもらえて……本当に良かつた。

高内がこんな奴だとは思わなかつた。ましてや、女装した男を見てにやにやするだなんて。

「かー わー いー いー」

と、携帯電話のカメラ機能を有効活用する高内。先ほどから、シヤツター音ばかり聞こえていた。

「ねえねえ、今度はメイクもちゃんとやるひつよ

「あ、良いわね！ あたし、教えてあげるっ

「え、本当に？」

「もつちろん！ ね、いー しゃ

「うん」

会話の内容もガールズトークに限りなく近い気がする。この部屋には男がおれ一人しかいないような感覚だ。

「ありがとう」

メイクを教えてもらえることがよほど嬉しいのか、自然と笑みを浮かべる夕樹。

そしてそれを、すかさずカメラに収める女子一人。……何が楽しいんだ？

まったくついて行けなくなつたおれは、ただぼーっとしていた。

高内はもしかすると、レズビアンではないのかも知れない。

ついこの前まではたまに話をする程度のクラスメイトと、一緒に

昼飯をする仲になつてしまつた。

「この雑誌、ずっと読んでみたかったんだ」

「そうなの？ じゃあ、貸してあげるね」

塚田からロリータファッションを中心に取り上げる雑誌を受け取る夕樹。

「ありがとう、塚田さん！」

嬉しそうにしながら、雑誌をめくつてみる。

「あたし、こういうのは見るのが好きなのよねえ」

「え、高内さんも着てみたら似合ひそつなのに」

「……お世辞?」

「ち、違うよ!」

ぱつと顔を赤くして、夕樹はまた誌面に目を落とした。どうやら高内は見るのが好きで、塚田の方が夕樹の趣味と似通つていらし。で、おれは夕樹の後について行くばかりで、相変わらず置いてけぼりだ。

「あ、この服可愛い」

女子と大差ない感覚で次々にページをめくつていぐ夕樹が、何だか遠く感じた。これまでは一番そばにいたはずなのに。

「滝口くんは、何か趣味とかないの?」

と、塚田が退屈にしているおれへ気を遣つてくる。

「趣味つつつても……漫画とか、ゲームとか、普通だよ」
自嘲するよつて言つて見せて、おれは後悔した。これでは会話が持たない。

「でも、あんまり本持つてなかつたよね」

「え、そうかな?」

「うん。部屋の中、あんまり物がなかつた様に見えたし」と、塚田。一度入つただけのおれの部屋を、彼女はぱつちり記憶しているらしかった。

「……まあ、借りて読むことが多いしな」

ゲームだつて、友人に借りてやるのがほとんぢだ。

「だと思つた。他に好きなものはないの?」

「え? うーん……」

おれは小さい頃から、何に対しても受け身だつた。他の奴らと同じように体育会系のクラブに入ったこともあるけれど、高校でも続けるほど好きじやなかつた。

強いて言つなら、姉ちゃんの影響で何枚かCDを買って聴いてる、

くらいかな。でもそれも、結局は聞き手といつ受け身だ。

「CDは買つてゐるけど、聞くだけだよ」

と、おれが答えると、塚田は言つた。

「『ペリー』したりしないの?」

「『ペリー』つて?」

「『ペーパン』。よく『ひじやない? 好きな』『ロージシャンを真似するつて』

塚田の口からそんな言葉が出るとは思わなかつた。どうやら彼女は、いろいろなことに精通しているらしく。

「いや、別に……」

と、おれが否定すると彼女はがつかりする。

「そりなんだ、残念。でもCD買つてるなんて、すごいね」

「……そうだな」

今の時代、ネットワークを経由すればどんな音楽も買えてしまつ。CDの売り上げは昔よりも落ちていると聞くし、おれのように買う若者もあまりいないといつ。CD、好きなんだけどな。

「わたしなんて、いつもネットで買つちゃうから、ちょっと羨ましいな」

と、塚田は言つ。それが心からの言葉なのか、そうでないのかは分からなかつた。

けれども、その後の言葉は妙に新鮮で。

「バンドやつてる人たちつてかつこいいよね。ギター弾いたり、歌つたりして、憧れない?」

そんな風に意識したのは初めてだつた。確かに音楽を作る人たちはすごいと思うし、演奏するのもすごいと思つ。ただ、憧れを抱くほどの興味はなかつた。

「……ああ、言われてみればそうかも」

結局おれは、人と違う道を歩いていると思い込んでいただけで、受け身というつまらない世界に捕らわれていたのか。

「滝口くんは、ライブとか行つたことある?」

「ううん、ライブは一度もない。姉ちゃんはよく行つてるけど」

「あ、お姉さんいるんだ？ ジャア、今度誘つてあげるね」

「え？」

目を丸くしたおれに彼女は言つ。

「わたしね、好きなバンドがいて、たまにライブ見に行くの」

「……へえ」

「りのちゃんは興味ないから別の人と行つてたんだけど、その子とあまり都合も合わなくなつちゃつて」

なるほど、だからおれを誘つて一緒に行こひ、といつわけか。

「滝口くんさえ良ければ、一緒に行こひ」

と、塚田が微笑む。

もしそれが嘘であつても、嬉しかつた。塚田はおれの世界を広げてくれた。新しい世界を教えてくれた。

夕方になると、たまにメールが来る。

『今夜、会えないかな？』

社会に埋もれた性欲を発散させようつといつか出会つたおじさんからだ。

夜司^{やつかさ}にキスされたあの日から、おれは彼のことばかり考えていた。それ以外のことが考えられないくらい、真剣に。

だからこういつた誘いにも、いつさい返信しなくなつていた。彼からのメールなら、すぐにでも返信を打つのに。

けれども、これを恋と呼んでいいのか、おれにはまだ分からなかつた。

夜司のことは好きだ、大好きだ。毎晩、会いたいと思つ。

夜司は大人だから、きっとおれの気持ちを知りながら、他の男たちと同じようにおれを扱う。それはとても悲しくて、苦しい。おれの気持ちが彼に届いていないのは、すごく嫌だった。

だけおれは、やっぱり彼から離れられて、まるで飼い主に従順な犬のように、夜司の元を手指してしまつ。

分かつていて、止められない。

苦しいのに、考えてしまう。

泣きたくなるくらい胸を痛めるのに、夜司はおれのことなどじつとも考えてくれやしない。

おれはいつだって、夕樹の後ろにいる彼を想つていてるのに。

「夜司、好きだよ」

四度目の夜だった。

「……ねえ、夜司」

おれに背を向ける彼の、痩せた身体にそっと手を触れる。

「夜司は、どうしておれと寝てくれるの？」

彼の身体がぴくっと動いた。

「分からない」

と、夜司が言う。

「分からぬけど、お前が一番、都合が良い」

「……おれは、犬？」

思い切って尋ねると、夜司は頷いた。

「ああ。綺麗な犬だ」

嬉しくなかつた。おれが本当は、愛情を求めて飢えていることを知つてるのは、夜司だけなのに。

「おれは夜司に恋をしている」

「……」

「それなのに夜司は、ひどいよ」

今更相手を間違えたなんて考えても、遅い。

ずっと背を向けていた夜司が、上半身を起こした。まさか、帰るだなんて言わぬいだろうかと思つていたら、夜司はおれを見下ろした。

「本当のお前は、どこにいる？」

目を丸くする美音をただ見下ろした。

「俺はお前のこと�이分からいんだ。お前は一体何者で、俺に何を求めてるんだ？」

聞きたかったことを言葉にすると、幾分か気が楽になつた。

「おれは美音、滝口美音。ゆいづき夕樹の友だちで、やつかさ夜司のことが好き」最初に出会つた頃よりも大人びて見えた。この頃の男子は成長期だから、身長だつて伸びる。

「おれがあんたに求めるのは、恋だよ」と、美音は身体を起こした。

俺の頬に手を添えて、キスをする。

「おれはやっぱり、恋がどんなものか分かつていなかから、それを夜司に教えて欲しい」

美音の手を取つて、今度は俺の方から口づけた。深く舌を絡めて、美音を侵す。

恋なんて辛いだけだ。ふつう大多数の世界に生きていれば、それも人生のスペイスとして楽しめるのかもしれないが、俺たちには辛いだけ。

「やめた方が良い」

「どうして？」

彼の細い首に右手を回す。

「お前が思うよりも、辛いものだ。どんなに苦しんだところで、最終的には何も得られない」

美音は微動だにしなかつた。じつと俺の目を見つめて、何か考えるようにしている。

「夜司は恋を知つてるんでしょう？ なら、おれにも教えてよ」

嘘だった。美音はすでに恋を知つている。俺に恋をして、十分に辛い気持ちを、苦しみを味わっているはずだ。

「その人に殺されたいと本気で願えるなら、それが恋だ」「もう片方の手を、美音の首に持つて行く。

「……殺されるのは構わないけど、おれは生きたいよ」と、美音は俺の両手を退かした。

「生きて、夜司に愛されたい」

「……そうか」

美音が本当に知りたいのは愛だ。そしてそれは、かつての俺が望んだものとまったく合致している。

「おれは夜司が好き」

と、俺の胸にもたれかかってくる。

俺は何も言わずに彼を抱きしめた。俺は、この幼い少年に対して愛しさを覚えていた。切なさやときめきとは違う、何か小さな亀裂クレータから宝石を取り出すような、慎重な痛み。

「弟には、何て言えば良い?」

「隠し通さないの?」

「いつかはばれる」

「……その時は、おれが先に好きになつたって言おう」

美音は俺のために犠牲になつても良いらしい。

「そしておれは、夕樹の友だちをやめる」

簡潔な答えだった。美音は俺の腕から抜け出して、顔を近づけた。「夜司はそのまま」

と、どこか遠くを見て言う。その意志の強さは脆かつた。触れれば、すぐにでも壊れてしまう。

「美音」

これ以上先へ進んでしまったら、俺は彼を愛してしまう。

弱くて、脆くて、危なげで、ませていて、生意氣で、意地悪で、馬鹿で、ガキで。臆病な本心を隠して、怖い物知らずを演じて、目の奥に孤独を押し込めて、強気な態度で笑う。

それでも、それこそが俺の求めた一つの理想。俺が支えてやるのだと、強がった弱虫。

……美音。社会の枠組みから外れても、そばにいて欲しいと願う。

「夜司？」

首を傾げる少年へ、そつと口づける。

「俺は大人じゃない。まだ未熟で、不完全だ。それでも美音、俺はお前を」

「おれだって不完全。だけどおれからしたら、夜司は完全。だからおれは、夜司が好き」

「……ずっと一緒にいよう」

大多数からはじき出された俺を、美音は優しい顔で受け入れた。

「それってプロポーズ？」

「ああ、そんなよつなものだ」

弟は元気だった。

何かと妹の世話を焼くし、家事も手伝う。

ぼーっとしている俺を見ては、呆れたように笑った。

「やつちゃん、暇なの？」

「いや、やることはたくさんある」

「じゃあやりなよ。退屈してないでさ」

そしてまた、忙しそうに家のなかを行ったり来たりする。

「……そうだな」

就職活動はまだ終わっていない。二十六、二十七とまた連続で落ちた。サクマも相変わらず連敗記録を更新し、未だに一人とも負け組だ。

大学も授業が始まり、今は文化祭の準備で忙しい。

「そうだ、夕樹」

「何？」

妹のぬいぐるみを大量に抱えながら、弟が俺の前で立ち止まる。

「お前ら、文化祭何やるの？」

「あー、何だろうね。分かんないや」

と、後をついてくる妹から逃げるよつに洗面所へ。

兄弟間の会話も、本当に少なくなった。ただでさえ五つも年が離れているので、関心事がされる。

「やつちやーん、ゆいがあそんであげてつて」と、何故か俺の元に来る妹。

「は？」

「やつちやんはたいへつだから、あーちゃんとあそぶの、どうやら俺の気を紛らわせようと弟が頼んだりして。悪くはないが、妹の相手をすると後からどうと疲れが出る。

「ゆいと遊べ」

「ちがうのー。ゆーがやつちやんとあそんでつてこつたのー」「やつちやんはな、これから仕事なんだ」

「じー」とー？」

「ああ、お昼寝するんだ」

「！ おひるねはおじー」とじやなこよー」

「大人には仕事なの」

と、立ち上がる。

「えー、だつてママは、おひるねはあーちゃんのおじー」とだつてつてたよ」

歩き出した俺の後に付いてくる妹。昔は可愛かったが、喋るようになるとこりいろいろ疲れる。

「じゃあ、朝子も立派な大人だ」

「あーちゃん、おとな？」

「ああ、大人だ」

「……やつちやん、おひるねしちゃダメ！ あーちゃんとあそぶの

「

頭も回るよくなつてきて、簡単には騙せなくなつてきた。

「じゃあ、一緒に寝るか？」

「おひるね？」

「そう、お昼寝だ。朝子にとつても俺にとつても大事な仕事だ」

「でも、くません、ゆいにとられちやつたの」

「は？」

振り返ると、妹は俺を精一杯見上げて言った。

「くまさん、きれいきれいするんだって」

合点がいった。妹のぬいぐるみを洗おうとに「ひらひら」。いや、もしかすると今現在洗つているのか。

「やつちゃんと一緒に嫌か？」

「いやじゃないけど、あーちゃん……つぶされちゃう」

切実な問題だった。どうも妹は、背の高い俺よりも背の低い弟の方が好きらしい。まあ、無理もないのだけれど。

「いいか、朝子。ゆいもな、いつかは俺みたいにでかくなるんだぞ」と、俺はその場にしゃがみ込んで言った。

「朝子だつて同じだ。大人になると、みんなでかくなる」「そうなの？」

「ああ。だからゆいだつて、いつかはお前を潰すんだ」

「潰さないよ！ 何言つてるんだよ、やつちゃん」

と、タオルで手を拭きながら弟がやつて來た。

「つていうか、何の話？」

「昼寝の話」

「やつちゃん、やる」とつてもしかして？」

「ああ、何か文句あるか？」

いつの間にか妹は弟の脚にしがみついていた。

「母さんに叱つてもらおつか？」

と、弟が呆れたように言つて居間へと向かつ。

俺は腰を上げると、その背中に舌を出してから浴室へ向かつた。

普段と変わらずに接している限りでは、弟が俺と美音の関係を疑つている様子はない。それよりも今は毎日楽しそうにしているし、不真面目な兄のことなんてちつとも気にしていないようだ。

それならそれで良かつたし、弟が高校生活をエンジョイしているなら、俺もあまり心配することはなかつた。

やつかさ
夜司^{やつかさ}が分かつてくれた。おれに『好きだ』と言つてくれた。「ずっと一緒にいよう」と。

昔は意味の分からなかつたバラードも、今なら理解が出来る。言葉だけじゃ足りない、想つほどに募る愛しあ。想つほどに、胸を刺す痛み。

「明日、お姉ちゃん帰つてくれる？」

と、夕食前に母さんが言つ。

「へえ、珍しいね」

適当に相づちを打つて食卓の上を見回す。いつもと変わらない簡単なおかずばかりだ。

「これ、探しておいて、だつて」

と、母さんは携帯電話の画面をおれに向けた。そこに書かれた指示を読んで、頷く。

「ああ、分かつた」

姉ちゃんが昔よく聞いていたCDだった。確かに引き出しか棚にあるはずだ。

「美音に直接メールすればいいのにねえ、まったく」

と、呆れた風に溜め息をつく。おれはただ笑いながら、帰りの遅い父さんを思つた。昔、本氣で一人が離婚の話し合いを進めていたのを知つているだけに、こいつの日は不安になる。その一方で、姉ちゃんはおれたちの存在が二人を喧嘩させることもあるのだと教えてくれた。だからたまに、おれは家以外の場所で夜を越す。

一人きりの夕食は会話が少ないおかげでさつさと終わつた。

忘れないうちに姉ちゃんの部屋に入つて目的の物を取り出しておこう、と考えてから「ごちそうさま」と、言つ。

食器を片付けることなく、姉ちゃんの部屋へ向かつた。

久しぶりに扉を開けると、変な匂いがした。電気を付けて、窓を少しだけ開ける。

冷たい空気が変な匂いをさらりていき、おれは机の引き出しに手をかけた。昔から変わらずにあるその中からCDを探るが見つからない。

仕方なく別の引き出しを開けてみたが、記憶にないのでやっぱり違った。

それにしても、何故今更CDなんて取りに来るのだろう。おれにCDコンポを譲ったから、CDももう聞かないと全部置いていつたはずなのに。

引き出しを全て探したが見つからず、おれは棚に目を向けた。本来は本棚のはずが、CDラックと化している。それもレンタルショップに並んでいるCDのように、ずらりと。

よく聞くCDを引き出しに入れていたのは五年以上も昔の話だつたと思い出す。きっと、姉ちゃんは家を出る際にすべてこの棚に入ってしまったのだろう。

おれが幼稚園に通っていた頃は、両親もまだ仲が良かつた。古い記憶では、父さんと母さんの好きだった曲に合わせて、姉ちゃんがおもちゃのピアノを弾いていた。おれはただ、その音楽に合わせて手を叩いた。

音楽一家とまではいかないが、両親ともに音楽が好きだった。姉ちゃんはその影響でCDを買つようになったと言い、おれはその姉の影響を受けて育つた。

「お、あつた」

一枚のCDを取り出して、ジャケットを見つめる。

今ではすっかりその地位を確固たるものにして、かつての栄光ばかりがテレビに取り上げられる四人組のロックバンドだ。おれも彼らの曲は好きで、たまに聞きたくなる。

塙田はきっと、曲を聴くだけではなく、バンドそのものに憧れを抱いているのだね。歌って、ギターを弾いて、ベースを奏で

て、ドラムを叩く。大勢の人に囲まれて、ステージでスポットライトを浴びる。そんな姿に。

姉ちゃんの部屋を出て、自分の部屋に戻った。

約半年前に譲り受けたコンポの電源を入れ、取り出したCDをセットする。

動作音がしたあとに一曲目が流れ出した。姉ちゃん曰く、叶わない恋を歌つた曲だ。

ベッドに座り、CDケースから歌詞カードを取り出して横へ置いた。

歌を歌うにしても、歌詞を書く人が必要だ。それも、メロディにあつた言葉でないとダメなわけだから、それって結構大変だ。普段、何気なく聞いている曲も、おれには想像できない努力の賜物なのだろつ。

CDに合わせて、小さな声でサビを歌う。

それから間奏。 ギターソロだ。

おれにはよく分からぬけれど、かつこよく聞こえた。アコースティックギターに代わって鳴り響くエレキギターの、ギュイーンという音。

叶わない恋は、最後にどうなるか分からずにつぶやく。ただ、あなたの幸せを毎日祈つていると歌うだけで、そこから先は何もない。当時はよく分からなかつたけれど、今はなんとなく分かる気がした。恋には二つの側面があつて、一つは辛い気持ちを味わうだけの苦しい面で、もう一つは相手の笑顔を望んだり幸福を祈つたりして安らかな思いに包まれる面だ。

つまりこの曲は、苦しいけれども相手のことを想つて、ただ幸せになつて欲しいと祈るものなのだろう。おれが夜司を想う時に感じる、彼さえ幸福でいてくれるならそれでいい、という気持ち。

「……ああ」

恋だ。これが恋だ。

後ろに倒れ、歌詞カードで両目を覆う。

けれどもおれは、夜司のそばにいたい。誰よりも人のそばにいて、幸せになりたい。結婚なんて出来なくて良いから、ただずっと一緒にいたい。

悲痛な声でヴォーカルが叫ぶ。あなたの幸せを祈っている……あなた幸せを、今はただ……そしてフローデアウト。

「カラオケ、行きてーなあ」

一曲目のポップなリズムに合わせるように、身体を起しす。歌詞カードをCDケースにしまって、ベッドを降りた。

おれも何か、始めてみよう。

翌日、学校から家に帰る途中で寄り道をした。楽器屋だった。そんなところに入るのは初めてなので、ちょっとドキドキしていた。

店内に並べられたギターはどれも輝いて見え、近くにあった一つをのぞき込んで値段を見た。一万と四千円だった。

奥の方へ行くと値段が上がった。先ほどとは桁が違い、さすがに高価すぎると思つてすぐに店を出る。

ギターは意外と高かつた。楽器だから当然といえば当然か。……でも、あれを軽音部の奴らは買って使うんだから、すごいな。だが、おれだって金がないわけではない。男たちと寝て手に入れただ金がほとんど手つかずで残っている。ただ、それを使ってギターを買うのは気が引けた。

「はい、これ」

おれがCDを手渡すと姉ちゃんは言った。

「ありがとー！ 大学でね、同じ寮の子なんだけど、趣味の合う友だちが出来たの」

「ふうん」

夕飯の支度で忙しくする母さんの代わりに、おれは姉ちゃんの向かいへ腰を下ろす。

「でね、CD貸してあげるって言つたんだけど、家に置いてたの忘れてて」

と、姉ちゃんは笑つた。

「つづーか、何で夏休み戻つてこなかつたの？」

「そ、うよ、美歌。忙しかつたの？」

と、母さんが台所から口を挟んだ。

姉ちゃんはCDを鞄にしまつて返す。

「だつて大した距離じゃないもん。帰つてこようと思へば一時間で着くんだよ？」

どうやら、めんどくさかつただけらし。

「だからつて今日みたいな日に来なくても」

と、母さんは困つたように言つたが、顔は嬉しそうだつた。

「大丈夫、『ご飯食べたらすぐ帰るから』

底抜けに明るい調子で笑う。姉ちゃんが大学の寮に入つたのは、この家で両親を刺激しないためだつた。それなのに、おれにはずつといじりにいりと言つ。

「で、高校生活はどうなの？ 楽しい？」

「うーん……まあ、楽しいかな」

と、おれが答えると、姉ちゃんは嬉しそうにおれの頭に手を伸ばした。

「そーかそーか。それは良かつた。好きな子は出来た？」

そう言いながら、おれの頭を撫でる姉ちゃん。一年前からおれが無断外泊するようになった理由を、彼女は知つてはいるはずなのだけれど。

「い、ないよ。仲の良い女子はいるけど」

と、おれは言つた。聞き耳を立てていた母さんが「あら、初耳」と、どこか嬉しそうに咳く。

「おお、青春だねえ。いいなあ、あたしもあの頃に戻りたいなあ」「姉ちゃんはどうなの？」

聞き返すと、姉ちゃんはおれの頭から手を離して言つた。

「楽しいよ、毎日。アルバイトはきつこけど、それも含めて楽しむやつてる」

ふふふ、と満足げに笑う姉ちゃん。おれは一つ息をついて、言った。

「それなら良かつた」

「あ、今、馬鹿にしたでしょー？ ちょっと見ない間にまた生意気になっちゃって、こいつは」

と、姉ちゃんはテーブルに身を乗り出しておれの頭を先ほどよりも強く撫で始めた。痛い。

「ちょ、姉ちゃん！ 痛いって、あ、ちょっと」

椅子から降りて避難する。しかし姉ちゃんは、久しづぶりに弟と触れあえるのが嬉しいのか、逃がしてはくれなかつた。

「みーおーんー？」

がしつと捕まえられ、また頭を撫で回されるかと思こいや、姉ちゃんは言つた。

「あれ、あんた大きくなつた？ 背、伸びてるじやん」

「え？」

姉ちゃんから解放されて、おれは普通に立つ。正面で向かい合つ姉ちゃんは、おれよりも五センチ近く小さかつた。

「あー、やっぱり大きくなつてるー！ 母さん、美音ったら可愛くない！」

騒ぎ立てる姉ちゃんに母さんが笑う。

「当たり前でしょ。男の子だもの」

「えー、あたしだつて背高い方なのにー」

と、文句する姉ちゃんにおれは呆れてしまつた。意識して親を笑わせようと必死になる様子は、まさに親孝行だ。おれにはやっぱり、出来そうにない。

「つてゆーか、あんた髪長いよ。テラロング」

「え？」

「切つてあげようか？ 男ならばつさつしないとねー」

と、手をはさみの形にしておれに向ける。

「別にいいよ。つつか、これくらい普通だしー。」

もちろん、そんな言葉で諦める姉ではなかつた。

「みーおーんー？」

と、再び迫つてくる姉ちゃん。危険を感じて逃げ出しあれだが、やつぱり姉には勝てない。だが正直、おれもいじめられるのが少しだけ楽しかつた。姉ちゃんに脇腹をくすぐられて、必死に抵抗をする。

それでも姉ちゃんはきつと、別れ際にまた言つのだ。

『父さんと母さんを泣かせちや、ダメだからね』

非行に走るな、という意味ではない。二人が上手くやつていけるよう常に見ている、ということだ。それと同時に、一人を刺激するな、というメッセージもある。

夕樹はおれの家庭を羨ましいと言つたけれど、羨ましいのは夕樹の方だ。夜司のような兄がいて、朝子ちゃんのような可愛い妹がいて、普通の両親がいる。

普通の、じく一般的な家庭。離婚なんて言葉を両親の口から一度も聞いたことのない、とても平和な家庭だ。

美音が珍しく一人で行きたいところがあると、先に帰ってしまった。

「藤堂くん、駅前の百円ショップに行こう」

「え？」

「百円を舐めちゃダメよ」

と、高内さんが声をかけてきた。いろんな意味でドキッとしたが、話を聞いていくとマイク道具は百円ショップで揃えられるから、というこことらしい。

「別に買うのは他の日でも良いんだし、今日は見るだけでも、高内さんがそう言って僕を見るので、田を逸らして頷いてしまった。

「そ、そうだね」

「よし、決定！ わたそく行きましょう、そつしましょう」

と、るんるん気分で歩き出す高内さん。普段はどちらかというとクールな印象の強い彼女だが、こうした一面もあり、とても可愛い。僕は気を取り直して彼女の隣へ立つた。

「塚田さんは？」

「いーしゃは今日、お稽古なんですって」

「けいこ？ 何かやつてるの？」

「ピアノよ。あの子、外見に似合つて音楽好きだから

「そなんだ、初めて知った」

二人で歩くのは、あの体育の授業以来だつた。保健室へ連れて行かれた後も、高内さんは僕のそばに付き添つてくれていた。

僕はもう、それ以来どうして良いか分からず、ただ高内さんはやっぱり素敵な人だと想うばかり。僕自身、頼りない性格なので、しつかり者の高内さんについてもらわなければダメなんだと思つ。

下駄箱で靴を履き替え校舎を出る。

高内さんはやっぱり笑顔で、いろんなことを喋つた。僕は頷いた

り、相づちを打つたり、話を聞いていて。

学校から離れたところで、高内さんは唐突に呟いた。

「あたしね、藤堂くんを見て気づいたの」

「何に?」

僕が首を傾げると、高内さんは足元に手を落として呟つ。

「女の子が好きなんじゃなくて、可愛い子が好きなだけ。あたしはやっぱり異性が好きだ、って」

ドキッとした。それは僕に対する告白なのか、ただのカミングアウトか、それとも……。

「だからね、その……」

高内さんが何かを言おうとして口ひもる。そんな彼女を見るのは初めてで、思わず胸がときめく。

そうしている間に駅前へたどり着いてしまった。行き交う人が多くなり、高内さんは言った。

「やっぱり何でもない」

「……そう」

彼女が何を言いたかったのか、僕は勇気が無くて聞けなかつた。百円ショップに入ると、高内さんは慣れた様子で化粧品売り場へ向かう。

その後に付いていくと、想像していたよりも数多くの商品が並べられていた。

「とりあえず基本はファンデーションとチークに、アイメイクはこつち

と、高内さんが隣の棚を指さす。

「これ、全部百円?」

「もちろんよ」

「……すごいなあ

見ているだけなのにわくわくしてきて、僕は思わず財布を探つた。所持金は……一千一百円。そうだ、今日は漫画を買おうと思つて多めに持つてきたんだつた。

「買う？」

と、高内さんが僕の顔をのぞき込んできてびくつとした。

「あ、えっと……悩んでる」

「そり。まあ百円だし、買って損はないと思つけどね」と、高内さんが別の棚に目を向けて、僕は小さく息をついた。確かにマイクはしてみたいし、いつかは買つつもりでいた。けれども、今日買うべき物か？

「あ、藤堂くん」

呼ばれて振り向くと、高内さんは手にした何かを僕へ差し出した。「マニキュアも一つくらい持つてると良いかもよ」

それは僕の好みときわめて近いピンク色のマニキュアだった。口リータにも似合いそうだ。

「確かに良いかも」

と、高内さんからマニキュアを受け取つて眺める。これも百円なんだよね……うーん、買おうかな。

結局僕は高内さんに勧められたもの全てを買つてしまつた。基本的なものばかりではあるが、化粧水や化粧下地なんかも売られていたので次はそれらも買つてみたいと思う。

そんなに大きな買い物じゃなかつたので鞄に入つた。これなら家族にばれないで済む。

「ネットでもマイクのやり方つて載つてるから、そつこいつのを見て何回か試してみると良いわ」

「うん」

「慣れるまで大変だけど、上手くいくと嬉しいし」

「うん」

「自分の顔を知るのにも良いのよ、マイクつて」

「うん」

電車の中で一人、がたん」とんと揺られていた。

「藤堂くん、話聞いてる？」

「うん。……え？」

はつとして、僕は高内さんを見た。

「もひ、おもちやを買つてもらつた子どもみたい」

と、呆れる高内さん。まったくその通りで、僕はすっかり浮かれていた。今日の夜、みんなが寝静まつた頃にさつそくやってみようと考えていたのだ。

「可愛いから許すけど」

どこかすねたように言つて、高内さんは口を開じた。僕はただ「ごめん」と、謝る。

高内さんが降りるのは僕よりも三つ後だつた。アナウンスが僕の降りる駅名を告げて、ちょっと悲しくなる。

がたんごとん、会話のない二人。

徐々にスピードを落とした電車が、駅に着く。

「じゃあ、また明日」

と、僕は席を立つて扉の方へ。

開いた扉の先に足を踏み出ると、後ろから彼女の声がした。

「藤堂くん！ あたしね、あたしひ」

立ち止まつて振り返ると、必死な様子で高内さんが扉のそばに立っていた。

「藤堂くんのことが、好きなの……！」

「つ……！」

恥ずかしくて顔が真つ赤になる。高内さんはすると、すつきりした様子でにっこり笑つた。

「返事、待つてるから」

「た、高内さん！ 僕、僕も」

アナウンスが鳴つて扉が閉まる。言わなきや、と思つた。今伝えないと、後悔する。

「僕も高内さんのこと、前から好き！」

扉の向こうで彼女が頷いた。動き出す電車を見送つて、僕は今起きた出来事を頭の中で反芻する。……告白、しちゃつた。

だつて、彼女が僕のことを好きだつて言つから……りよ、両想い
つて奴だ。そう、僕は高内さんとめでたく両想いで……ぼ、僕たち、
付き合うのかな？ 恋人になつたら、まずは何をするんだつけ？
えーと、キス？ あ、セックス、はもつと親密になつてから。

ああ、嬉しそうに！

しかし、僕の一田はまだ終わりではなかつた。

「朝子、正直に言つてじらん。どうしてこれがここにあるの？」

両親が僕を見ていた。

「……い、いすのした、にあつた、から」

と、朝子は目を逸らして言つ。それが嘘であることを、僕は見抜いていた。この前と同じ場所にあるはずなんてないのだ。

「嘘はダメだよ、朝子。怒つてないから正直に答えて」

「つ、ひぐつ、あ、あーちゃん、あーちゃん、なにも……つええー
ん」

泣いてしまつた。子どもは卑怯だ。

僕は朝子から取り上げたヘッドドレスを手に、自分の席へ着く。何もかもが終わりだつた。

「今まで、隠してて」めんなさい」

と、僕は父さんへ言つた。母さんが朝子をあやし、僕はそんな妹を憎らしく思う。

「ちょっと待つて」

そう言つて立ち上がり、僕は自分の部屋から秘密の箱を取り出し、その中のいくつかを手に戻つた。

「僕、こういう服を着るのが、趣味なんだ」

テーブルにそれらを置くと、両親はほぼ同時に溜め息をついた。

「女装してたのか」

と、父さんが言つ。

「…………うん」

「朝子は知つてたのね」

大声で泣きわめく朝子の背をぽんぽんと叩く母さん。

知つていたと言うより、僕が遊びのつもりでヘッドドレスを付けてあげたのをしつかり記憶し、かつそれを朝子は気に入つていたんだろう。だから僕の部屋に入つてはヘッドドレスだけを盗み出し、お気に入りのぬいぐるみにかぶせていたのだ。

「でも、僕はただ女装するのが好きだけだよ」

誤解しないで欲しいと言うと、父さんは何も返してくれなかつた。「僕は女の子が好きだし、彼女だつて出来た。だから、僕のはただの趣味なんだ」

玄関の方から音がした。ビーッや、やつちゃんが帰つてきたらしい。

「女の子みたいな可愛い物が好きで、僕は決して男の人人が好きとかじゃない」

「……………」

疲れ切つた顔でやつちゃんが顔を出す。母さんがテーブルの上を指さすと、やつちゃんはそれを見て目を丸くした。

「夕樹が女装していたんだ」

と、父さん。

僕はさらに居心地が悪くなつて、何も言えなくなつてしまつた。

「……………女になりたいとか？」

「違う！ 僕はただ、可愛い物が好きなんだ」

やつちゃんの質問に僕が返事をすると、やつちゃんは興味がなさそうに言った。

「ただの趣味なら、特に問題ないだろ」

と、自分の部屋へ行つてしまつ。見放されたような気がして寂しくなる。

けれども、僕の言いたいことをやつちゃんが代わりに伝えてくれていた。ただの趣味なら問題はないはずだ。

父さんが溜め息をつきながら寝室へ身を隠し、母さんはまだ朝子

をなだめていた。

僕は拳をぎゅっと握りしめて、父さんでも聞いえたような声で言つ。

「やめないと叱られても、僕はやめないから。」

だって好きなんだもの。」

自分の部屋に入つて俺は息をついた。胸がドキドキしている、あの重たい空氣と弟の女装趣味カミングアウトで。

つてゆーか、何だあの服。ふりふりでひらひらで、ゴスロリとかロリータとか、もうコスプレみたいなもんじゃないか。それをあの弟が？ 否、確かに弟は昔から気が弱かつたし頼りなかつたし、小さい頃はいつもぬいぐるみを抱いてて、それはそれで可愛かつたけれど……そういう趣味だったなんて。

「ああ……」

その場にしゃがみ込み、頭を抱える。両親がどう思つているか確かめもせずに逃げ出してしまつたことを、俺は後悔していた。弟の趣味が受け入れられなかつたら、俺はどうなる？ 勘当されるのか？ 考えたくない。

立ち上がり、鞄を机の上に置く。上着を脱いで、適当に放り投げた。

隣の部屋から物音がした。弟も自分の部屋に逃げたらしい。俺がベッドに腰を下ろすと、壁の向こうからがそこそと音がした。あの服をしまつていいのだらうか。

「……」

たぶん、ここで俺が声を出せば弟にも届く。壁の厚みは大したものじゃなく、ちょっと大きめの声で喋れば問題ない。

けれども何を話したら良いかが分からなかつた。弟はきっと落ち込んでいるはずだ。救いの手を差し伸べてやりたいと、本当に思つ。『やつちゃん、ありがとう』

ふいに弟の声がしてびっくりした。俺が先に声をかけるつもりだつたのに、先を越されてしまった。

「……なあ、夕樹ゆいじゅ」

壁の方に身を寄せて、俺はまともられない考えを口にする。

「あのや、俺は、やの……お前が女装するのは構わないと思つてゐる」

『……うん』

「父さんと母さんがどう思つたかは知らねえし、どうしてばれたのかも分かんないけど……俺は、気にしないから」

弟も壁のそばにいるらしい、ひとつともたれるような音がした。
「つーか、家族だからって何でも受け入れられるものじゃないと思つし、隠しておきたい」とのひとつくらいこ、みんな持つてるだろうし」

『やつちやんも、隠し事つてある?』

「え、俺? 俺は……まあ、そうだな」

弟よりもひどい隠し事を俺は持つていて。口にすると、家庭が崩壊しかねないほどの爆弾を。

「言いたくないことが、ひとつだけある。聞かれても、答えたくないことが」

『そりなんだ。じゃあ、聞かないでおくれ』

「うん……だから、その、お前はお前のままで良いよ。女装したきやすればいいし、無理して男らしくすることない。今までと変わらずに過いさせよ」

俺の口から出る言葉は俺が聞きたい言葉だった。カミングアウトした時、そうして受け入れて欲しかった。

『……ありがとう』

弟の声が少しだけ震えていた。鼻をすする音がして、俺は弟が泣いていることを知る。

「これくらい、当たり前だ。俺はお前の兄貴なんだぜ」

壁一枚隔てた向こうで弟がくすっと笑う。

『うだね。……ありがとう、お兄ちゃん』

『おう』

数年ぶりにお兄ちゃんと呼ばれて胸がくすぐったくなつた。

しばらくの間、時々聞いてくる弟の嗚咽を聞いていた。

「酒でも飲むか」

『……僕、まだ高校生だよ』

「今夜は特別だ。飲みたくないなら、俺が代わりに飲んでやるよ」

『……飲む』

俺はにっこり笑って、弟へ言った。

「じゃあ、こっち来い」

弟が涙を拭いて立ち上がる。自分の部屋を後にして、俺の部屋の扉を叩く。

すぐに俺が扉を開けてやると、弟は泣き止まない顔のまま微笑んだ。俺がカミングアウトした時には、真っ先に弟に受け入れて欲しいと思った。

「お前、知つてたんだな」

いつものホテルで、俺は言った。

「え、何のこと?」

と、美音は首を傾げて俺を見る。

「夕樹のことだ。あいつ、女装が趣味だつた」

「……ああ、ばれたんだ?」

窓際に立つと、遠くにちらつと夜景が見えた。

「妹がな、あいつの衣装を盗んで、それで発覚したらしい」

「そつかあ。朝子ちゃん、お手柄だね」

美音が隣へ立ち、俺と同じ方角に目を向ける。

「だが、あいつはノンケだ」

「うん、知ってる」

「女装したり、可愛い物を集めるのが趣味なんだと」

「そうそう。よく知ってるね、夜司」やつがさ

俺は美音を軽く睨み付けた。

「俺を何だと思ってる?」

「就活で忙しい大学生」

「そうでしょう? と、言わんばかりに美音が上目遣いをしてくる。

「……そうだな」

ベッドへ歩み寄り、無造作に寝転がる。

「あれはコスプレみたいなもので、究極的には自己満足だと話した
ら、母さんは理解ってくれた」

美音が俺の頭の横に腰を下ろす。

「お父さんは？」

「何も言わない。面倒なことが嫌いな人だから、関わりたくないん
だろう」

「寂しいね」

「そうか？ 生まれてからずっと変わらないからな。でも、俺はあ
る人の気持ちが分からぬ。弟も、そうだと思う」
美音の左手が俺の頭を撫でた。額にかかった髪を横へどけて、美
音は言う。

「おれもそんな感じだよ。両親のことが分からない」

「……そういうや、お前の家つて」

と、俺が視線を向けると、美音は言つた。

「姉ちやんがいるけど、今は大学の寮に入ってる。だからおれと両
親の三人暮らし」

なんとなく納得した。美音はきっと、親との距離が遠いのだろう。
「だから、こうして外泊しても怒られないんだな」

「え、おれ何も言つてないのに」

目を丸くしながらも笑う美音。その、少年から大人へと変わりつ
つある手を取つて、手のひらに口づけた。

「ごく普通の家庭なんてどこにもない。誰だって、何かしら問題を
抱えているものだ」

「……そうだね」

美音が寝転がり、俺の頬にキスをする。

「今日の夜司は、ちょっと哲學的」

「いろいろ思うところがあつてな。弟がカミングアウトして、俺も
ようやく現実に直面した」

「……カミングアウトするの？」

「すぐにはしなこと。心の準備が必要だ。だけど、怖くて出来そうもない」

と、俺は溜め息をつく。

「おれもきっと、出来ないなあ。つづーか、おれの場合は本氣で家^い庭^えが壊れる」

みんなばらばら、ぐしゃぐしゃに壊れて……親子の縁も切れる
美音の言葉は、張りつめたピアノ線のようだった。切れそうで切
れない、切ることが出来ない。

「だからおれは、ずっと黙ってるよ。夜司^のことも、ばれない限り
は誰にも言わない」

と、俺の方に身を寄せて、田を開じる。

「……俺は、でも、いつかは言わなくちゃ。今まで隠し通せると
思つたけど、現実は甘くないんだ」

美音の呼吸音。

「女と結婚したって離婚したら意味がない。なら、弟のように主張
する方が良い」

自己主張をして、社会に反していくても自分は自分だと、声高く叫
ぶんで。

「やっぱり俺、ダメなんだ。どうしたって、男を抱きたいと思つ」

「それで良いよ、夜司。もしカミングアウトして、両親からひどい
仕打ちを受けた時は、おれと一人で駆け落ちしよう」

田を開けた美音がそう言つて、俺の頭の横に手をついた。俺を見
下ろす体勢になつて言つ。

「それで、二人幸せに暮らすの。おれは夜司のそばにいられるなら、
今まで築き上げてきた物全てを捨てても構わない」

顔を近づけてキスをする。

美音の言つていることは空想だつた。男一人が駆け落ちして上手
くやれるはずないし、それこそ海外へ行かないと俺たちは祝福され
ることなどない。

「無理だ。お前はまだ子どもだし、せめて大学を出ないと今の時代、

職にありつけない」

「フリーーターで良いよ」

「アルバイトだって、そう簡単には見つからないぞ」

「……じゃあ、身体売る」

と、美音が俺を見下ろした。俺は少し戸惑つて、彼へ言った。

「もう、やめたんじゃなかったのか？」

美音は答えなかつた。別に今更、彼を独り占めしたいとか、他の男に触れさせたくないとかを言つつもりはなかつた。初めは俺も、そつち側の人間だつたから。

「お前が何しようと勝手だ。けどな、惚れさせたり、他の奴に惚れるのだけはやめろよ」

と、俺は腕を伸ばして彼を抱きしめた。美音が力を抜いて、息をつく。

「おれだって同じこと考えてるよ」

美音の胸の鼓動を感じていた。生きている、その当たり前のことが愛しかつた。

夜司の様子が変なのは気づいていた。でも、夕樹の女装癖がばれたなんて知らなかつた。学校でそんな話はしなかつたし、それどころか高内と顔を合わせてはじぎまきしていた。おれはそつちのことばかり気になつて、まさか藤堂家にそんな出来事があつたとは思わなかつた。

「ねえ、夜司」

長い間抱き合つてゐるのに耐えられなくて、おれは口を開いた。

「今日は、一緒にシャワー浴びよ!」

夜司は間を置いてから返答した。

「ああ」

まだ彼は、考え事に夢中になつっていた。

夜司から離れてベッドを降りる。

出来るだけ明るい調子を装つて風呂場へ向かつたが、振り返ると夜司はようやく身体を起こしたところだつた。

おれはそんな彼の動きを見つめる。のろのろとこちらへ来るのを確認し、おれは脱衣所で一足先に衣服を脱ぐ。

その内に夜司も服を脱ぎ始めて、やつぱりおれは先に風呂場へ足を踏み入れる。シャワーから熱いお湯を出していくと、夜司がやつと入ってきた。

おれを見つめて、顔を近づけ、キスをする。深く深く舌を絡めて、夜司の骨張った手がおれの腰を抱いた。

風呂場でのセックスは最高だつた。今までと違つて、今夜はより深いところで繋がれた気がする。

「おれが、やっぱり運命だなつて思つんだ」

「は?」

ぬくぬくしたベッドの中で、おれは隣にある彼の体温を確認する。

「おれと夜司は、出逢つべくして出逢つたんだ。わざわざ、わざわざ確信した」

「わざわざして、こいつ？」

「やつてる最中」

夜司が呆れた様子で溜め息をついた。

「勝手に言つてろ」

普段の彼に戻っていた。もう難しいことは言わないだろ？と思つて、おれは言つ。

「最初に会つた時は、普通の大学生としか思わなかつた。だけど、今では週に一回は会わないと落ち着かないんだ」

夜司は反応しなかつた。

「学校は楽しいし、友だちだって出来て満足してゐるはずなのに、それ以外の時間はいつも夜司のことを考えてるよ」

「……そつか」

「夕樹の前で夜司の話をしそうなるへりつ、おれの中は夜司で溢れてる」

夜司も同じ気持ちだと良い、と思つ。けれども、夜司は言つた。

「お前が羨ましいよ

「え？」

彼の左手があれの頬を撫でた。

「俺はもう、そんな恥ずかしことと言えない」

否定の言葉のように聞こえ、おれは不安になる。

「でも、夜司だつておれのこと」

「そうだな、好きだ。守りたいと思つ。だけど、今の俺はもっと他に考えるべきことがいくつもある」

やっぱぱり否定だつた。夜司の言つ「好き」は、おれの「好き」とは違つ。

「じゃあ、おれのどこが好き？」

「そうと知つても縋りつきたくて、聞いてみた。」

夜司はおれをじつと見つめてから、おれの右手に指を絡める。

「弱いところが

「……」

何かが違っていた。おれは彼から愛されているはずなのに、それを実感できる返答ではなかった。

「確かに ore は弱いよ。けど、おれが聞きたいのはそういうことじやない」

繋いだ手を離して、背を向ける。

「やっぱり、お前は分からないな」

と、夜司が言った。おれも、夜司のことが分からなくなっていた。好きなだけじゃ、ただ身体を繋げるだけじゃ、何にもならないってことなのか？ こんなにも愛しているのに。

「だけど美音、お前は……きっと何か、勘違いしている」

「何かって何？」

「分からない。お前はまだ子どもだから、何でも思い通りになると思つてるんだろう」

「……思つてない」

無意識にあつた自意識が疼く。おれは、家族のこと以外では何も思い通りに出来るはずだった。

「あと……お前は、お前が思つてているよりも大人じゃないぞ」

その通りだった。おれは子どもだ。昔よりは大人だけれど、やっぱりまだ子ども。

「もしかすると、弟の方が大人かも」

「……嘘だ」

夕樹の方がおれより上なんて嫌だった。おれの方がいろいろなことを知つてゐるし、大人のはずなのに……ただ、そう思いたいだけの自分がいることも分かつていたから、なお嫌になる。

「嘘だ」

もう一度呟いて、おれは身体を丸める。

夜司は何も言わなくなると、やがて寝息を立て始めた。

おれは何か、間違えているのだろうか。何か誤解をして、何か正しい道を正しいと思い込んでいるのだろうか。考えたつて答えは出ないのに、答えが欲しくて苛々する。

「ねえ、ミオは文化祭どうする?」「え?」

はつとして夕樹の方に目をやる。

「文化祭だよ。受付とかやる?」

と、夕樹は首を傾げた。おれはまったく興味がなかつたが、今はホームルームでその話し合いをしている最中だつた。おれたち一年はアトラクション系の出し物をするのがこの学校の通例だ。

「まあ、ただの迷路だからそんなに人数は要らないみたいだけど」そう言つて夕樹が黒板の方に目を向け、おれもそちらに視線をやる。黒板には「一日目」「二日目」と書かれており、それぞれが三つの時間帯に区切られていた。一つの枠の最低人数は三名だ。

「……半分以上は仕事無し、か」

おれは呟いて顔を戻し、夕樹も前を向いて頷いた。迷路は全員で作るが、それが終わつたら後は好きにしていいと言つことだ。だつたらおれは面倒なことはやらない。

「興味ないからバス」

「え、やらないの?」「やりたいの?」「やりたいの?」「え、えっと

と、夕樹が黒板の方をちらちらと見やる。一日目の午後に、高内と塚田が早い者勝ちとでもいうように自分たちの名前を書いていた。

「つづーかさ」

おれは呆れた顔を夕樹に向けた。

「お前、あいつと付き合つてるの?」「えっと

と、夕樹が俯く。以前、塚田にも聞いてみたが「どうだろうね」としか言わなかつた。高内からそんな話は聞いていない、という

ことだつた。

「あの、何かね、一応その、両想いにはなれたんだけど、まだ発展途上つて言つか……その……」

どうやら、学校ではなかなか一人きりになれないでの、確かめようがないらしい。

「電話すりやいいじやん。番号知つてるだろ?」

「う、うん……そつなんだけど、勇気が無くて……」

女々しい。

おれは呆れると、夕樹の背を押して教室の前方へ向かつた。

他の女子たちが一日目の枠に名前を書いていたが、構わずに俺は白いチョークを手に取る。

「さつさと書け。お前見えてると苛々する」

と、おれは夕樹へチョークを差し出した。

「……」

夕樹がそれを受け取つて、高内と塚田の下に「藤堂」と書き入れる。きっと塚田は空氣を読んで、チャンスがあれば、高内と夕樹を二人きりにしてくれることだらう。

席へ向かうおれに塚田が遠くから声をかけてきた。

「滝口くんはやらないの?」

「悪い、興味ねえんだ」

と、おれは少し大きめの声で答え、自分の席へ着く。

夕樹は何を思つたのか、おれのそばを離れて一人の方へ行つてしまつた。別に構わないが、他の男子のことも少しは考えてやつてほしい。女子と仲良く話が出来る男子なんて、最初はおれくらいしかいなかつたんだぞ。入学して半年経つた今でも、未だに女子と会話の出来ない男子は何人もいる。

そしてこれは勝手な憶測だが、じく一部の男子は塚田に気があるはずだ。そんな彼女たちと仲良くする夕樹は、きっと羨ましい以外の何者でもない。まあ、初めにその視線を向けられたのはおれだったが。

「……」

でも、変わったなと思う。夕樹は初め、まったくイケてない奴だった。おれも好んで地味にしているから、ちょうど良い相棒だと思ったのに、今では自分から女子に声をかけられる男になっていた。おれと高内のやりとりを見近に見ても、決して口出ししなかつた奴が。

人はきっと、それを成長と呼ぶのだろう。あいつは変わった。確かに変わった。おれを置いて、大人に近づいていた。
夜司の言葉の意味がようやく分かった。けど、分かりたくないなかつた。

机に顔をうつぶせて、眠るふりをする。おれは変わっていないなかつた。その弱さ故に、変わることが出来ないでいる……。

17. 依紗 ? (前書き)

2 / 1
一部修正。

今日の滝口くんは「機嫌斜め。プライベートで何かあつたのかな？」
一方、藤堂くんはいつもと変わらない。りのちゃんとの仲は田ごとに深まっている様子。うん、それは良いことだ。ヘタレ男子が成長していく様を見るのは面白い。出来れば、りのちゃんから詳しい話を聞きたいけれど、彼女は色恋に慣れていないからあまり話してくれない。

入学して間もない頃は、藤堂くんは受けだと思っていた。自己紹介の時に言葉を噛んだから。滝口くんは攻めだと思っていた。どちらかといえば背が高いし、自己紹介がとても簡潔だったから。

そんな二人が仲良くしてゐるのを見るのは楽しかった。たまたま気の合つたりのちゃんは滝口くんと同中だつたから、なおさら観察しやすかつた。

でも、まさかりのちゃんがあのヘタレに惚れるとは……人つて分からぬいなあ。

ホームルームが終わつてりのちゃんと一緒に教室を出よつとした
ら、藤堂くんが割り込んできた。

「あの、一緒に帰らない？」

と、相変わらず弱氣な誘い。りのちゃんが「うん」と、女の子らしく答える。

藤堂くんの後ろには滝口くんもいたが、彼はやつぱり不機嫌な様子だつた。

みんな名前がた行なので、自然と下駄箱で混雜した。高内と滝口なんて隣り合わせだから、相変わらずのやりとりが聞けて面白い。

「あ、滝口邪魔」

「お前がな」

それから外へ出て、夕暮れの空気を吸う。

駅へ向かって歩き出すと、最初は四人並んでいたのが、自然と二つに分かれる。りのちゃんと藤堂くん、後ろにわたしと滝口くんだ。前方の一人は他愛のない話をして盛り上がっていた。本来はもつと、違うことを話すべきだと思うんだけどな。

滝口くんは何か考えているのか、ずっと口を閉ざしたまま。わたしもそんなに話したいことがないから、構わなかつた。ただ……彼は、やっぱり、藤堂くんの後ろ姿に何かを見ているような気がした。

「わたしは別に、滝口くんと付き合いたいわけじゃないけど」

口にしてみると、隣の彼がわたしを見下ろした。

「滝口くん、もしかして誰かに恋してる？」

「……は？」

一瞬遅れて彼が目を丸くした。これは図星かな。

「だつて、そんなに思い悩む滝口くん、初めてだよ」

彼が口を閉ざした。わたしのことをどう思つているかは知らないが、わたしが人を見抜けるということは知つてはいるはずだ。

「まだ十月だけど、わたし、ずっと見てたんだ。だから分かるの」

「……塚田さ、何者なの？」

と、彼が問う。わたしはもう隠さなくとも良いかと思い、告白をする。

「わたしね、漫画を描いてるの。ぶっちゃけ、ボーアイズラブなんだけど」

滝口くんはしばらく前方を見ていたが、ふとわたしを見て、ぱっとまた前を見た。

「ごめんね、隠すつもりはなかつたんだけど、わたし、腐ってるん

だ

「……ああ、そう

「だから人間觀察してるの。そつしたら、他にもいろいろ分かるようになっちゃつて」

えへへ、と笑うわたし。

滝口くんはすると、言った。

「ボーライズラブって、あれだよな。男と男の」

「やべ。いわゆるB」ね

「……えつと、じゃあ、お前は……えつと」

珍しく滝口くんが困惑していた。彼の言いたいことは何となく分かっていたので、先に言つてあげる。

「滝口くんが男子に興味あつても、別にわたしは構わないよ」
彼が小さな段差に足を取られてよろけた。どうにか転ばずに済んだ彼が、わたしを睨む。

「……あのな、塚田。もつ少し小ちこ顔で言ふよ」

「あ、認めた」

「つ！ ち、ちが……」

言いかけて彼が溜め息をつく。やつぱりわたしの観察結果は当たつていた。

「お願いだから、あいつらに言つくなよ？」

「言わないよ。わたしだって、まさか滝口くんと藤堂くんで萌えてるなんて言えないもん」

滝口くんがまた溜め息をついた。

わたしはくすくすと笑つて、ただ今の状況を楽しむ。

「でも、ただ見てるだけだから安心して」

萌えの対象にはするけれど、わたしは別にいつもいつもはなかつた。

「藤堂くんは男の娘だし、りのちゃんとかップリング成立しちゃつたのは残念だけどね」

現実でリア充されると、妄想がしにくくなる。りのちゃんの幸せを壊すつもりはないから、やつぱり何も言わないけれど。

「でもや、塚田」

「何？」

滝口くんは前の一人を見て言った。

「たぶん、お前が思つてると現実は違つや」

「え、わたしが何思つてゐるか分かるの?」

「……たぶん、あいつが下だろ?」

「あ、図星。すごーい」

わたしが喜ぶと、滝口くんが溜め息まじりに言つ。

「ついでだから言つておくれど、おれ、そつちだから」

まあ、何てこと。つていうかちょっと待つてよー、滝口くん経験あるの?

「へえ、そなんだー。素敵な妄想のタネをありがとう」と、わたしはにっこりした。つてことは、相手は藤堂くん以外の誰かだ。滝口くんの清らかな身体をもてあそぶ男の人! 妄想が爆発ね!

「……いや、別に

そう言つて滝口くんは苦笑いを浮かべた。

別に同性愛を悪いことだとは思わない。だつてBレ大好きだもん。百合だつて好きだし、自分自身、現実的な問題として百合はいけると思ひ。

だから同性愛に対する偏見はないし、差別もしない。

滝口くんがそっちの人だと思ったのは、女子の話題で盛り上がりないことを知つてからだつた。そういう時はだいたい、藤堂くんが一人で喋つてる。だから変だと思つたんだ。で、よくよく彼を観察していると、目の輝きが他の子と違つていだ。言葉で説明するのは難しいのだけれど、妙にぎらついているのだ。彼にはもう一つの顔がある、確信した。

「そつか、あの滝口くんがねえ……」

独り言を言つて、ふうと息をつく。わたしが今描いてるのは、彼らをモデルにした漫画だつたのだが、続きを描く気がもう起きない。

漫画研究会に所属してゐるわけでもないので、誰かに見せるつもりはなかつた。コンテストに出す気だつて無い。だけじゃつぱり、

一度描き始めたものはきちんと完結させたいから、困った。

「結局、誰に恋してるか聞けなかつたし」

描きかけの原稿では、一人が誰もいない放課後の教室でいちゃいちゃしようとしていた。誰にも知られてはいけない、一人だけの甘い関係。

……現実は逆、だつたんだよね。ここ最近の藤堂くんはやけに積極的で男らしい一面を見せるようになり、一方の滝口くんはネコであることを告白したのだ。わたしの妄想は夢く崩れ去った、わけでもなかつた。

「え、実は逆？ 逆なの？」

はつと原稿を見下ろすと、わたしの頭の中で物語が進行しあじめる。物語はこれからが良いところだ、今更受け攻めを入れ替えたつて支障はない。いつも強気で意地悪なのに、実は相手から攻められてドキッとしたちやつたりして……きゃー！

鉛筆を手にし、新しい原稿にがさがさと思いついたものを書き始める。

ヘタレ攻めと強気受けだ。わたしにとっては新しい世界……！

『あの、僕、本当は……』

『何？ ちゃんと言えよ』

『……き、君のことが……以下、自重。』

め

いくら腐っていても、一次元と三次元の区別はきちんととしていなければならない。

そう考えると、わたしは滝口くんのことは嫌いじゃない。わたしにあんなことを言ったのも、それだけ信頼されているからだろう。だからわたしは彼の恋を応援するし、何かあつたら助ける準備は出来ている。

りのちやんと藤堂くんがくつついてしまつた今、滝口くんを支えるのはたぶん、わたしだ。滝口くんは友だちが多い方じゃないし、かといって一人でいるのも好きじゃない人だから。

滝口くんが望むなら、彼が本当はゲイだつてこと、他の人たちに
ばれないよう手助けもしてあげよう。どうせわたしは恋愛に興味
がない。

今は漫画を描いている方が楽しいし、学校の他にピアノのお稽古
もあって毎日忙しいのだ。そのどれもが自分の好きでやっているこ
とだから、なおさらそれらを無視して恋に走るなんて出来ない。

それなら、せめて現実のマイノリティを助けたいと思うのが私の
心情だった。

けど、それがただの自己満足にしかなりえないことも薄々気づい
てる。滝口くんだって、明日からわたしのことを避けて生活し始め
るかも。

まあ、わたしは誰かに危害を加えるつもりが無いから大丈夫
だとは思う。それに進級したらクラス替えがあるから、滝口くんと
疎遠になる日はそう遠くない。

りのちゃんや藤堂くんとも疎遠になる日が来るかもしれないのは、
わたしの意思ではどうしようもないことだ。

それなら、わたしは今までと変わらずに生活するだけ。いつもの
ように男の子たちを見て、一人静かに妄想するだけだ。

あれから弟はそれまでと変わらずに過いでいた。その堂々とした姿に、父親も許しかけているんじゃないかと思つ。

一方の俺は相変わらず内定がもらえないでいた。聞いた話では、百社受けて一つも内定のもらえない奴もいるやうだ。それにくらべると、俺はまだまだ努力が足りない。

「たまに大学在学中に起業するやついるじゃん？　あれ、誰か誘つてくれねえかな」

と、サクマはついに現実逃避を始めた。

「無理だろ。つづーか、何の会社起こす気だ」

俺がそう言い返せば、サクマががっくりと頑垂れる。

「だよなあ。起業するには資金もいるし、やっぱそつ簡単には出来ないよなあ」

「どうして俺たちは内定がもらえないんだと思つ？」

「え、不真面目だからじやね？」

「残念、答えは努力が足りないからだ」

サクマが目を丸くして俺へ言つ。

「急に真面目になっちゃつて、どうしたんだよー？」

気持ち悪いぞ、とわざとらしく距離を置いてみせるサクマ。

俺は構わず歩く速度を速めて言つた。

「待つていろだけじゃ何も始まらない。俺たちは自分を磨く必要がある

「オレ、頭悪いから分かんなーい」

「しね

「あ、ひどっ」

ふつと笑つて、サクマの方を振り向いた。

「今は、自分の前にある壁をやつつけるのが先決なんだ」

サクマが首を傾げて俺の名を呼ぶ。俺はそれを無視して、今もま

だそこにある壁に目を向けた。

美音と出逢つてから一ヶ月が経とうとしていた。

俺はたぶん、自分も自分の思うより大人ではないことを分かつている。美音との間に距離が生まれようとしているのも、きっとそれが原因だ。

美音の方から連絡が来て、すっかり定番となつたホテルへ一人で向かう。

俺がこの場所を知つてるのは、いつか出会つた男に教えてもらつたからだつた。後にネットで、男が一人で行けるホテルに名前が挙がるところだと知つた。

「ねえ、夜司……」

俺の身体を愛撫しながら、美音は言つ。

「現実つて、何が起くるか分からないものだね

それから上に跨つて、俺の鎖骨に口づける。

「まるで空想みたいだ」

軽く噛んで、その跡を舌で舐める。俺はただ、その感触に身を委ねていた。

「だからきっと、おれと夜司は上手くいかない」

美音が俺の股間に手を伸ばした。ぞくつとして、俺は彼を見る。

「だつて今朝ね、夢を見たんだ」

「……美音」

彼は自嘲するように笑つていた。

「みんなにおれらのことがばれて、別れざるを得なくなるの」「もういい」「もういい」

と、俺は背を向けるように起き上がり、彼を退かした。

「お前はまた、そつやつて俺を惑わすんだろう」

美音は俺の背中にもたれると、女みたいに白い腕で俺を抱きしめた。

「……そうかも」

俺が美音のことをどれだけ想っているのか、深く知りもしないで。

「だつてさ、おれ、ばれちゃつたんだ」

「嘘はやめろ」

「本当だよ。クラスの女子に見抜かれた

「どうしたらいい? と、彼が小さな声で問う。俺は答えられなか

つた。

「夕樹の兄貴と付き合つてるなんて……」

この前は自分が犠牲になると言つたのに、いざその危険が訪れる
と心が揺らぐ。まだ青臭いガキでしかない証拠だ。

でも、俺にはある一つの確信があった。

「ずっと隠したままではいられないんだ。覚悟しろ」

腹を決めて向き合わなければ、目の前にある壁は破れることなど
ない。

「……夜司は、決めちゃうんだね」

「ああ、俺にはもう時間もない」

「おれは?」

未だに動搖している様子の彼を乱暴に抱き寄せた。

「夕樹にだけ話すぞ」

「……怖い」

「大丈夫だ、俺が守る」

自分のことに精一杯で、まだ世界を知らない少年の唇にキスをした。

もう一度と戻れないなら、先へ進む以外に方法はない。弟は優しい奴だから、きっと受け入れてくれる。理解してくれる。

「それでも、怖いよ」

と、彼は両目を伏せた。

「いつかばれてしまうなら、家族にもばれてしまふくらいなら、死
んだ方がずっとマシだ」

そうしてまた、美音は俺の心をぎゅっと締め付ける。まるで、こ
の世界に一人しかいないような感覚にさせる。

「大人になるためにも必要なことだ」

と、俺は彼の左手をとった。指を絡めて、強く握りしめる。

俺だって、本当なら逃げ出したい。だけどそれが出来ないのが現実だから、今はただ一人の愛を信じてみたい。

しばらく就活を休むことにして、俺はサクマに言った。

「俺は今日、お前に告白をする」

「何を？」

と、いつもと変わらない返答。それを俺は好機と見なす。

「今までずっと黙ってたけど、俺、彼氏がいるんだ」

サクマは無表情になつた。それが真面目な顔つきのようにも見え、ちょっと面白いと思つてしまつ。

やがてサクマはへらりと笑つた。

「なんだ。知つてるよ、そんなことへらい

今度は俺が表情を無くしてしまつ。ばれていた？

「だつてお前が女に興味ないつてこと、ほとんどの奴が気づいてるぜ」

「……マジで？」

「ああ、マジ。オレはお前のこと面白い奴だと思つて、プライベートで何してたつてビうでもいいつて思つ

と、サクマ。

思わず俺は俯いてしまつた。言わなくとも、知つてる奴は知つていたというのか。

「ついでだし言つちやうけど、お前、そーいうオーラ出てるよ

「……」

何だか恥ずかしくなつてきた。俺は他の奴と同じようにしていたつもりなのに、第三者からそんな目で見られていたなんて思いたくない。

「なんてゆーか、才能ある奴つて絶対にどこか抜けてるんだよなあと、サクマが言つ。俺はただ頭の回転が早いだけだというのに……」

…と、考えてはつとする。確かにサクマの言つ通りかもしれない、俺の感覚は周囲とまつたく違っていたのだから。

「どうやら俺は、自分のことを全然分かっていなかつたらしい」

眩いで頭を抱える。

「気にするなよ。それって個性だろ?」

「……本当にそう思つてくれるのか?」

聞き返すと、サクマは変わらない笑顔で言つた。

「もちろん。ちょっと少子化を促進するくらいで、大した問題じやないさ」

嫌味なのか冗談なのか、ちょっと判断に困つた。

でも友人の言葉は素直に嬉しかつたので、俺は顔を上げて言つ。

「そうだな。ちょっと自信出てきた」

「お、良かつたなあ。でも就活は落ちる。落ち続けろ」

「は? ジゃあ、一つも内定もらえなかつたら、その時は抱かせろよ」

「えー、それちょっと怖い。前言撤回、一刻も早く内定勝ち取つて」と、サクマが笑う。

俺も笑つて、いつもよりも解放された気分のまま言つた。

「お前も早く内定取れよ」

これまでうだうだと時間を潰していりだけの俺たちだが、きつとこれからは違う。互いを蹴落とそうとはせずに、共に同じ立場から戦えるはずだ。

目の前にあつた壁には、拳を打ち付けたその場所から亀裂が入つていた。ぐにやりと曲がることはせず、元の形に戻ることもなくなつていた。

『大学の友人に言つたら、あつさり受け入れられたんだ』
 電話越しに聞こえる夜司の声は、どこか清々しかった。
 『だから、この勢いで家族にも話そうと思つ』
 「……そう。がんばってね」

おれは意味の分からぬい言葉を返していた。本心では、カミングアウトなんてしてほしくないのに。

『ああ。話が上手くいったら、また連絡する』

「うん」

『美音とのことは、別の日に、弟にだけ話そつと思つてる』

「うん」

『……その時は、お前も一緒にだからな』

冷たい刃がおれの心臓を突き刺す。おれはカミングアウトなんてしたくない。

『じゃあ、また後で』

通話の切られた携帯電話を見つめ、おれはぎゅっと口を閉じる。夜司は何にも分かつてない。

夜司がカミングアウトするのは自分のためだ。おれのためなんかじゃない。

おれは夜司の前でしか、現実逃避はしないことにしていた。なのに、夜司に「現実を見る」と言わせてしまったら、おれの居場所が無くなるじゃないか。夜司はどうして、おれを置いてカミングアウトしてしまうのだろう。おれには理解できない。

夜司がもし、家族に受け入れられてしまつたら、おれはどうなる？　おれだけ、ずっと隠れんぼを続けるのか？

ひどすぎる。夜司は意地悪だ。

おれはこんなにも、夜司のことを想つていていた。おれとずっと一緒にいるつて言ったのに。おれはまた、泣く場所を失う。

夜司にしか見せない顔がたくさんあるのに、おれはまたそれらを隠して現実を見つめ続けるのか？嫌だ。

おれはカミングアウトなんてしない。

本音を言えない母親を、気まぐれで裏切り者の父親を、健氣で狂った姉ちゃんを、おれは知っているから。

おれはカミングアウトなんてしない。

あの日、現実から逃げるのは良くないことだと知っていたおれは、ありのままを受け入れようとした。でも姉ちゃんが、美音と離れたくないと喚いて、両親を考え直させた。

それからも、ずっとおれはありのままを受け入れて生活していたのに、おれが中学三年になつた時に姉ちゃんが言った。

『美音はもっと泣くべきよ。自分の好きなことをして、人の顔色を伺わないで』

それから数日後に売春を始めた。最初はただ、男の人と接触したいだけだった。そのことを姉ちゃんに言うと、彼女は呆然と笑った。
『あはは、変なの！ 何で、美音……あんた、この家の長男なのに、ああ、おかしい。でも、面白い。これで終わりだ、全て、何もかも。あんたがそつちの人間なら、あたしは一体、今まで何を守ってきたの？』

底抜けに明るい姉ちゃんが珍しく涙したのをよく覚えている。おれは悪いことをしていた。

それから姉ちゃんは何を思つたのか、おれに売春を続けると言つた。

『飽きるまで続けて、いつか全てをばらして、この家をあなたの手で崩壊させるのよ』

姉ちゃんは狂っていた。それはきっと、あの日から。

だからおれは、この家庭^{いえ}を壊せない。姉ちゃんが守り続けてきたものを、おれは壊せない。

カミングアウトなんて絶対にしない。

姉ちやんに命令されても反抗する。だつておれは、この家が好きだから。

だからおれは、この場所いえを嫌う。そつする」とでしか保てない絆を、大切に守る。

寂しい夜に限つて、男たちからの連絡はなかつた。それがまた寂しくて、おれは自室で涙しそうになる。夜司のことを考えるのも苦痛で、おれは別のこと考へることにした。

携帯電話を開いてウェブに繋げると、打ち慣れた文字を入れて検索をかける。

Hレキギターに関するサイトがいくつも表示され、おれはそれらをひとつひとつ見ていく。

時間のある時にエレキギターについての情報を集めていたおれだが、未だに分からぬことだらけだった。

『廉価なギターは玩具だから、買つならきちんとしたもの』

いろんなことが書いてあつた。

『湿気やほこりに弱いので、ギターはスタンンドにかけて置いておくやると決めたわけじゃなければ、わくわくする。

『弦にも色々種類がある』

場合によつてはずいぶんとお金がかかりそうだ。

『大きく分けてストラトキャスターとレスポールの二種類がある』

おれがかつこいとと思うのはレスポール。

『初心者向けのセットは、意外と馬鹿に出来ない』

三万くらいから売られているそうだ。それ以下の物はあまり信用ならないという。

「……」

おれがもし、Hレキギターを始めたら、塚田は何て言つだらう。

かつこいと憧れの視線を向けてくれるだらうか？

夕樹ゆいづきはどう思うだらう？

おれのこと、イケてるって思つかな。

高内は？ またいつもみたいにおれを馬鹿にして、どうせすぐ飽きるんでしょ？ ギターが可哀想だわ、とか言つのか？

「……」

両親はどう思つだらう。

応援してくれるのか、それとも反抗的だと言つのだらうか。

姉ちゃんはきっと、明るい調子で笑つだけだ。かつておちやつて、まだまだお子ちゃんね、とか言つておれの頭を撫でるに違ない。

「ああ、だけど。

おれもあの舞台に立つてみたい。今まで考えもしなかった夢の世界を、見てみたいな。

暗く陰気な現実から距離を置いて、あのライトの下に立つてみたい。白く眩しく輝いて、たくさんの歓声を聞きながら音を伝えたい。塚田に言われなかつたら考えもしなかつた、新しい世界なんだ。おれは独りでも良いから、自分を伝える手段を持ちたい。これまではずっと受け身だったから、その反対側へ行つてみたいんだ。

その晩、おれは夢を見た。

念願のHレギギターを買って、必死に練習して、みんなの前で弾いてみせる。

あの頃の父さんと母さんが笑顔でおれを褒めてくれて、姉ちゃんがあれをぎゅっと抱きしめて言つ。

『美音、これからは自分の好きなように生きなさい』
はつとしあれはギターを床に落としてしまつて、拾い上げるとそれはかつての四人が笑顔で写つてゐる写真に変わつていた。
そしておれは心から願つのだ。

どうか、夜司があれから離れてこさせんよつと。

僕のポシェットが朝子に奪われた。妹もびつや、ふりふりでひらひらなものが好きらしい。

「朝子、それ、返してくれないかな？」

「いや」

と、朝子は肩に掲げたポシェットを両手で抱きしめる。「僕は、あげるとは言つてないよね？」

「でもダメなの」

「それがないと、困るんだけど……」

と、苦笑する僕。別に少しくらいなら貸してあげても良いのだけれど、白いポシェットなので汚されたら大変だ。

すぐそこの台所では母さんが洗い物をしていた。一ぱいぱいをひりつと見たが、何も言わないでいてくれて安心する。

「そんなに気に入ったの？」

呆れまじりに尋ねると、朝子は言った。

「うん。あーちゃんもね、ゆいみたいになるの」

彼女は女の子なので特に問題はないけれど、僕の影響を受けてそうなるのはいかがなものか。と、いうより。

「朝子……僕のケータイ、見た？」

「…………ううと、みてない」

と、分かりやすく嘘をつく僕の可愛い妹。

「えーと」

僕の待ち受けは女装した僕が高内さんと一緒に写っている写真だった。一人にカミングアウトした夜、何故か塚田さんから送られてきた。

話したって無駄だと思い、僕は朝子を抱き上げると居間へ連れて行つた。父さんはまだ帰ってきてないし、やっちゃんは部屋にいるので、ゆっくり遊んであげてからポシェットを取り返すつもりだつ

た。

朝子をソファに座らせ、部屋の隅に放置されていたぬいぐるみを取り上げる。

「ほら朝子、くませんが一人で寂しつて泣いてるよ」と、妹の隣へ腰を下ろし、ぬいぐるみを朝子の前に出す。朝子ははつとすると、ぬいぐるみに手を伸ばした。ぎゅっと胸に抱きしめて、言づ。

「くません、ごめんね」

なんだかんだで純粋な妹。このまま無垢に育つて欲しいと思づかれど、僕の趣味が今後、どう影響するか……。

そうして朝子と遊んでいたら、父さんが帰ってきた。

母さんがせつせと夕食の準備をし、今日も一人で食事をする父さんの相手をする。僕の両親はあまり会話がないけれど、互いによく氣を遣う。それが良いことなのかどうかは、まだ僕には分からない。食事を終えた父さんが新聞を読む。その様子を耳で聞いていると、片付けをしていた母さんが僕に言つた。

「ゆい、そろそろ朝子、眠らせないと」

「え、ああ」

どうやら僕はぼーっとしていたらしく、氣づくとぬいぐるみが無理矢理ポシェットに詰め込まれていた。胴体から上が入りきりずいて、ぶらんと頸垂れている。ちよつとシユール。

「朝子、そろそろ寝る時間だよ」

「えー」

立ち上がりつて妹の手を取る。

食卓にいた父さんがちらつと僕らを見やつて、朝子が父さんの方へ向かづ。

「パパ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

と、この時ばかりは優しく笑う父さん。かつては僕らも、あんな風に笑いかけられたのだろうか。

それから朝子を母さんの寝室へ向かわせようとしたが、やつちやんが食卓に現れた。飲み物でも取りに来たのだろうかと思つたら、彼は言つ。

「父さん、話したい」とあるんだけど、良い?」「片付けを終えた母さんが朝子を抱きあげる。

「つていうか、みんなに話がある」

母さんが振り向いた。僕はただその場に佇んで、やつちやんを見ていた。

「ちよつと待つて」

と、母さんが寝室へ向かい、数分後に朝子を寝かしつけて戻ってきた。その時には僕もやつちやんも、自分の席に座っていた。

母さんが席について、やつちやんが様子をつかがうように僕らを見やる。

「それで、話つて?」

なかなか切り出さないやつちやんを見かねて、母さんが尋ねた。どうやら、良い報告だとでも思つてゐるらしい。しかし僕は、何か違つと感じていた。

やつちやんが背筋を正して両親を見る。

「俺、ずっと隠してたことがあるんだ」

母さんがはつと表情を変え、期待するのをやめる。

「……俺は、男が好きだ」

場の空気が重くなり、どこか異空間にみみづな氣がした。やつちやんの声がまた言つ。

「だから俺は、女性と付き合えないし、結婚だつて今の法律じゅ出
来ない。俺は、生まれついての同性愛者だ」

「夜司……」

母さんが何か言おうとして、言えず口元に手を当てた。頭が混乱しているらしい。僕も、いまいち状況が把握できなかつた。

やつちやんは俯いて「今まで黙つて、ごめん」と、言つ。

ああ、やつちやんがあの時に言つた『言つたくないこと』は、これ

だつたのか。

父さんがやつちやんをじつと見ていた。僕の時よりも厳しい視線だつた。

「どうして、揃いも揃つてお前たちが……」「……と、父さんが溜め息をつく。僕のこと終わったはずなのに、やつちやんのせいでも蒸し返された。

やつちやんは何も言わず、真剣に話を聞く態度を示す。

「俺にはまったく理解が出来ない」

そう言い切つた父さんは僕たちを見て、怒りに似た表情を浮かべる。

「どうしたら、そんな風になるんだ」

「違うの、あなた。夜司は昔から

「お前には聞いてない」

母さんの言葉を聞かずに、父さんは僕たちを睨み付ける。静かな口調が僕をびくびくさせた。

「俺は理解してほしいなんて思わない。ただ知つてて欲しい」

と、やつちやんが言うと、父さんは怯んだように口を開き、また溜め息をつく。

「勝手にしろ」

がたつと席を立ち、寝室へ向かう父さん。その言葉の真意が分からなくて、怖かった。やつぱり僕も、まだ父さんに許してもらえたわけではないらしい。

母さんはそんな父さんを見送つてから、静かにやつちやんの方を見て言つ。

「夜司は、昔からそうだったのよね。気づいてたのに、何もしてあげられなくて」「めんなさい」

と、泣き出しそうに笑う。

やつちやんは何も言わなかつた。

「母さん、分かつたはずなのに……いつか、こんな日が来るつて

……」

母さんが俯いて涙を流し始める。その涙はさつと、自分を責める涙だ。

「いいんだ。分かつてくれるだけで、俺は十分だから」

「でも……だって、ずっと辛い思いを、あなたにはさせて……」

「ううん。そんなことない。俺だって、っここの間までは自分を隠してた。将来は適当な女性と結婚して、隠し続けよつと思つてたんだ」

やつちゃんの口から母さんなことを聞くのは初めてだった。僕の場合は、ばれたのがきつかけだったが、彼の場合は隠し続けることに耐えきれなくなつたらしい。

「…………」めんね、やつちゃん。でも、これからは、母さんたちに気遣わなくて良いからね

と、母さんが涙を拭いながら言つ。それから話を聞いていただけの僕に顔を向けて。

「ゆいも、無理に男らしくしないで良いのよ。だってそれが、あなたなんでしょう?」

ドキッとした。嬉しかった。僕は、母さんに理解されようとしていた。

「うん」

けど、それしか答えることが出来なかつた。本当は『あつがとう』って言いたいのに。

すると、やつちゃんが母さんへ言つた。

「あつがとう」

そして立ち上がり、廊下へ出で行く。僕は母さんとやつちゃんを交互に見て、兄を追つた。

「う、やつちゃん」

部屋の前でやつちゃんが立ち止まり、僕を振り返る。

何て言えばいいのか分からなくて、何か言いたい言葉があつて、ただ僕は彼を見上げる。

「えつと、あの……その

「ちゅうさは僕の言葉を待ってくれていた。頭の中を整理して、言葉をよくよく考えて、口に出す。

「僕は、別に良いと思つ。僕が僕であるよつて、やつちやんもやつちゅんでこるべきだな」

「……ありがと」

「こいつと微笑んで、やつちやんは自室へと入つてしまつ。扉が閉まるのを見送つて、僕はもつと他に言つことがあつたのではないかと後悔を始めた。

同性愛者だからって差別するのはおかしいし、男が女装するのも悪いことだとは思わない。僕が女装を楽しむのと同じ事で、やつちやんは男を好きになるからやつちやんでも……ああ、考えがうまくまとまらない。

僕も自分の部屋に入らつかと思つたら、やつちやんが扉の下から一枚のメモを差し出してくれた。

『今はまだ言えないけど、お前はまだ一つ言わなきゃいけないことがある』

「……僕、だけ？」

やつちやんが扉の向こうで小さく「ああ」と、肯いた。
どうにかとか分からなかつた。だけど、今はまだ言えないだけで、きつとにつかは話してくれるのだろう。

「分かった。僕、待つてるね」

と、返事を返して、僕は自分の部屋の扉を開けた。

朝になつても、夜司^{やつかさ}からの連絡はなかつた。カミングアウトは失敗したのだろうか？

携帯電話を何度も開いては閉じて、ただ彼からの連絡を待つ。でも、もしも失敗したのだとしたら……。

「ユイ、おはよう」

教室に入ってきた夕樹^{ゆいしき}へ手を振ると、夕樹はおれを見てその場に立ち尽くした。

「……おはよう」

と、それだけ言つて自分の席へ着く夕樹。

様子が変だつた。昨日の夜、何があつた？　と、正直に聞けないのが悔しい。夕樹はきっと、おれと夜司がつながつてゐるなんて予想もしていないので。

携帯電話を机に置いて、前方の壁掛け時計に目をやる。チャイムが鳴るまで、あと五分以上あつた。

夕樹はやつぱり、何か思つところがあるらしい。事情を知つていふおれはそう思つたが、第三者からすれば落ち込んでゐる程度にしか見えない。

「ねえ、ミオ」

理科室から教室へ戻る途中、夕樹が立ち止まつた。

「何だよ」

と、一步先で止まつてから振り返る。夕樹はおれの顔をじつと見て、きゅっとおれの袖を掴んだ。

「相談したいことが、あるんだけど……良い？」

「……チャイム、鳴っちゃうぜ」

次の授業は国語なので移動も準備もないが、サボるのはさすがにまずい。

「う、うん……そうだよね」

と、夕樹が歩き出し、どこか寂しそうな顔でおれの横を通り過ぎていく。その背中にはつとして、おれは呼び止めた。

「ユイ」

立ち止まつた夕樹が振り返り、先ほどと同じよう寂しそうな、それでいて悩ましげな顔を向ける。

どうしたら良いか分からなかつたけれど、今日は初めて授業をサボるうと思う。

「さつさと教室に荷物置いて、屋上行こう」

そう言いながら、おれも歩き出した。

屋上と言つても開放されている場所ではないので、その手前の踊り場に一人で腰を下ろした。

立ち入り禁止の鎖がかけられていたが、跨いで中へ入れる程度のものだつた。その為にこの場所を有効活用する生徒は多く、近くを通るとたまに話し声が響いていた。

そして実際に入つて分かつたが、意外と明るい。

「で？」

「あの、あのね……」

窓からさしこむ日光が、空中に浮いた埃を照らし出す。

「僕の女装が、家族にばれたんだ」

とつぐに知つていたことだけれど、おれは知らない振りをする。

「何で？」

「……妹が、また僕のものを勝手に盗んで、それでばれた」

背中を丸めて溜め息をつく夕樹に、おれはどう言葉をかけるべきか分からぬ。

「それ以来、父さんと全然話をしなくなつて……昨日、ね

ふわふわ浮遊する埃をぼーっと見つめる。

「言つて良いのか、分かんないけど……あの、内緒だよ？ ミオにしか話さないから、どうか黙つててね」

と、夕樹はおれへ言つ。その先を知つていたおれは、ただ首を縦

に振った。

夕樹が一つ息をついて、空氣を吸う。

「やつちゃんがね、ゲイだつてカミングアウトしたの」

「……そうか」「

授業中だからか、余計な物音が一切聞こえてこなかつた。本当の意味での静寂だ、とおれは思つ。

「そつしたら、父さんかね……僕たちの」と、理解できないつて怒つて

そりやそうだ。それが親といつものだ。異質な子どもをすんなり理解して受け入れてくれる親なんて滅多にいない。

「やつちゃんも、落ち込んでた。もしかしたら、あの後、泣いてたかも」

「……それで？」

連絡がない理由がやつと分かつた。やはり失敗したのだ。夜司はきつと、おれに心配をかけられなくて、連絡する余裕もなかつたら。

「僕は別に、やつちゃんがゲイでも構わないし、受け入れてるつもりだよ。だけど、父さんのことを考えたり、どうしたら良いか分からなくて」

だからカミングアウトなんてしつらひにけなかつたんだ。夜司は馬鹿だ、自分で自分の首を絞めている。

「……でも、ミオに話したつてどうしようもないよな」「ごめん」

「いや……でも、話してくれて嬉しいよ」

と、おれは夕樹の肩を抱く。

「うん。絶対、誰にも言わないでね」

「ああ」

言つはずなんてない。おれは夜司のことを知つているし、その彼を愛している。何も知らない第三者に話すつもりなんじ、これっぽつちもなかつた。

彼にメールを打つたら、電話がかかってきた。

『昨日は連絡できなくて悪かつたな』

「おれ、すごく心配したんだよ。今朝だつて、ずっと待つてた」

夜司は少し間を置いて言った。

『あいつ、お前に話したんだな』

「うん」

『……そんなつもりじゃなかつたのに、巻き込んだままだった。家族に話した後、ずっと俺、考えてたんだ』

「考えてたつて、何を？」

『両親のこと。父さんは怒らせちゃつたし、母さんを泣かせたから。夕樹は受け入れてくれたけど、想像してたよりも辛かつた』

弱気な言葉だつた。夕樹の言つたように、本当に夜司は泣いていたのかもしれない。

「今から会わない？」

と、おれが誘うと、彼は即答した。

『無理だ。電話だつて、精一杯なんだ』

「……」

『美音の前で、変な姿は見せられない』

「……分かつた」

互いの顔が見えないから、夜司は弱音を平氣で吐けた。おれは彼のどんな姿も等しく愛せる自信があるのに、彼が嫌がるなら仕がない。

『……』めんな、美音』

「うん」

夜司が深く溜め息をつく。

『明日か、明後日には元に戻るから』

「うん」

『そうしたら、……夕樹に何て話すか、考えよつ』

たくさん傷ついたはずなのに、夜司はまだ傷つこうとしていた。

そうすることが最善だとは、まったく思えない。

「もうやめよ!」

『え?』

「だつて、話したら、夜司はまた傷つくだけだ」

『……でも、ずっと隠し続けている方が辛い』

それはきっと正論なのに、おれはまだ、そこまで大人になれなかつた。

「だからつて、ばらして何が得られるの? また、自分の首を絞めるだけじゃないか」

夜司が黙つた。

「おれはもう、十分だと思う。夜司はこれ以上、嫌な思いをすることがないよ」

だけど本当は、おれがばらしたくないだけだつた。夜司はきっと、そんなことくらいとうに見抜いて。

『お前だつて知つてるだろ? あいつが優しい奴だつてこと

思い通りに行かなくて、悔し涙が溢れる。

『心配しないで良い。あいつはお前から離れていかないし、嫌いになることもない』

『……』

『きっと、俺たちを祝福してくれると』

言ひ聞かせるようなその言葉で、おれの頬を涙が伝つた。すぐにもう片方の手で拭つたが、止まらない。

『……美音?』

夜司の声はおれの胸を締め付けるだけだつた。すぐに泣き止もうとするが、自分の意思ではどうにもならなかつた。

携帯電話のボタンを押して、通話を一方的に切る。

何度も拭つても、おれの涙は止まらなかつた。床に置いた携帯電話が着信を告げ、おれはその上に枕をかぶせて無視した。

どんなに強く目を閉じても、飽きずに涙は頬を伝つて服を濡らす。

夜司は馬鹿だ。おれはそんなこと、少しも望んでいないのに。

美音の言つことは間違つていなかつた。俺は自分で自分の首を絞めている。その手をどければ良いだけなのに、今は耐えなければならぬ。

俺たちにとつてカミングアウトは諸刃の剣だ。自身を解放するための手段でありながら、それまで構築してきた人間関係を失う恐れもある。ただの自己満足でエゴだと言つ人がいるのは、それが第三者に及ぼす影響からだと思う。された方は戸惑うし、悩むし、その人自身とそれまでのようには向き合えなくなる。けれども俺たちからしたら、告白することで初めて、自分の人生を自分らしく歩めるようになるのではないか。

少なくとも俺は、そう考えて行動をした。

「お前がどうしても嫌だつて言つなら、強制はしない」

昼間と違つ賑わいを見せる夜の街で、俺は美音にそつと言つた。

「……嫌だ」

先ほどからずっと俯いて顔を上げない美音が言つ。

街灯の下は妙に明るくて、俺は溜め息をつく。

「でも、ちゃんと話すからな。お前のこと、全部」

「……嫌だ」

美音が駄々をこねる。弟に知られるのが嫌なのは分かるが、俺の彼氏である以上は、いつか覚悟を決めなければならない。

「どうして？」

「……嫌だから」

「ワガママ言つなよ」

理由も話せないのに嫌だと繰り返すばかりでは、どうしようもなかつた。

携帯電話を開いて時刻を確認する。まだ日が沈んでから二時間ほ

どしか経つていなかつた。

「何が嫌なんだ？　あいつに話すのが？　それとも、俺といふところを見られたくないのか？」

美音は相変わらず地面を見つめていた。

「……どちらも嫌だ」

呆れた。まるで幼い子どもだ。俺の妹が見せる態度と変わらない。

「電話でも嫌か？」

と、俺が問うと、美音が少し顔を上げた。

「……嫌だ」

と、また顔を伏せてしまう。いい加減、俺も苛立ってきた。

「美音、嫌がるのもいい加減にしろ」

「……」

「どうせいつかはばれるんだぞ。それなら早い方が良い

「でも嫌だ。おれは言いたくない」

「何で？」

「……嫌だから」

むかつぐ。先ほじから延々と同じ会話を繰り返していた。

「強制するつもりはないが、お前は逃げるだけだろう？」

美音は何も言わなかつた。俺は無意識に舌打ちをして、携帯電話を操作する。

「今からあいつを呼び出す」

はつと顔を上げた美音が、絶望するような表情で俺を見た。構わず携帯電話を耳に当てる俺。

街の雑音がやけにうるさく思えた時、美音が俺の手から携帯電話を奪おうと手を伸ばした。それを避けて、俺はまた舌打ちをする。部屋に放置しているのか、出なかつたのだ。

美音がどこか安心した顔を見せ、俺は苛立ちながら携帯電話をポケットへします。

あともう少しで破れそうな壁なのに、その先へはまだ進めない。弟はきっと受け入れてくれるのに、美音がそれを拒むせいで。

覚悟するにはそれなりに勇気が要る。けれども、俺は美音を甘やかすつもりはなかつた。いたちごっこにも、いつか飽きる。

就職活動を再開させたものの、求人は以前よりも減つてゐるような気がした。それに加えて、いまいちな企業ばかりが目立つようになつていた。

大学から帰る途中で、俺は地元のファミレスに寄つた。とりあえずドリンクバーを頼んでから、美音へメールを打つ。

返信を待つ間に飲み物を取りに行つた。

それからコピーしてきた求人情報を見比べてみると、返信が来た。美音からだ。

『すぐに行く』

たつた一言だけのメール。どうやら彼はまだ、決意出来ずにいるらしい。どうせ今日も、あいつは「嫌だ」と言つただろう。想像が付くから、俺はメールを新規作成する。

送信を終えると、再び求人情報に目を向けた。

十五分ほど経つた頃に、待ち人はやつて來た。

「やつちゃん」

と、声をかけて俺の向かいへ座る。

「早かつたな、ゆいつき夕樹。何か頼むか？」

「え、別に良いよ。それより、話つて？」

俺は散らかしたプリント類を一つにまとめながら答える。

「ああ、お前に会わせたい人がいるんだ。そろそろ来る頃だと思うんだけど」

弟はちょっと緊張した様子で店内を見回す。

鞄にプリント類をしまい、手元に置いた携帯電話を開く。彼からの連絡はなかつた。

どんな反応をされるか、正直不安だった。嫌われるかもしれないとかつっていて、俺は大人げなく痺れを切らしていた。

頭の中でどう言ひ訳しようか考える。弟も口を閉じて、何か別のことと思つてゐる。

ふと田にした弟は、見慣れない上着を羽織つてゐた。細身ですつきりした「デザインの灰色のパーカーだ。

「お前、そんなの持つてたつけ？」

俺が尋ねると、弟はちょっと嬉しそうにして言ひつ。

「うん、もうつたんだ。あんまり着ないからあげるって言われて」「誰に？」

「え、えっと、その……僕の、彼女に」

ど、恥ずかしそうにする。言われてみればレディスだな、とぼんやり思つ。家系的なものなのか、藤堂家には瘦せている人が多い。父親がまさにそうだし、俺も弟も似たような体型だった。

「似合つてるよ」

「え、そう？ ありがとう」

弟は嬉しそうににっこりして、また店内をきょろきょろと見回す。そして何かを発見したらしく、田を丸くした。

ほぼ同時に気づいた俺は言ひつ。

「遅かつたな、美音」

はつとした弟が俺を見る。美音はその場に立ち戻くと、気まずそうに顔を背けた。

席を立つて美音のそばへ行く。

「何突つ立つてるんだよ」

「……夜司、裏切つた」

小さな声で言つて、俺を睨む。

「いつもしないと、お前はいつまでも決心しないだろ」

と、俺は彼の手首を掴んだ。美音が抵抗する前に席へと連れて行く。

戸惑つ弟へ俺は言ひた。

「これが、俺の紹介したい人だ」

隣に美音を座らせて、逃げ出さないよう、しっかりと手を繋ぐ。

「……え？」

俯いて顔を上げない美音と俺を交互に見る弟。

俺は一つ息を吸つて、はつきりと告白した。

「俺たち、付き合つてるんだ」

「……え？ ちょっと、え？ どうこう」と、

美音は口を開かなかつた。

「そのままの意味だ。美音とは、ネットで知り合つた」

逃げ出す隙を伺つてゐるのか、じつとしたまま動かない美音。
ネット、つて……どうこうことなの、ミオ」

「……」

美音は否定も肯定もしなかつた。その様子を見て、弟が言葉を失う。

「だから、お前にはちゃんと言わなきやいけないと思つてたんだ」と、俺。向かいにいる少年が頭を悩ませ、やがて真剣な声で問う。
「ミオも、そうだったの？」

俺の隣にいる少年は肩を震わせ、呟くよつと言つ。

「ああ、そうだ」

三人の間に、あの時と似た重い空気が流れる。美音はちらりと俺を見て、また顔を背けた。

夜のファミレスは静かだつた。俺たちの感情^{おもい}とは裏腹に、細かい雑音が調子よく流れている。

「そつか……そうだなんだね」

弟は納得したようにそう言つて、優しい目を美音へ向けた。

「僕、安心したよ。やつちゃんとミオなら、きっと

「もういい、何もかもおしまいだ」

弟の言葉を遮つて、美音が俺の手を振りほどく。

「美音！」

逃げ出す彼に腕を伸ばしたが、それも振り払われてしまつた。

「二人とも嫌いだ、大嫌いだ！」

と、捨て台詞を吐いて店の外へ出て行く。

「……」

「……」

互いに無言になってしまった。美音は夕樹を拒絶して、俺からも遠

ざかってしまった。

俯いた弟が呟つ。

「二人なら、幸せになれるって思ったの」「……」

俺はただ溜め息をついて、彼へ詫びた。

「じめんな、夕樹。でも、言わずににはいられなかつた」

「……うん」

美音を追いかけても良かつたが、どうせ言われることは分かっている。『どうしてあんなことしたんだよ！？ 夜司の馬鹿！』と、いつたところだらけ。でもあいつのことだから、下手な真似はしないはずだ。

びっくりした。やつちゃんと美音が付き合つてるなんて、考えもしなかつた。それどころか、美音もそつだと思わなかつたから、戸惑つた。

だけど、少し考えたら分かつたんだ。

美音はいつもクールで、何を考えているのか分からないとこころがあつて、ちょっと不思議な人だけど、普通の人と同じように、やつちゃんという人に恋をしていたんだ。美音はやっぱり、僕と変わらない普通の人だつたんだ、って。

それにやつちゃんと美音はすでに付き合つていて、二人とも互いのことをすでに知つていたんだ。僕が今さら口を出したって意味がない。一人が本当に相手を好きでいるなら、良いんじやないかと思うんだ。

それに僕は、僕を受け入れてくれた大切な人たちを否定することなんてできない。だから、僕は一人の幸せを願うよ。

一人がそうありたいと本気で思うなら、僕も僕でありたいと思うだけのことだ。他の人なんて関係なくて、自分として在るために僕もやつちゃんも、美音も、堂々と自分を主張すればいい。

やつちゃんが言つたように、理解してもらう必要はないのだ。ただ知つていて欲しい、それだけで良い。

僕がそうして自分の悩みに結論を見いだしても、美音はまだその渦中で蹲つていた。

「どうしたの？」

高内さんが僕の顔をのぞき込んできて、はつとした。

「え、いや、別に……何でもないよ」

「そう？」

「う、うん」

文化祭は退屈だった。塚田さんが気を利かせて、僕と高内さんを入れ口係してくれたけれど、僕はそれどころじゃなかつた。あの日からずっと、美音とは言葉を交わしていないのだ。

今朝も美音は出席をとつたきり、一人でどこかへ行つてしまつた。自由時間である今日もしくは明日、美音と話が出来なかつたら、きっとずっとこのまま、離ればなれになつてしまつ氣がした。そんなの嫌だし、美音だって何か理由があつて僕から逃げているだけだと思う。その何かを解決することが出来れば、前のように仲良くなれるはずだ。

「滝口のことでしょう？ 何があつたかは知らないけど、放つておけば良いのよ」

と、高内さんは言つう。放つておくのがまずい状況なので、僕は適当に返事を返す。

「うん、そうだね」

「つていうか、あいつはワガママなのよ。血口の中つてゆーか？」

「そうなの？」

「そうよ、絶対そう。自分は傍観者つて顔しながら、独りでいるの嫌がるし。中学ん時から、何にも成長してないわ」

「……そう、かもね」

美音は初めて見た時は大人っぽいと思つたけれど、一緒にいればいるほど、そうでもないことが分かつてきた。言つてみれば、彼は年相応なのだと思う。だから、やつちゃんみたいな大人の人を選んだのだろう。

だけど僕は美音じゃないので、彼が今、どんな思いでいるかは分からぬ。もしかすると、本氣で僕のことを嫌いになつていてもしえない。

……考えるほどに、思考はネガティブになつていいく。

僕は顔を上げて、無理に笑顔を作つた。今日は待ちに待つた文化祭だ、楽しまなくては。

しかし、仕事が終わると、塚田さんが僕を見て言った。

「滝口くんと仲直りしないで良いの？」

「え、えっと……」

思わず悩んでしまつと、高内さんが僕の袖を軽く引っ張る。

「放つておきなさいよ」

「うん……でも、やつぱりちゃんと話したい、かな」

僕が素直に答えれば、塚田さんが優しく笑う。

「じゃあわたし、滝口くん探してくるね

と、階段を下りていぐ。

「……仲直り、出来るかな

「さあね。けど、やっぱり何かあつたみたいね

「う、うん……」

僕は困惑して、それまで見ていた方向から視線を逸らす。高内さんの問いは僕にとつても、美音にとつても酷だった。伝えてしまつたら、僕はまた美音に嫌われてしまつようと思えて、ぐつとこりに入る。

「あの、詳しく話すと長くなるだけじ、何か、僕、ミオに嫌われちやつたみたいで」

そう言つと、無意識に溜め息が出た。

「喧嘩？」

「まあ、そんな感じ」

高内さんは納得すると、明るい調子で言つた。

「じゃあ、こーしゃから連絡来るまで、一人で回つましょ」と、僕の腕に腕を回す。

「え、あ、うん」

ドキッとした。歩き出す高内さんに合わせて、僕も歩きだす。

「あたし、お腹空いちやつた」

「そうだね。何か食べに行こう」

いつもリードするのは高内さんだったけれど、それが一番心地良

い。

高内さんはきっと、彼女なりに僕を心配してくれてこるのだろう。
やつ思ひと嬉しいで、僕は気分が良くなる。

美音のことは今は忘れて、塙田さんにて任せよう。

滝口くんに電話したけど通じなかつた。メールも入れてみたが、返信が来るか不安だ。

賑わう校内で一人、彼の姿を探し歩く。

藤堂くんと滝口くんの仲がおかしくなつたのは、ちょうど十日前のことだつた。あからさまに滝口くんは藤堂くんを無視して、話しかけても冷めた返答しかしなくなつた。

わたしやりのちゃんにはそれまでと変わらず接してくれたが、その態度がまた藤堂くんを傷つける。

文化祭では完全に別行動なので、藤堂くんはすっかり一人で抱え込んでしまつっていた。りのちゃんは、そんな彼をひどく心配しているが、不器用なので口に出して言えない。だからわたしが動く。

でも、やっぱり彼からの返信はなかつた。文化祭ではサボる生徒も多いと聞くし、帰つてしまつた可能性もある。

廊下の隅に立ち止まって、わたしはぼーっと考えた。

何故、あの二人があんなことになつたのかは分からない。だけど二人とも、きっと仲直りしたいと思っているはずだ。だつて彼らは最高のコンビ、まるで夫婦のように息のあつた二人なんだ。

氣を引き締めようとした時、段ボール製の看板を掲げた生徒がわたしの目の前を通り過ぎていつた。

『軽音部』

ああ、そういうえば軽音部は毎年、ライブをやつていいんだっけ。去年は友だちと観に行つたなあ。それで気に入つて、この学校を受験したんだつた。

そして看板が見えなくなつたところでピンときた。

ライブ会場は一階にある教室をひとつ、貸し切つて作られたものだつた。中庭にはずらりと出店が並んでいるので、こうした隅の方

に追いやられてしまつらし。

中へ入ると、すでにたくさん観客が集まっていた。前方に設置されたステージを無視して、滝口くんの姿を探す。

小柄なためか、移動するのは比較的楽だった。ただ、滝口くんらしき影はどこにもなく、そのまましている内にライブが始まってしまった。

ゆつくり見たい気持ちはあったが、ひとまず外へ出ることにする。廊下には人気がなく、静かだった。みんな、軽音部のライブに飲み込まれてしまったようだ。

漏れ聞こえてくるロックンロールを背に、周囲を探してみるが、やはり彼の姿はない。帰ってしまったのだろうか。そんなひどいことをするような人とは思わないし、思いたくなかった。

中庭に通じる扉から外へ出てみる。

まだ教室からそんなに離れていないからか、壁越しに音が聞こえてくる。

出店に沿うように椅子と机が設置されていて、軽音部とはまた違った賑わいを見せていた。こんなところに一人でいるなんて考えにくかった。

それでも一応見てみようと思つて歩いて歩いていくと、横目に知った顔を見た。

立ち止まつて振り返る。

「……滝口くん、発見」

元々設置されているベンチに彼は腰掛けていた。

「何の用だよ」

彼もこちらに気づいていたらしく、そう言ってわたしを見る。わたしはその隣へ行つて座ると、滝口くんへ言った。

「探してたんだよ」

「何で？」

ちょっと困った。いきなり本題に入るのはまずいだろ？

「軽音部のライブ、一人で行くの寂しいから」

とつさに嘘をつくと、滝口くんは納得した。

「ああ、そういうのとか」

そして前方に顔を向ける。わたしも賑わう出店で先輩達がせわしく働くの眺めた。

それから、滝口くんがぽつりと呟く。

「おれ、ギター やろうと思うんだ」

「え、本当に？ すうーー、もつ買ひつもりのギターって決めてるの？」

とつても興味深い発言だったので、思わず食いつくわたし。

「いや……だけど、金はある」

「そつかー。良いなあ、弾けるようになつたら聞かせてね」

につこり笑いかけると、滝口くんもにやつと笑う。

「ああ、一番田に聞かせてやるよ」

「一番田？ いや、わたしが一番でも困るけど、ちゅつと『』になるなあ。突つ込む？ でも、聞くのちよつと怖いなあ。

「塚田、ピアノ出来るんだろ？」

「え、うん。出来るけど」

「じゃあさ、いつか一人で曲作ろうぜ」

滝口くんにしては積極的な発言だった。その変化にわたしはちよつと嬉しくなつて言ひ。

「うん、良いよ」

作曲はわたしもやつてみたかった。ただ、一人でやるのは大変そうだから手を出さずにいたのだが、一人でなら出来る気がする。

「たぶん、今年中に買うから」

「うん」

「買つたら……写真撮つて、塚田にも見せるよ」

「うん」

背中から聞こえてくるロックンロールが風と一緒に吹き抜けていく。

わたしは前に顔を向けると、本題を切り出した。

「藤堂くんと、何があったの？」

彼がわざわざ視線を外して言つ。

「……別に」

「隠れないでよ。わたしもこのちゃんと、一人のこと心配してるんだよ」

滝口くんはしばらく間を置いてから、ベンチに背をもたれて頭上を見上げた。

「塚田じゃなかつたら、四つ五つにはならなこと御つ」

「うん」

「おれ……夕樹の兄貴と付き合つてるんだ」

滝口くんの一度田の告白は、とんでもないものだった。

「え？」

「だから、あいつの兄貴と付き合つてるの」

兄貴？ そういえば藤堂くんにはお兄さんと妹がいるって聞いたことがあつたけど、そのまさかのお兄さんと滝口くんが？ な、なんて萌えな。

「その、お兄さんもそっちの人だったの？」

「うん」

「……えっと、それで？」

藤堂くんのお兄さん、ぜひ会いたい！

「で、それを彼氏にばらされた。おれは言いたくなかったのに」

「そうだよね、普通は隠すよね。じゃあ、何で？」

「何で、そのお兄さんはばらしちゃったの？」

滝口くんはまだ空を見ていた。

「いつかばれるなら、早い方が良いつて」

「……そう」

確かに隠し事や嘘つて、いつかばれるものだ。自分がどんなに

完璧だと思っても、必ずどこかに穴がある。

「おれさあ、すげー感情的になつて、コイに嫌いだつて吐き捨てて、逃げ出したんだ」

自嘲するように言つて、滝口くんは首を元に戻す。

「馬鹿だよな。なのに、おれはあいつどいつも接したらいいか分からなくなつてゐる」

「……なるほどね」

自分で蒔いた種を片付けられなくなつてしまつたらしい。お兄さんとどういった経緯で付き合つようになつたのかは知らないけれど、気まづいのは分かる。

「本当は謝りたいんだしょ？ つてもーか、謝らなきや」と、わたしは言った。

滝口くんが「あらを見て、不安げに俯く。

「勇気がない」

「何言つてゐの、滝口くん。このままだと、一生仲直りできないかもよ？」

「……それは、分かつてる」

「じゃ、謝ろう！ わたしがそばにいてあげるから」立ち上がって彼を見る。

「……でも、あいつは」

弱気な言葉を口にしそうになつて、滝口くんは口を閉じた。

「大丈夫だよ。わたしだつたら応援するもん」

「……でも」

イラシ

「滝口くん、女々しい！ らしくない！」

急に声を張り上げたわたしを見て、滝口くんが目を丸くする。

「謝るつたら謝るの！ 藤堂くんはそんなことで嫌いになるほど、悪い人じゃないわ！」

と、わたしは彼の腕をとつて立ち上がらせた。もう片方の手で携帯電話を取りだし、藤堂くんへ電話をかける。

静かなところが良いと言つので、文化祭の時だけ立ち入り禁止のテープが貼られた校舎に入った。

「……コイ

先生に見つかつたら怒られるだろ？ けど、賑わいの声が届かない
ので静かなのだ。

「あの時は、本当に『めん』
少し離れたところで床に座つこみ、彼らのやつとりに耳を傾ける
わたしとりのちやん。

「おれ、やつぱつお前の『』と、嫌いになんてなれない。夜司の『』と
も……」

「そりだよね、良かつた

「え？」

「僕、本当に嫌われたんじゃないから不安だったんだ。やつちやんも、すげく心配してたよ」

「……『』、『』めん

「あの……そのね、ミオ。僕は、一人がそれで幸せなら口出しませ
ないよ。むしろ応援する」

「……コイ

「だつてミオは僕のこと、受け入れてくれたもん。なら、今度は僕
が受け入れる番でしょ？」

あー、可愛いなあ。藤堂くんには、ずっと今のまま変わらないで
いてほしい。汚れた社会の中で唯一咲く花のようだ、こつでも癒し
を提供していく欲しい。

「だから安心して、やつちやんと幸せになつてね」

「……うん、そうだよね。ありがと、コイ！」

やつちやん、といふのは、どうやら藤堂くんのお兄さんのことら
しい。名前は　。

「夜を『』って書いて、やつかさつて書つんだつて
と、りのちやんがわたしの耳に口を寄せた。

「りのちやん、知つてるの？」

小さな声で聞き返す。

「ええ、話だけは聞いてるから。でも、まさかの展開よねえ

「うん……事実は小説よりも奇なり、だよね」

リアル男の娘が身近にいることも驚きだつたが、そのお兄さんと滝口くんが付き合っているというのも、不思議な縁だ。

「まあ、薄々気づいてはいたけれど……滝口が同性愛なんて、りのちゃんが小さく溜め息をつく。これも良い機会だと思つて、わたしは言った。

「でも、りのちゃんだって似たようなものでしょ」

「……いーしゃ？」

りのちゃんが苦笑しながらこちらを見たが、わたしは気にすることなく、にこりと笑つた。

「それよりもミオ、ちゃんと後でやつちゃんとにも謝つてね？ 就活が上手く行かないって理由付けて、部屋に引きこもつてるんだから」

「……ああ、そつか。うん、分かつた。ちゃんと連絡するよ」

ふいにりのちゃんは呆れたように言つた。

「お兄さん、背が高いんですね。頭一つ分違うって言つてた」

「つてことは、百八十くらいあるのかな？ 大きいねえ」

そうか、滝口くんは背の高い人が好みなのか。でも、滝口くんもまだまだ伸びそうなんだけどなあ。身長差が……萌えが……うーん。

「本当にごめんな、コイ」

「ううん。僕の方こそ、『めんね』

どうやら仲直りは成功したようだ。これでまた、安心して一人の掛け合いが見られる。

「お兄さん、会つてみたいなあ」

「うん、あたしも」

美音からの連絡が無いだけで、こんなにも自分が動搖するとは思わなかつた。メールも、電話も、全て拒否されているだけなのに。会社見学の予約をしても、通話が切れた途端に俺は溜め息をついていた。就活は必要不可欠だから仕方がないが、美音もまた、俺には必要不可欠なようだ。

「……」

あれから十日。

夕樹の方も美音と距離が出来てしまつたといつ。話しかけても無視される、と。それは俺も同じ状況にあつた。しかし顔を合わせない分、気が楽である。

俺と美音だけの問題であれば良かつたと、本当に思う。あいつがもつと大人になれば、きっとこんなことにはならなかつた。そう思つと、弟には本当に申し訳ないことをした。

携帯電話を手に取り、メールの作成画面を出す。あまりしつこいと嫌がられるだけなので、あまりメールはしたくない。あの翌日と翌々日に、やはり心配で何度も電話をかけてしまつただけに、いい加減放置するべきだ。頭でそうと分かつても、心はやはりもやもやして行動を起こさずにいられなかつた。

何て打とうか考えてぼーっとする。

今日は確か、高校の文化祭だつたな。弟はどうだつただろう？　楽しめただろつか？　美音は、ちゃんと学校へ行つただろうか？『文化祭、どうだつた？』

と、文章を打とうとして、やめた。明日もあるのだから、今日聞くことじゃない。

|画面を待ち受けに戻し、携帯電話をぱたんと閉じる。

もうすぐ弟の帰つてくる頃だし、また何かなかつたか話を聞く。いつものように話が出来なかつたと言われても、落ち込まな

いよいよ心の準備をしておひつ。

息を一つ吐いて、携帯電話を机の上に置く。暮れていく窓の外を少し眺めて、カーテンを閉めた。

机の隅に置いたデジタル時計を見つめる。光る文字盤が次の数字を示すと、携帯電話が鳴り出した。

はつとしてすぐに手に取る。開いた画面には『美音』の一文字。胸が高鳴るままに、俺は携帯電話を耳へ当てる。

「もしもし、美音？」

『あ、夜司？ あ、あの、おれ……』

小さな声だった。俺は言いたい言葉を飲み込んで、待つ。

『ごめん。……おれ、ワガママだった。本当にごめん』

「いいや、それよりも夕樹とはどうなってる？」

冷静を装つて尋ねる俺。それは顔を合わせていらないから出来たことで、直接会つていたら堪えきれずに美音を抱きしめていただろ？
『うん……今日、仲直りした』

「……そうか」

『コイは、おれのこと応援するつて』

「ああ」

『……本当に、ごめん』

弟の帰宅する音がした。妹がいつものように廊下を駆けていく。
「謝ることなさい。俺の方こそ、勝手なことして悪かった」

『うん』

「ごめんな、美音」

素直に俺が謝ると、美音が少しだけ明るい口調になつて言つ。

『うん。おれ……夜司のそばに、いて良いんだよね？』

「当たり前だろ？』

『……うん』

美音が溜め息をつく。

弟にも言わなきや、と思つた。俺も美音と仲直り出来た、と。

『明日、会おうよ』

と、いつもと変わらない調子で俺を誘ひ。

「でもお前、文化祭だろ?」

『うん。だから、来てよ。おれ、案内するからね』

俺はちょっと笑つて返答をする。

「そうだな、分かった」

美音がにっこり笑つた気がした。

『約束だからね、夜司』

「ああ」

結局、通話を切つた頃には夕食の時間を過ぎていた。途中で弟に呼ばれたが、無視してしまつた。

慣れない長電話で疲れていたものの、遅れて食卓へ着く俺。

「今まで何してたの?」

と、母親に問われ、素直に答えた。

「電話してた」

「誰と?」

「彼氏。いただきます」

母親によそつてもうつた白飯を口に運ぶ。母親は間を置いてから咳くよびに言ひ。

「……やっちゃん、大きくなつたわね」

母親だからこそ、何か感慨深いものがあつたのだろう。それから居間でテレビを見ていた弟たちへ声をかけに行つてしまつた。

「一人とも、そろそろお風呂入つて」

「えー」

構わずに俺は食事を続けた。昨日まではさほど味を感じなかつた食事も、今では美味しいと思える。

「あ、僕、ちょっとやることあるから、先に入つて良じよ

「あら、そう? じゃあ、あーちゃん、ママとお風呂入りましょ? えー」

それから母親が妹を連れて廊下へ出て行くと、弟が俺の向かいの

席へ腰を下ろした。

「美音と仲直りしたよ」

「知ってる。やつを今まで、ずっと電話してた」

弟は嬉しそうに笑って言った。

「良かったね、やつちゃん。僕も安心だよ」

別の意味が込められていそうだ、と思ひ。すると、弟はやはり言った。

「すごく違和感あるし、慣れるまで困惑したり思ひながら、お幸せにね」

兄弟間で恋愛の話なんてしたことがなかつた。けれども、弟は俺の何かを感じていたのだろう。

「……ずっと僕、不思議だったんだよ。やつちゃんは不真面目なのに彼女が出来ないから、どうしてだらうって」

「別に不真面目だからモテるわけじゃないぞ」

「うん、今はそれくらい分かつて。けど、中学の時、本当に不思議だったんだよ」

そう言って弟は、また嬉しそうな顔を作つた。

「ミオはああ見えて寂しがりだから、あんまり放置しないであげでね」

俺の方があいつのことは知つてこむよつの気がするが、まあ良いだろう。

「ああ、分かつた」

と、麦茶の入ったコップに手を伸ばす。半分ほど飲んで、テーブルへ置く。

「でもさ、やつちゃん」

「何だ?」

茶碗に入った残りの白飯を、おかずと一緒に口の中へかきこんだ。

「僕たちって、おかしな兄弟だよね。父さんが言つたように俺は頷くことも、否定することもしなかった。

ただ口の中を空にしてから言つた。

「それが俺たちだ。ひとつも、今むりぬけのよつたものじゃない」「……うん、そうだよね」

コップに口を付けて、中身を全て飲み干した。

弟は俺を見て、何か考えるよつた様子を見せる。食事を終えた俺は食器を重ね、席を立つ。

「ねえ、やつちゃん」

背中にかかつた声に耳を傾けながら、台所の流しへ食器を置いた。俺が振り返ると同時に弟が呟つ。

「美音の、どこが良いの？」

「……」

難題だった。思わず動きを止めた俺は、考えながら食卓へと戻る。

「あー、その……」

再び席へ腰を下ろし、向かいにいる弟の顔を見る。

「聞くな」

「えー、教えてくれたって良いのにー」

と、声を上げる弟。俺が顔を隠すよつに俯くと、生意氣盛りの弟は言った。

「やつちゃん、恥ずかしいの？ 僕、誰にも言わないのに
そういう問題じゃない。」

「あ、ちなみにミオはね、やつちゃんの何が良いかって聞いたら

」

「何してんだ、お前！」

とつたに声を荒げると、弟は笑つた。

「教えてくれなかつたよ」

「……」

はめられた。恥ずかしそうな俺、俺。

「いくら弟の僕でも、やつぱり恥ずかしいと思つよねえ」

と、笑つ。弟がちょっと性格悪くなつたよつた気がするのは、気のせいだろうか。

何だか嫌になつて、俺は溜め息をついた。

壊れると思った、世界が。

おれという存在が他人に明かされてしまつたら、おれの世界は壊れるはずだつた。

だけど、現実は違つた。おれが世界を壊そうとしていたんだ。

おれは自分自身に戸惑つていたから、こんな苦しい世界なら要らないと、目を逸らしていた。

自分さえ見えない自分なら、誰も愛してくれなくて良いと嘘をついて、おれは孤独に溶けようとしていた。

本当は一人じや何も出来なくて、この世界と真正面から向き合つ勇気もまだ無い、ただの子どもだつた。そのことを知らされて、おれは無力だと実感するのが嫌だつたんだ。

そうして目を背け続けるおれを引き戻してくれたのは塚田だつた。おれを求める人はたくさんいるけれど、おれが求める恋人は夜司だけだつた。おれが求める親友は、夕樹だけだつたんだ。

塚田はそのことをおれに気づかせてくれた。彼女は大人だ、おれなんかよりもずっと。

独りでいじけて、くだらない見栄を張つていたおれを、無防備なまま叱つてくれた。そんなのはおれらしくないと、無理矢理おれの腕を掴んでくれた。

おれは馬鹿だつた。まだ子どもで、何にも知らなくて、ちっぽけで、生意気ばかり言つて、ワガママにみんなを振り回していた。

……本当に、ごめん。

「時間、余っちゃつたね」

「そうだな、文化祭が終わるのつて

「四時半。あと三時間以上あるよ」

昨日よりも賑わう校内を、一人で歩いていた。

「じゃあ俺、帰ろうかな

と、夜司が言い出して、おれは驚いた。

「え、何で？ 今日は暇なんでしょう？」

引き留めたくて、彼の前に立つ。

「うん、でも、もうやることねえし」

確かにその通りだ。文化祭と言つても、一時間もあれば全て回りきってしまう規模だつた。

「……じゃあ、待つてて」

と、おれは言つた。

「荷物とつてくれる

「は？」

目を丸くする夜司に、おれはにっこりした。

「行きたいところあるんだ、おれ」

夜司はすぐにおれの意図に気づいて言ひ。

「外、出て大丈夫なのか？」

「だつて暇じやん。時間までに戻つてくれば平氣だよ」

「……分かつた。行つてこい」

と、夜司が笑う。おれは頷くと、すぐに荷物を置いている教室へ向かつた。

昼間の街を一人で歩くのは初めてだった。日曜日だからか、人通りも多い。

制服姿のおれと、私服姿の夜司。人はきっと、おれたちがどんな関係にあるかなんて想像もしない。

「で？」

「うん、確かにこの辺だと思つたんだけど

左右に並ぶ様々な店。おれは歩きながら目的の看板を探してきょろきょろする。

「どこに行くつもりなんだ？」

「楽器屋」

すんなり答えると、夜司がおれを見た。

「何で？」

「ギター見るの。今日は買わないけど」

夜司が前方に目を向けて、おれと同じように周囲を見回した。

「ギターか、俺もやりたいと思つたな」

「やらなかつたの？」

「ああ。楽譜が読めないから諦めた」

「嘘つき。頭良いくせに何言つてるんだよ」

「あのなあ、美音。俺にも得手不得手つてもんが

「あ、あつた！」

横断歩道を渡つた先に、目的の看板が見えた。

夜司が溜め息をつき、おれは構わずと言つ。

「おれ、弾けるようになつたら、最初に夜司に聞かせるから

赤だつた信号が青に変わり、おれは気分良く店へ向かう。樂器屋に入ると、すでに何人かの客で賑わっていた。

「でも、お前がギター やるなんて意外だな」

「え、そう？」

エレキギターの並ぶ売り場で速度を落とし、その一つ一つを眺めていく。

「つづーか、音楽つてイメージじゃない」

と、夜司。

「じゃあ、何のイメージ？」

おれが尋ねると、彼は言った。

「夜のイメージ」

「ばーか」

呆れた、おれがセックスばかりやつてるわけがないだろうに。

「冗談に決まつてるだろ」

と、夜司は笑つて言つ。おれは無視して、ギターの品定めに集中することにした。

まず目に入るのが値段だ。

「で、予算は？」

「んー、五万以内かなあ。セットで買わないなら、三三万か四万」
それからギターの形、色。ストラトも良いけど、やっぱリレスポールの方がかつこいいな。

「色は？」

「特に考えてない。ぱっと見て、運命感じたら買おうと思つてる」「運命、か

赤でも青でも黒でも、かつこよければそれで良い。どうせ新品で買つのだし、なによりもおれは初心者なのでこだわるつもりはなかつた。

「前も言つてたな、お前」

「うん。……え？」

顔を上げて夜司を見る。話、聞いてなかつた。

「だからお前、俺とも運命だつて言つてたろ？」

「ああ、うん」

おれを見て、彼が呆れたように笑つた。

「お前も夕樹と似て、ロマンチストだな

「……」

急に恥ずかしくなつてきた。運命だと想つのはおれの勝手なのに、改めてそんなことを言われると、困る。

「べ、別にそういうわけじゃないよ。ただ、やつぱり、運命つてあらと思つし……」

視線を戻して、Hレキギターを見ていく。

夜司はおれの後ろについて歩きながら言つた。

「まあ、俺もそれには同意だな」

はつとして振り返ると、すぐそばに夜司の顔があつた。

「恥ずかしいから、口に出しては言わないけどな」

と、大人の表情で微笑む。……キスされるかと思った。期待したのに残念だ。でも、公衆の面前でそんなこと、できるはずもない。おれはすぐにまた、きらきら光るギターたちの方を向いた。

おれたちが世間から見て異質なことは分かっている。おれたちは
ずっと一緒にいることは出来ても、夫婦にはなれない。社会から嫌
悪や恐怖の目を向けられるであろう事も、分かっている。

それでもおれの親友や、仲間たちはこんなおれを受け入れてくれたから。

「じゃあおれ、大人になつても言い続けるよ」

「何を?」

大好きな彼氏を振り返つて、意地悪く微笑む。

「夜司はおれの運命の人だ、つて」

オレの名は逢野咲真。^{おうのえくま}ほとんどの奴からサクマと呼ばれるが、それは名前であつて苗字ではない。ノット佐久間。

ややこしい名前だと物心ついた時から思つていたが、名付けられてしまつたものはしようがない。オレには双子の姉がいて、そいつの名前が真咲^{まやき}なのだから、説明せずとも分かるだろう。オレの両親はさりげなくDQNだ。

しかも、その姉の方が頭が良いという現実。早大を第一志望に据えてひたすら勉強して、見事に合格するという努力家な天才だ。オレは……姉が滑り止めとして第一志望においた大学を第一志望にし、必死に勉強してギリギリ合格。姉には馬鹿にされたが、むしろ褒めていただきたい。

で、そんな姉とは思春期の頃から仲が悪い。双子だからってお互いの考えが読めるなんて、空想でしかない。分かるのは行動パターンくらいのもので、オレは姉の事なんてほとんど知らなかつた。あつちもオレの事なんて知らないだろ？

双子にも、色々あるのだ。

「寒い」

「十一月ももう半ばだしな」

「そういう意味じゃなくて」

「じゃあ、どういう意味だよ？」

と、大学の中では親友だと勝手にオレが思つている友人、藤堂夜^{とうじょう ゆ}

^{かさ}司^{つか}は言^いう。

「彼女には振られるし、財布はすかすかだし、未だに内定ゼロだし、オレの返答に夜司^{つか}が納得する。」

「ああ、なるほど。寂しい奴なんだな」

「それ言わないで、マジヘこむから」

と、オレは深く溜め息をつく。

夜司はおかしそうに笑うと言った。

「落ち込んでばかりじゃ、良い」とないぞ」

「ぐう……」

それもそうだ。後ろ向きではなく、前向きでいなければ。
けれども、貢ぎまくった彼女に振られたショックは、そう簡単に
癒せそうもない。

「誰かオレに元気を分けて」

「人に頼るな」

夜司は冷たい。それを他の奴らは様々に受け取るから「良い人」と言つたり、いろんな意味を込めて「ガチホモ」と陰口をたたく。オレは意外と顔が広く、同じ学部の奴らのほとんどと知り合いだ。ただし、中でも性格の悪い奴らと付き合つ氣はないから、すぐに縁を切つてオレは夜司とつるむことにしていた。

で、そんな夜司は妙に優しいところもあって、オレはそこが好きだ。

「そういうや、お前に見せたっけ？」

「え、何なにー？」

顔を上げて彼を見やる。

「ちょっと待つて」

と、携帯電話を操作し、オレへ画面を向けた。

「妹の最新画像」

そこには、ロリータな服に身を包んだ中学生くらいの女の子？ と、それに合わせるようにひらひらな服を着た幼い女児。

「か、かわいい……」

「やっぱお前、ロリコンだろ」

「ただの子ども好きです。つか、お前、妹一人いたっけ？」

夜司に携帯電話を返しながら尋ねると、彼は言った。

「ああ、えつと……」

画面にじばり田を落とし、さらっと答える。

「弟。女装するのが趣味なんだ」

「……え？」

女の子かと思った。

「もっかい見せて」

と、手を伸ばして携帯電話の画像をもう一度見る。よく見てみると、確かに少年っぽい。女装が趣味とは珍しいものだが、それにしてもにこにこしていて愛らしく、夜司の弟には見えなかつた。本当に血、つながつてゐるのか？

「弟も可愛いな」

「どつちもやらんぞ」

「いやいや。オレ、趣味じやないし」

と、オレは笑う。むしろ、初めて見た友人の弟の画像が女装姿つてどうよ？ そら、性別疑うわ。

携帯電話を返し、オレはちらりと自分の右腕に付けた時計を見た。講義開始十分前だった。

「やべ、授業行つてくる」

鞄を引つつかみ、慌てて席を立つ。

「おう、行つてら」

と、夜司の声を背に、急いで教室へ向かつた。

夜司を気に入っているのは、彼が何もしなくてもそこそこ成績の良い点にある。今はもう授業がバラバラになつてしまつたが、去年まではノートを見せてもらつたり、勉強を教わつたりして世話になつた。

彼が同性愛者とか異性に興味ないとか、そんなことはオレにとつてどうでも良かつたのだ。

バイト先は自宅近くのコンビニだ。就活もあるので最近は週に三日しか働いていないが、前までは五日間びつしりだつたため、仕事にはもう慣れっこだ。

今日のバイトを終えて自宅へ帰ると、おふくろが誰かと電話をし

ていた。

構わずに一階へ上がり、敵とばつたり遭遇。

「まだ寝てなかつたのかよ」

居間で退屈そうにテレビを見ていた真咲はオレを見ようともせざず

に言つ。

「おじいちゃん、今度」^{あね}やばこつて

「は？」

思わず立ち止まる。

「あと一ヶ月も持たないそつよ」

「……ああ」

実家で一人、田舎暮らしをしているじいちゃんの顔を思い浮かべて、妙に切ない気持ちになつた。

「で、さつきからずっと伯母さんと話してゐるの」と、階下を指さす真咲。

「ふーん」

オレは適当に頷くと、浴室へ向かった。

元々、この家はじいちゃんやばあちゃんと共に暮らすために建てられた一世帯住宅だつた。しかし、工事が終わる直前にばあちゃんが急死して、じいちゃんは実家から出るのを嫌がつた。それからずっと、近くに住んでいる独身の伯母さんが面倒を見ていたが、ついにじいちゃんにもお迎えが来るらしい。

溜め息をついて鞄を床へ下ろす。コートを脱いでハンガーにかけ、その流れで寝間着に着替える。

隅に置んで置いた布団を敷いて、そこに腰を下ろした。いつ

かはオレが主になるこの一世帯住宅の一階で、オレと真咲が暮らすようになったのは高校生になつてからだつた。両親共に働いていることもあり、別々に暮らすことが決まつた。四人揃う時には一階で食事をするが、それも月に一度あるかないかだ。

真咲の部屋は廊下を挟んだ向かいにある。彼女がテレビを消し、居間の電気を消して、自分の部屋に入つていく音がした。

「……」

人間、女性の方が精神的な成長は早い。真咲もその例に漏れず、昔からしつかり者だつた。幼い頃はまだ仲が良かつたし、小学校を卒業するまでは普通の姉弟だつた。

中学校に入つて、男女の双子ということを珍しがられて同級生からさんざんいじられた。思春期真っ最中のオレはそれが嫌で、真咲と距離を置くようになった。でも、家の中では仲が良かつた。

高校は別々の学校を選んだ。出来の良かつた真咲は地元の進学校、オレは出来るだけ偏差値の高い私立。これが未だによく分からぬのだが、オレは真咲といつも同じ立場にいようとして、すごく頑張つた。だから大学受験でも頑張ったのだけれど、結局置いて行かれてしまった。

両親もオレなんかより真咲の方に期待している節があり、それが今オレたちを作つたように思う。……たぶん、悪いのはオレ一人なのだろう。それなのに、オレは真咲を避けている。

「そういえば」

と、突然扉が開けられてびっくりした。

「な、何だよ、いきなり」

顔だけこちらに向けた真咲が淡々と言つ。

「あたし、大学院行くから」

そしてぴしゃりと扉を閉める真咲。

「……」

嫌味だ。就活で落ち続けているオレへの嫌味だ。

仲が悪くなつてから、真咲は意地悪な人間になつていて。そしてその嫌な真咲をオレはそのまま受け入れるから、さらに仲が悪くなる。

……本当は分かつてるよ、オレが真咲に対して優しくすれば元に戻るつて。

「あー」

欠伸まじりに発声して、布団に寝転がる。

……何かが足りない。

夜司は『自分の前にある壁をやつつけるのが先決』だと言つたけれど、オレもそうなのだろうか？ そうだとしたら、やつづけるべきはやはり……姉か。

クリスマスまであと約一ヶ月。藤堂くんと付き合って始めて、約一ヶ月。

「写真ないの？」
「写真」

と、あたしが催促すると滝口は言った。

「ねえよ。つづーか、お願ひだから諦めり」

「嫌よ。だつて見たいもん、ねー？」

隣に座るいーしゃに同意を求めれば、

「ねー」

と、いつものように乗つってくれる。滝口は呆れたように溜め息をついた。

「やつちゃん、あんまり写真好きじゃないから」

と、フォローする藤堂くん。優しいのは良いけれど、それでも気になるものは気になる。

どうやら滝口の彼氏でもあるお兄さん、文化祭に来たというのだけれど、あたしもいーしゃも会えなかつた。同じ校内にいたはずなのに、すれ違うこともないなんてひどすぎる。

「そうなの？　じゃあ滝口くん、今度盗撮してきてよ」

「盗撮つて犯罪じゃねーか！　嫌だし！」

と、いーしゃにいじられる滝口。最近は四人の関係性が変わってきたように思つ。

実際、あたしと藤堂くんは恋人同士になつてゐるし、いーしゃと滝口の仲もすごく良い。彼が同性愛者だと知らなかつたら、カップルに見えたことだらう。

「何でそんなに嫌がるの？　せっかくの萌えがー」

と、いーしゃ。普段は腐女子であることを隠して生活しているのに、あたしたちの前ではオープンになつてきた。別に嫌じやないから良いくんだけど、そして滝口や藤堂くんをあからさまにネタにする

るのはどうかと思つ。

「でも、恥ずかしがっちゃう滝口くんだけでも十分萌えるよ」
そう言つていーしゃがにっこり笑う。台詞がもっと別のものなら、
小悪魔に見えることだらう。

「それ、あんまり嬉しくないぞ?」

「え、そう? ジやあ、今度から別の言葉考えるね
そういうことじやない。

「塚田さんって、元からあーいう人?」

と、藤堂くんが声を潜めてあたしに尋ねてきた。呆れまじりに頷
いてからあたしは言つ。

「ええ、実はそうなの。あたしも、最初は普通の子だと思つたんだ
けど」

「……やつぱり、類は友を呼んじうのかな」

と、藤堂くんがちょっと楽しそうに笑う。

「そうね」

かくいうあたしもそれなりにオタクだし、藤堂くんは女装が趣味
なのでコスプレに抵抗はないという。何となく毛色が違う気がする
のは、滝口だけだ。

「そりいえば、来週末なんだけど、ライブのチケットもらつちやつ
たの。滝口くんも行く?」

「え、何のライブ?」

でも、滝口といーしゃは音楽の話で盛り上がれるから、やはり類
は友を呼ぶんだろうな。

「コウノトリつていうく系バンド。知り合いが行けなくなつたから
つて、譲つてくれたの」

「インディーズ?」

「もちろん。でも実力のあるバンドだから、行つて損はないと思つ
よ」

あたしはあんまり音楽に興味がないから、いーしゃが共通の趣味
を持つた滝口と仲良くなつても不思議ではない。それどころか彼女

はきっと、滝口と友だちになれて嬉しいはずだ。前からいーしゃは、男友達が欲しいって飢えてたから。

男友達が欲しいって貰えてたから

「良ければ今日の放課後、パソコン室行つて公式サイト見よ。曲の試聴も出来ると思つたし」

一
え、
じや
あ行
く「

というわけで、今日もあたしは藤堂くんと一緒に帰ることになりました。

最近
暮しよね

四ノ一の事

四人でいる時はそんなに意識しないで済むのだけれど、二人きりになると微妙な気分になる。

「器屋に行っちゃって……」

と思ふ。藤堂ぐん、会話がなし語扱

「何が気遣われるみたいで嫌よね。」

藤堂くんは頷いて、小さく溜め息をつく。

季節が寒くなり始めてから、彼はちよつと

季節が寒くなり始めてから、彼はちらりと體が伸びたように思つ。滝口によると、お兄さんは背が高くてイケメンだつて言つから、藤堂くんもやうなつてしまふのだろうか。嫌だな。

卷之八

何處高麗人

言つてみた。

「今度、デートしない？」

卷之三

は、と皿を逸らし、腰を下へんに曲げて、

「あの、でもね、提案があるの」「薄音一進二人の影が遙れる。

薄暗い道に一人の影が揺れる。あたしは前々から考えていたこと

を思い切って口にした。

「藤堂くんが女の子の格好して、あたしも男装するの」
あたしの彼氏は少し困ったように笑うと、いつもと同じ口調で言った。

「良いと思つよ」

「あーもひ、可愛いんだからつー萌え！」

「でも、どこ行くの？」

「そうね、新宿とか原宿とか？」

わくわくしながらあたしはそつと口づけた。

「それなら、原宿が良いな。僕、新宿知らないし」

「あら、そうなの？ ジャあ原宿をふらふらしまじょひ

と、あたしはこつこり笑う。すると藤堂くんも微笑んでくれるから、好きだ。この瞬間が、最高に幸せ。

「でも、男装つてしたことないのよね。ビーツしたら良こと思つ？」

と、問い合わせると、藤堂くんは言つた。

「うーん、どんな系統にするかにもよるんじやない？」

「ああ、そうよね。あの……あたしね、一度で良いから執事の格好してみたいの」

素敵じゃない？ と、あたしが問うと、藤堂くんは笑つた。

「ああ、良いくもね。高内さんなりきつと似合ひ

「……………」

「うん、すごく素敵だと思ひ

ただ、執事の衣装を揃えるのって難しそうだと思う。それに、

「藤堂くんと並んだり、お嬢様と執事つて感じになっちゃいそうだ

けど

「え、ダメなの？」

「え？」

聞き返されてドキッとした。

「僕はむしり、嬉しいなあ。あの、僕、お姫様とかお嬢様に憧れるから

と、藤堂くん。やつぱり彼は、心は完全に乙女である。可愛い。

「そうね、そうよね。あたし、頑張って衣装探すわ」

それでいつか、藤堂くんをお嬢様って呼んでドキドキさせてやるんだからー。

甘く見ていた。執事の衣装は予想よりも高価で、いつもと買えた物ではない。

家のパソコンで確認し、あたしは溜め息とともににがくつと頃垂れた。コスプレって、予想よりもお金かかるのね。

少しでも安く買えないかと思つてネットオークションも見てみる。しかし値段はあまり変わらなかつた。……いや、確かまだお年玉が残つていたはず。

思い立つたあたしはすぐに自分の部屋へ行つて引き出しを開けた。奥の方にしまったお年玉のいくつかを取り出してみる。それらを開けると、偶然にもお年玉がそつくりそのまま残つていた。これら、足りる……！

急いでパソコンの前に戻り、お気に入り登録していたネットショッピングで再び執事検索をかける。ドキドキしながら、購入ボタンにカーソルを合わせて……躊躇う。

一つ息をつくと、我ながら馬鹿だなと思つた。かわいこちゃんの為にここまでするなんて、自分でも思わなかつた。いや、藤堂くんのことは大好きなんだけどね。日常的に金欠が基本の高校生だけど、やっぱりデートは楽しみたいし。

嗚呼、でもやつぱり、いくらお年玉を使つとはいえ、これは痛い出費だ。もつと他に使い道があるはずなのに、こんなところで一氣に使うなんて……後悔したくないタイプなので、ちょっと迷つてしまつ。

いやいや、これも全ては藤堂くんの為。惜しみだつてしょうがない。

……そう、そうよ、つの。あの子の可愛い笑顔のためなら、これ

くらいどつてことないわ！ 時には諦めも肝心よ！
勇気を奮い起こし、あたしはマウスをクリックした。

オレは真咲と違つて非常にモテる。ここ過ぎた、どうりでかといえ
ばモテる。

「告白されちゃった」

「またか」

呆れたように言つゝ夜司やつかさへ、オレは言つ。

「でも付き合ひ気になれないんだよなあ」

「彼女に振られてまだ一週間しか経っていないし」

「でも、すげー可愛い子なんだよ。マイ」「わやんって言つて、看護

学校行つててさ、性格も悪くないし」

田の前にいる友人がこいついた話題に興味がないのはいつものことだ。オレはどちらかといふと一人でだらだら語りたいだけなので、聞いていてくれれば十分。

「でもでも、オレつてこいつ見えて一途だし?」

「どこが?」

「と、突つ込む夜司。

「え、ひどい。オレ、すげー一途だぜ。元カノにいくら戻もどしたと思つてるんだ」

「良いように使われただけだろ」

「あつ……その通りです」

もう嫌だ、落ち込む。夜司の突つ込みはありがたいが、胸にぐさつと来る。

机に突つ伏して溜め息をつく。

「あーあ、困ったなあ」

モテる男つてのも辛いものだ。まあ、女の子は好きだから良いんだけど。

「前から思つてたんだけど」

と、ふいに夜司が口を開いた。オレは顔をそむけたと向けて上目遣

いに彼を見る。

「就活に専念したらどうだ？　お前、遊んでばかりいるからダメなんじゃないか？」

「……女の子ないと生きる意味がない」

「そうか」

スルーされた。

「つづーか、何でお前はいろんな奴と付き合えるんだ？　それも、一週間とか一ヶ月とか」

と、夜司が本当に不思議そうに問う。

「だつてモテるんだもん」

「しね。ちゃんと答えろ」

適当に返したら怒られた。オレは顔を上げて椅子の背にもたれる。「何でだろうな」

頻繁に合コンしてるっていうのもあるだろ。バイト先にも出逢いはあるし。

「付き合いつつて、一晩だけとかの軽い気持ちじゃ出来ないだろ」

「まあ、そうだな」

初めて彼女が出来たのは高校三年生の時だった。後輩の女の子と付き合つたのだが、すぐに上手く行かなくなつて三ヶ月で別れた。そして大学生になつて初めてした合コンで一人目の彼女と出逢つた。

「最初は真剣な気持ちで付き合つても、相手を知るほど嫌になるつていうか」

最短で一週間、最長でも四ヶ月程度だ。だいたいは一ヶ月か三ヶ月で別れる。

「何があるんだよなあ。あっちもさ、オレに関心なくなるみたいで」

「今まで何人と付き合つた？」

「え？　えーっと……九人」

両手を使って数えてギリギリの数字。

夜司は呆れたようにオレを見て、鼻で笑う。

「よく分からないな」

何がだ。むしろ、オレだって男を好きになるお前がよく分からねえよ。

言いたいことを胸の中に押し込んで、オレはこつものよひへりへら笑う。

「オレにもよく分かんねえや」

長く付き合えるなら付き合いたいと思つ。けれども、すぐに関係が枯れてしまつ。

「結婚しても別れようだよな、お前」

「やつぱぱそう思つ。オレ、長男だから困るなあ。両親に心配かけられねえよ」

と、オレはわざとじりじり溜め息をついてみせる。

「まあ、その内に見つかると良いな」

夜司が優しい言葉をかけてくれて、思わず胸がほつこつした。

「そうだな。いつか見つけてみせると、ずっと一緒にいても飽きない女」

それまではまだ、模索していたって良いのかもしない。どちらにせよ、心配せずともオレはモテる。

先日告白してきたマイコちゃんには断つて、オレはとうとうあえず就活に打ち込むことにした。

すでに四十連敗を達成しているので、そろそろ危機感も出てきた。今まで感じていたけれど、実感を伴つよになつたのはつい最近だ。

インターネットの就職サイトを駆使し、気になる企業にはすぐにエンタリー。会社見学や説明会への参加が必須であれば、スケジュールを確認して都合が良ければ申し込む。

リクルートスーツは着慣れたもので、最初の頃ほど違和感を感じなくなってきた。オレがスーツを着るイメージがないのか、周囲からウケもいい。

さつさと朝食を済ませ、スーツに着替えて部屋を出る。

「……咲真」

食卓でのんびりしていた真咲に呼び止められ、仕方なく顔をのぞかせた。

「何だよ」

真咲はまだパジャマ姿だった。

「忙しい?」

「は? 忙しいに決まってるだろ」

ムカツと来たので、すぐに玄関へ向かつた。

「今日は何時に帰つてくるの?」

「さあな

ぶつ毛ひぼうに返して、さつさと階段を下りる。真咲がこちらを見ているような気がしたが、構わずに家を出た。

今日は説明会と会社見学に行かなくてはならないのだ。忙しくないはずがないだろう。

真咲はその実力を認められて大学院に行つて研究に携わるらしいが、オレにはあいにくとそんな選択肢は与えられていない。出来の良い夜司なら苦労すれば偉い人の下で働くかもしれないが、オレは違う。努力したつて結果は変わらないのだ。

それなら、一般企業に就職して一般的な家庭を築きたい。オレは、せめて幸福になりたいのだ。

朝から苛々していたせいで、電車を間違えた。慌てて遅刻の電話を先方に入れたが、これが恥ずかしくてたまらない。

がたんごとんと揺れる電車の中で溜め息をつく。今日はついていない。

私立の小学生だろうが、女の子と男の子たちが元気にきやつきやとはしゃぎまわっていた。低学年なのか、話す言葉もまだまだ拙くて愛らしい。

子どもは好きだ。

夜司にそんな話をしたら、何故か口リコン認定されてしまつたけれど、案外間違いでもなかつた。小学生の女の子は好きだし、幼稚園生はもっと好きだ。

だがしかし、オレも一応男なので、そういうふた衝動に駆られることもないではないが、見るだけに留めておくと決めていた。犯罪者になるのは「めんた」でも、やっぱり幼女は好きだ。

「……」

こんなことばかり考へているから、ロリコンって言われるんだろうな。ふとそう思つて、また溜め息が出た。

でも、いたいけな幼女を泣かせるのは趣味じゃないし、同意の上じゃないと気が気じやない。

可愛い女の子は好きだけど、やっぱり一緒にいて飽きない人が良い。だつて人は見た目じやない。共通の趣味があるか、互いに尊敬しあえるか、そういうふた内面的なものつて大事だと思つ。だから…

：年齢だつて、関係ないはずだ。

自分で自分を正当化させている気がしてきた。もうダメだ、オレ。車窓に目を向けてビル街眺める。こんなところにオレを受け入れてくれる会社があるのだろうか。いいや、この世界に在るのだろうか。

本当に頭の悪い奴からしたら、全然マシなオレだけど、今の時代は学歴じやない。即戦力なのだ。この不景氣を生き延びるには、すぐく使える奴じやないとダメなのだ。

オレはちゃんとほらんで、女の子がいないとダメで、成績も良くないし、態度だつて良くない。長所と言えば顔くらいのもので、精神的にはまだまだ子どもだと分かつてゐる。根性とか忍耐とか、集中力があつたら良いのと思つ。

自分では頑張つてゐるつもりだけれど、眞咲に言わせたら、オレの努力は努力ではないのだと思う。それは、それくらいあいつが頑張つてゐる姿を知つてゐるからなのだが、オレだつて自分なりに頑張つてゐる。

電車が駅について、オレは腰を上げた。

子どもたちの横を通つて車外へと出る。相変わらず騒いでいるあの子は無邪気な笑顔で、無意識に気持ちが明るくなる。

けれども、普段は考えずに放置している幼女への愛は、ただオレを異質化させるだけだった。

出来ることなら、保育士になつて毎日子どもと戯れたい。そんなんのは空想で、実際にやつたら自分で自分をロリコンだと、変態だと認めるだけだ。危ない危ない。

「……よし」

改札を抜ける前に気合いを入れる。

今は幼女のことよりも、就活だ。すでに遅刻が決定しているだけに、きちんとした態度で臨まなければ先は見えないだろ？

一刻も早く、内定が欲しい。

大学院に行くとかほざきやがつた真咲を、ぎやふんと言わせてやるのだ。

昨日届いたばかりの執事服をキャリーケースに入れて待ち合わせの場所へ向かうと、真っ白な妖精さんがいた。

見つけた瞬間にドキッとして、目立つなん……なんて思いながら歩み寄る。

「藤堂くん」

名前を呼ぶと、妖精さんがあたしに氣づいてこりり笑った。

「ああ、高内さん」

「待つた？」

「ううん」

あたしもにっこり微笑み返したが、それにしてもどうじょう。

「どこかで着替えられないかな」

きょろきょろと周囲を見回す。真っ白なロリータドレスにもこの白いケープを羽織った藤堂くんが言つ。

「駅のトイレ、とか」

「ああ、そうね」

原宿に向かう途中の駅だったので、とりあえずあたしはトイレに向かうことにした。

「それにして……」

と、あたしが振り向くと、藤堂くんが慌てた。

「え、何か変？」

あわあわと頭をいじってみたり、足元を見たりする藤堂くん。肩より長いエクステはストレートで、頭頂部にはこれまた真っ白な大きいリボンが付いている。靴も新たに買ったと思われる白いワンストラップシューズだ。

「ううん、すごく可愛い」

「……あ、ありがと」

嬉しそうに頬を赤らめる藤堂くん。本当に妖精みたい。ちょっと

季節が早いが、雪の妖精さんだ。

「じゃあ、着替えてくるね」

と、あたしは女子トイレに入つていいく。

執事服はちょっとときつかつた。体重を量る習慣がないから分から
ないが、夏の頃に比べて太つたのかもしない。その脂肪が胸に集
まつてくれないのが残念だ。

ズボンの丈はちょうど良かつたので、わざと氣にしなることにし
た。

「お待たせ」

と、藤堂くんの元に戻ると、彼が手をキラキラさせた。

「か、かっこいい……」

「そう?」

「うん……すごく似合つてるよー。」

気に入つていただけたらしい。あたしはちょっと調子に乗つて右
腕を差し出した。

「それでは行きましょう、お嬢様」

「うん……！」

嬉しそうに彼があたしの腕をとる。本当に執事とお嬢様だ。素敵
すぎる。

さすがにあたしたちの格好は人の目を引いた。おじさんおばさん
に限らず、同世代の人たちも訝しげに見つめてくる。

電車に乗り込むと、あたしは彼に尋ねた。

「ちょっと聞きたいんだけど、その格好で出てきたの?」

「え、うん」

「……恥ずかしく、ない?」

聞くまでもないことだと分かつていたけど、尋ねずにはいられな
かつた。

「うーん……ちょっと」

と、若干声を潜めて彼が言つ。注目されて恥ずかしくないはずが

ないだろ？

「あ、でも、少し慣れてきたよ」

藤堂くんはそう言って少し笑つた。彼はすでにその姿で街を歩いたことがあるからだろ？ だけど、あたしはやっぱり恥ずかしい。

「それに、一人じゃないから」

「……あんまり可愛いこというと、襲うわよ」

脅しのつもりであたしが言つと、藤堂くんは小さく頷いた。

「僕、別に構わないよ」

あたしは女の子だけれど、むらむらする。男だったら、すぐにでも物陰に隠れて襲つてしまいそうだ。だが、あたしはやっぱり女の子であつて、襲い方も知らないのでやらない。

「……普通は逆なのに」

と、咳いて溜め息をつく。本当に藤堂くんつてば、男らしくないとこつか……可愛すぎるんだから。

原宿に来ると、自分たちの格好がそれほどおかしくない気がしてきた。もつとすこい人だつていらないわけじゃないし、建ち並ぶ服屋は藤堂くん好みだし。

「さすがに人多いね」

と、藤堂くんが咳く。竹下通りは早くもクリスマス気分になつていて、たくさんの人々が行き交う。

「藤堂くん、白いから気をつけないと」

あたしが彼に目を向けると、彼は頷いた。

「うん、そうだね」

靴は仕方ないとしても、衣服に汚れが付いたら大変だ。飲食にも気を遣おうか。

竹下通りに踏み込んでみると、夏でもないのに暑苦しい感じがした。上から見たのと違つて、実際に歩いてみるとキツい。

ふと横を見たら藤堂くんが人波に飲まれていてびっくりした。はつとしたあたしは、すぐに彼の隣へ立つて手を差し出す。

「はぐれちゃダメよ

「『』、『』めん」

と、藤堂くんがあたしの手をとる。『』と繋ぐと、胸がむずか
ゆくなつた。でもそれが、不思議なほどに心地良い。

「……僕、ちよつと考へたんだけど」

「何？」

がやがやと騒々しい通りを一人で歩く。

「あの、名前で呼んでもいい？」

「……じゃあ、あたしも名前で呼ぶ」

何だか恥ずかしくなつて、素つ氣ない返答をしてしまつた。藤堂
くんが小さな声で言ひ。

「で、でも、恥ずかしいから……りのさん、でも良いっ。
まさかの『さん』付け！？」

「……う、別に構わないけど」

何だかおかしくないか？　いや、でもそんな藤堂くんも可愛い。

「じゃあ、りのさんで」

と、彼がにっこり微笑む。

「えつと、夕樹……？」

初めて彼の名前を呼んでみたが、何だかしつくり来なかつた。
彼もそれには気づいたようだ言ひ。

「長いからユイで良いよ」

「でも、それだと滝口と変わらな『じやない』

「え？　あー……じゃあ、好きにして」

好きにしてつて言われちゃつた。でも思いつかないわ、どうしま
しょ。

「ゆいゆい」

「……パンダ？」

「えーっと、ゆいたん。いや、違うわね」

自分で言つて恥ずかしくなつたので却下。男に対しても『たん』は
たすがにないわね。

「ゆいっし、ゆいりん」

「あ、あの、無理しなくて良いよ」

彼があわあわし始めた。けれどもあたしは構わずに囁く。

「ゆいにゃん、ゆいぴー」

そろそろネタが尽きてきた。考えた末にあたしは言つ。

「良いわ、コイで」

「う、うん」

恋入つてなかなかに難しいのね、知らなかつた。小さく溜め息を

ついて、前方に目を向ける。

「でも、ただこうして歩いてるだけでも楽しいわね」

「うん、そうだね」

繋いだ手がまだぐすぐつた。何というか、この様子なら別れ際にキスのひとつは出来そだと思つ。いや、でも、普通は男の方から……諦めよう、彼はまるで女の子だから、あたしが素直に男役に回れば済む。こんなだから、いーしゃに男前だとからかわれるんだろうな。

「やうこえは、今日はミオと塚田わん、ライブだつて言つてたね」

「ああ、今日だけ?」

「うん。夕方からだつて言つてたけど、一人も楽しんでると良いなあ」

ゴイの言葉は遠回しに自分が楽しんでいるのだと聞こえた。

あたしは「やうね」と、頷いて、ちょっと氣になる話題を提起する。

「滝口も、彼氏とパートしたりするのかじりへー」

「……うーん、どうだろ?」

「お兄さんと話したりしないの?」

「しないことはないけど……朝帰りが多いんだよね、やつちやん」

朝帰りついで……男同士だと、やっぱり頻度も半端じゃないのかしら?……考えたら、頭痛くなってきた。

「でも、一度は会つてみたいわね、お兄さん」

「写真撮らせてって言つたけど、やつぱり逃げられちゃうんだよね」と、ユイが申し訳なさそうに言ひ。お兄さんの顔を見るための、良いアイデアはないかしら？

ぼーっとそんなことを考えていると、ふいにひらめいた。

「分かつた！ テートよ、テート！」

「え？」

目を丸くするユイへ、あたしはにっこり笑つてみせた。

「困ったな」

「ああ、困ったな」

と、適当に返事をする夜司。やつがさ オレは就活にどれほど打ち込んでも手応えを感じないから困ったのだと言っているのだが、彼は先ほどから誰かとメールのやりとりをしていた。

「就活する意味が分からなくなってきた」

「今まで何社受けた？」

「え、四十三かな」

夜司はふとオレの顔を見たが、すぐにまた携帯電話に目を落とした。

「ぐだぐだ言つてないで頑張ろうぜ」

と、夜司は言つ。そうやつてポジティブになれば良いのだが、本当にやる気がなくて困った。最悪、フリーターになるしか……駄目だ、真咲が邪魔する。

「つつか、さつきから誰とメールしてんの？」

オレが尋ねると、夜司は携帯電話を机に置いた。

「彼氏」

「ふーん？ 嘘嘆でもしたの？」

普段はそんなに頻繁に携帯電話をいじらない夜司のことだ、きっと何かあつたのだろうと思つた。

「いや、喧嘩じゃないけど説得中」

「説得？」

彼の携帯電話が震えだし、すぐに夜司はそれを手に取つた。ボタンを押して確認すると、彼は溜め息まじりに言つた。

「弟にさ、ダブルデートしないかつて言われたんだ。最初は断つたんだが、すぐに別行動しても良いっていうからオーケーして……で、彼氏が今、こんな状態」

と、画面をオレへ見せる。

『あいつらと一緒に遊園地なんていきたくない』

『俺といふところを弟たちに見られたくないらしい』

「何だそれ」

「何て言つか……あいつ、妙にプライド高いんだ」

その気持ちは分からぬでもなかつた。自分を知つてゐる人に自分の付き合つてゐる人を紹介するのつて、ちょっと恥ずかしい。

「うーん、やつぱり直接会つて話すべきか……」

呟いてから文章を打ち、やがて机へ戻す夜司。

「お前、ここ最近、楽しそうだよな」

「ん、まあな」

「幸せ？」

「うん」

「……その彼氏つてのは、どんな奴なの？」

夜司は少し考へると、オレが今まで見たことのない顔をして言った。

「年下だよ。まだまだガキなんだけど、すげー可愛いんだ」

「かつこいいじゃなくて？」

と、オレが聞き返せば、夜司は首を振る。

「確かに大人びてはいるが、可愛いな。時々、素直じゃないし 分かるようで、分からぬ。」

夜司の恋愛話を聞くのは初めてだつた。オレは小柄な子が好きなのが、同性にしか興味のない夜司にはまた違つた見方や好みがあるようだ。

「外見は、そうだな……お前よりけよつと背が低くて、整つた顔してて猫っぽい」

「へえ」

「あ、あと、意外と良い身体してる」

「おつと、分かった、もついい。ありがとう」

と、オレは夜司へ両手の平を向ける。夜司は語り足りない様子で

「おう、そうか」と、言つ。

オレには男同士の下ネタを聞く勇気がなかつた。聞いたところでは変な想像をしてしまい、微妙な気分になるだけだろう。

「そういうや、写メがあつたな。ちょっと待て」

と、携帯電話を手に取る夜司。別に見せてもらわなくて結構なのだが……夜司は人の顔を撮るのが好きだから、しうがないか。

「ちょっと見にくいけど」

諦めて画面をのぞき込むと、ベッドに横たわっていると思われる少年が写っていた。長い髪のせいで顔が見えにくいものの、夜司が幸せいっぱいことだけは伝わってくる。

「お前つてほんと、遠慮無いよな

「そうか？」

「人の顔、撮るの好きだし」

「撮った後、許してもらうから良いんだよ」

夜司の言葉は自分を正当化しているだけのように聞こえ、オレは呆れて溜め息をついた。

急に男が足りなくなつたと言わられて参加した合コンは、すく地味だつた。

女の子たちは良くて上の下だし、雰囲気もすぐ微妙。いつもオレが盛り上げ役なのだが、良いところを見せたいらしくて友人が頑張つていたので大人しくすることにした。それに、オレは飽くまでも数合わせで、目立つてはいけないという空氣があつた。

それなのに女の子たちがオレにばかり声をかけるので、さらに空気が危険なことに……ああ、もづ。

「ちょっと便所行ってくる」

と、オレは席を立つた。せめてもの救いは、知つている店だといふことくらいか。これまでにも何度か合コンをした店だから、気兼ねなくいられる。

お手洗いの方に向かっていくと、向かいから女の子が歩いてくる

のが見えた。彼女もトライレ休憩らしい。

そんなことを適当に考えていたら、その彼女がトライレの前で立ち止まつた。女子トイレに入らず、オレをじっと見ていた。

「……サクマくん、久しぶり

「え……あれ、マイコちゃん?」

相手の顔をよく見て、はつとした。この前オレに電話で電話で告白してきたマイコちゃんだった。やばい、気まずい。

「まさかこんなところで会うなんて」

と、くすくす笑うマイコちゃん。彼女に会つのは四度目になるが、今日はまた一段と女子らしき格好をしていた。

「今日はあたしね、女子会なの。サクマくんは?」

「オレは、まあ、ちょっと……」

さすがに合コンとは言えなかつた。マイコちゃんは「やつか」と、

笑う。高く結い上げたポニー テールが揺れる。

「じゃあ、また」

と、男子トイレに向かおうとしたら、彼女が背中に声をかけた。

「いの後、一人で飲まない?」

「……え?」

ちらつと振り返ると、彼女はどこか必死な様子で言へ。

「今すぐでも、良いけど……」

オレは答えられなかつた。確かにマイコちゃんは可愛いし、性格も悪くない。だけど、告白を断つてもなお、オレを誘うのはそれだけ未練があるのであらうか。くーつ、男心がくすぐられるぜ。

「終わつたら、連絡ちょひだい」

「……おひ

すく複雑な気持ちを抱えたまま、オレは男子トイレの扉を開けた。

女の子は好きだ。だけど、オレは就活に専念すると決めていた。結局、マイコちゃんには何も連絡せず帰路についていた。あちら

からの連絡もないし、一度は振った相手なのだから気にすることはない。うん。

家に着くと、家族はみんな寝ていた。すっかり静かになつた家を、なるべく静かに歩く。

一階も消灯され、真咲の部屋からは物音一つ聞こえなかつた。自分の部屋に入つて明かりを点ける。

コートを脱いで荷物を下ろす。

寝間着に着替えて布団を敷く。いつもと代わり映えのない慣れた動作。

布団の上に腰を下ろして、倒れ込む。その辺に置いたはずの携帯電話を手探りで見つけ、画面を開く。

オレはちょっと後悔していた。彼女の誘いを断らなかつたら、今頃はどこで何をしていただろう？　ああ見えて積極的な彼女だから、ホテルか何かに連れ込まれたかもしれない。

それならそれで良いはずなのに、オレはやつぱり自分の決めたことに背を向けられなかつた。遊んでばかりではいけないのだ。

携帯電話を閉じて枕元に置く。

そういうえば、真咲の恋愛に関する話を聞かなくなつたな、と思う。中学の頃、サッカー部の先輩に惚れていたことは知っているが、それしか知らない。あいつももう大学生だし、彼氏の一人くらいいたつておかしくないのだが、真面目で努力家だから敬遠されているかもしれない。

……でも、あいつはオレがこうして、女の子とばかり遊んでいることも知らないのだろう。薄々気づいていても、あいつは口にしないから詳しく述べられないはずだ。　話したくもないから、どうでもいいけど。

冷めてるなあ、本当。特に問題がないから普段は考えもしないが、双子にしては珍しいんじゃないだろうか。いや、男女だから仕方ないのかもしね。

……いつになるかは分からぬけれど、真咲はこの家を出て誰か

と暮らすのだらう。それまでの辛抱、それまでの関係だ。
オレもいつか、一生を共に出来る女性を見つけるんだ。
……見つ
けて、自分の家庭を築くのだ。

「初めまして、高内りのです。あの、いつもお世話になつてます」と、頭を下げるりのさん。やつちゃんは軽く会釈をして言い返す。「ああ、こちらこそ弟が世話になつてます。えつと、兄の夜司やつかさです」

「知つてます」

「……え、ああ」

何だかすごく変な空氣。りのさん、何だかハイテンション。なのに美音はむすつとしている。

「じゃあ、行こうか」

と、僕が言うと、りのさんが笑つた。

「ええ、そうね」

と、彼女に手を引かれ、歩き出す僕。今日は一人一緒に買つた色違いのパークーを着ているのだが、コートに隠れてよく見えなかつた。もちろんレディスものなので、ちょっと恥ずかしいと思つていた僕は安心していた。

後ろではやつちゃんが美音に何か声をかけていた。最初にはつくり断つっていた美音だが、やつちゃんに説得されてここに来ていた。その為、あまり乗り気でないのは仕方がないことだ。

「お兄さん、本当に似てないのね」

りのさんがそう言って、僕は少し後ろを気にしながら答えた。

「でしょ？ あつちが父さん似で、僕と妹が母さん似なんだ」

「身長も、本当に高いし……不思議な感じだわ」

と、りのさん。後半は美音のことを言つていてよつだった。

二人が一緒にいるところを見るのは一度目だが、やつちゃんも美音も、普段とはまったく違つた顔である。家族には決して見せない、弟の僕ですら初めて見る笑顔。友人である僕らですら知らない、どこか大人びた表情。

「何だかんだで楽しそうね」

と、りのさんがくすっと笑う。何か文句を言いながらも、美音の声は楽しそうだった。

「やうだね、僕らも楽しまなきや」

そう言って僕も少し笑つた。

遊園地の中はクリスマスの飾り付けがされていて綺麗だった。高いところに設置されたスピーカーからもジングルベルが聞こえる。

「じゃあ、まずはティーカップから」

と、りのさんが後ろを振り向く。ぐるぐる回るアトラクションは、みんなで楽しめるからテンションも自然と上がる。

しかし、やつちゃんは嫌そうな顔をした。りのさんが「苦手？」と、尋ねると、やつちゃんは言つ。

「あ、いや、別に何でもない」

そういえば、やつちゃんって昔から回ったり落ちたりするアトラクションが苦手だった。僕は好きでも嫌いでもないから大丈夫なのだけれど。

「じゃあ高内、がんがん回そうぜ」

と、美音が意地悪な笑みを浮かべた。

「もつちろん！　コイは平氣？」

「うん、平氣」

やつちゃんが苦笑いでそっぽを向く。回す人が一人いるなら十分だし、僕は何もせずにいよう。……やつちゃんの為にも。

季節柄、園内にはカツプルが多くた。僕とりのさんはずっと手を繋いでいるので、その中に溶け込んでいることだらう。でも、やつちゃんと美音は手を繋がずに、一定の距離を置いて歩いていた。先ほどとは形勢が逆転し、今度はやつちゃんが美音に文句を言つている。

ティーカップに四人で乗り込むと、りのさんと美音が中心にあるハンドルをしつかと掴む。

カツプが動き始めると、二人はものすごい勢いでハンドルを回し

始めた。あつとこう間にカップが回転し、景色の流れが速くなる。

「まだいける！」

「ええ、まだまだいけるわ！」「

りのさんと美音が意気投合するなんて珍しい。でも、思えば一人は最初から仲が良かつたんだろう。でなければ、クラスが同じになつても相手に声なんてかけない。

「やばい、もういい、やばい」

と、やつちゃんが美音を止めようとするが、左手を額に当てていで力が入らない様子だつた。美音は構わずに限界までハンドルを回し、僕はただ笑っていた。

ぐるぐる回るティーカップ、りのさんが楽しそうに笑う。美音がやつちゃんへ「ざまあみろ！」と、言ひ。やつちゃんは何も言わず終わるのだけを待つていた。

それからいくつかのアトラクションに乗つて、ちょっと早めの昼食をとつた。

やつちゃんはティーカップの後から気分が悪そうで、僕はちよつと心配だつた。美音は元から意地悪なわけじゃないから大丈夫だとは思うが、あまりいじめすぎないように注意してもらわないと。

「で、この後は？」

と、食事をしながら美音が問う。

「予定では自由行動ね」

鞄から取り出したノートを開いてりのさんは言ひ。そこには、僕と一人で練つたスケジュールが書き込まれていた。

「で、集合は四時半」

「思つたよりも短いな」

と、やつちゃんが言ひと、りのさんは当然のように答えた。

「だつて寒いんですもの。早く帰りたいでしょ？」

やっぱり彼女はクールだ。本当にさつぱりしている。

「そうだな、明日からまた学校だし」

と、賛成する美音。つのさんはノートを鞄へしようと、ジュースを一口飲んで言った。

「あ、あとプリクラ撮りましょー！」

「プリクラ？」

嫌そうにするやつちゃんだが、美音と皿を合わせると口を開じた。「滅多にないし、良いんじゃね？」

と、美音が楽しそうに乗つてくる。『写るのは好きじゃないやつちやんだが、反対しても意味がないので何も言わないようだ。』

「良い記念になるね」

僕がそう言えば、やつちゃんが溜め息をついた。完全に諦めた様子だった。

園内にあるゲームセンターへ行くと、そこもカッブルで賑わっていた。暖かい空氣に癒されながら、プリクラを探す。

「あ、やつぱりあつた」

と、先頭を歩いていたりのさんが立ち止まつた。

プリクラを撮るのは僕にとつても久しぶりのことだつた。中へ入つて、一人百円ずつ機械に投入する。

りのさんができぱきと画面を操作。白い明かりが眩しくて、女の子一人に男三人というのが、改めておかしな組み合わせのように思つた。

「ほら、撮るよ！」

と、楽しそうに言つて、りのさんがちょっと腰を低くした。その隣で僕も腰をかがめ、後ろにやつちゃんと美音。ポーズなんてどう取つたらいいか分からないので、とりあえずピース。

一枚目はちょっと微妙な感じだつた。

楽しまなきや、と改めて思つた僕が彼女へ抱きつく前に、抱きつかれた。一枚目はラブラブ。

何を思つたのか、三枚目は後方の一人が僕らの真似をして抱き合つていた。いや、美音が一方的に抱きついているだけか。

それからまたりのさんが画面を操作し、四枚目。立ち位置を交代

すると、美音が積極的になり始めた。その初めて見る姿にビックリしながら、僕は五枚目でのさんの頬にキスをした。

最後は狙つたわけでもないのに、僕らも前の二人も、キスをしていた。終わつてから、恥ずかしさでいっぱいになる。

落書きは自然の成り行きで、りのさんと美音がやることになった。

「……」

機械から少し離れたところで、やつちゃんと立っていた。僕はまだ恥ずかしくて、口元に手をやつていた。

「……」

やつちゃんに聞きたいことはいっぱいあつたけど、どう聞いて良いか分からぬ。美音と仲良いね、なんて当たり前のことだから意味がないし。

「やつちゃん、意外と楽しんでたね」

「……まあな」

会話は続かなかつた。きっと、やつちゃんも僕に対して何か思うところがあるに違いないのに。

出来上がつたプリクラは、やけに華やかに仕上げられていた。たぶん美音がやつたのだろうけれど、ハートマークがいっぱいだ。
…これはこれで、何となく恥ずかしい。

「じゃあ、四時半にここ集合ね」

とりさんは言うと、僕の手を取つて早速歩き始める。

やつちゃんと美音が何か言葉を交わすのが聞こえたが、りのさんの声でかき消された。

「お兄さん、面白い人ね」

「え、そう?」

僕が聞き返すと、彼女は笑つた。

「だって、嫌つて言いながら最後はノリノリだつたじゃない」

先ほどのプリクラのことだった。確かに、五枚目まではあまり楽しそうじゃなかつた。それが最後、美音に熱いキスをしているのだ

から……。

「でも、やっぱり微妙な気分だなあ」「二人が付き合つているという事実を、今さらながらに実感させられていた。

「……そうね」

と、りのさんは言ひ。

「滝口が、あんなにはしゃいでるのも珍しいわ」「うん……きっと、あれが本当のミオなんだよね」僕には近づけないし、理解も出来ないとこにいる彼を思つて、また変な気持ちになる。

「……あれも、よ」

と、りのさんが言ひて、僕ははつとした。

「え?」

「あれも、滝口。あたしたちの知つてる不真面目でやる氣のない滝口も、滝口。どっちも、本当のあいつだわ」

「そつ、か……うん、そうだよね」

僕は頷いた。誤解しそうになつていていたが、りのさんの言ひとおりだ。やつちゃんと楽しそうにはしゃぐ美音も、普段の口の悪いいじめつ子な美音も、どっちも彼だ。本当も嘘も、何もない。

そしてふいに、りのさんが僕の手を強く握つた。

「さあ、まずはお化け屋敷に行きましょ」

「え、あ、うん」

向けられた笑顔があまりにも素敵で、僕はドキッとした。思考を切り替えて、僕はそれ以上考えるのをやめる。

「ジョットロースター乗りたい」

「駄目だ」

「何でー？」

夜司 やつかさは不機嫌におれを見て、溜め息をついた。

「苦手なんだ」

「えー、楽しいのに。ジョットロースター」

と、おれが言うと、やっぱり夜司は嫌がる。

「楽しくなんかねえ。乗るならもつと普通の奴にしてくれ」
おれは不満だったが、構わずにのんびり歩き始めた。

「でもー」、絶叫系ばっかだぜ？」

「じゃあ、乗らなきゃ良い」

「乗らないでどうするの？」

「店入るとか」

「……つまんねーの」

と、おれはあからさまに溜め息をつく。夜司 やつかさがジョットロースターに乗れないなんて知らなかつた。あの夕樹ゆいづきでさえ平氣なのに、人つて見かけによらない。

高内がダブルデートなんて言い出した時は、すぐに拒否した。他人に彼氏と一緒にいるところを見られるのはすゞく嫌だつたからだ。特に、高内には見られたくないと思っていた。あいつは夜司の顔が見たいだけで、そんなの夕樹にしつこく頼めばどうにかなつただろう。それなのに、わざわざおれまで居る必要があるのか？ と。

でも、結果としておれは楽しんでいた。夜司と昼間に出来くじとは滅多にないし、ましてや遊園地で彼氏をいじめるのは面白い。ブリクラだって、高内と夕樹がいぢやいぢやするから便乗して……最終的にはキスされちゃつた。何か、嬉しかつたなあ。

「どうせ時間もそんなにないんだ。ゆっくりしよう」

と、夜司が言い、おれはしづしづアトラクションを諦めた。

そこいら辺にある店や土産物を適当に見てたら、あつといつ間に時間が過ぎてしまった。本当に短かった。

けれども、別に大した不満はなかつた。ジンギスコースターに乗れなかつたのは残念だけど、夜司を無理させてまで乗りたいとも思つていなかつたから。

集合場所で一人、温かい飲み物を飲みながら待つ。
「何か、欲しいものあるか？」

「え？」

ミルクティーの缶から口を離して彼を見る。

「クリスマスプレゼント」

と、夜司がおれと目を合わせた。ああ、と納得してから、おれは視線を逸らすと缶を両手で持つた。

「別にいらないよ」

冷えた指先が温まる。今飲んでこむミルクティーも、おじつでもらつていた。

夜司はしばらくおれを見ていたが、ふと前を向いた。

「五千円以内なら、何だって買ってやるからな」

年上であることを気にしているのだろうか。何だかおかしくなつて、おれは少し笑う。

夜司が不思議そうに首を傾げると、見慣れた二人がようやくやって來た。

「さあ、次は観覧車よ！」

と、高内が元気いっぴに声をかけてきて、おれはミルクティーを飲み干した。

何故最後に観覧車なのか、高内に尋ねると馬鹿にされた。

「日が沈む頃に乗るのが良いんじゃない。そんなことも知らないの？」

「……うるせえ」

大体にして、おれはあまり遊園地に来た事つて少ないのだ。観覧車だつて……あれ、乗つたことないな、そういうや。

「では、一人で『ゆづくりどうぞ』

と、にっこり笑顔で高内と夕樹が乗つていぐ。その次のゴンドラにおれと夜司は乗り込んだ。

「こいつのつて、バランス取つた方が良いんだよな」

言いながら向かつて左の席に陣取るおれ。その向かいに夜司が座る。

扉が閉められて、徐々に上へと上がつていぐ。少しだけぐらぐらと揺れているのが怖い。

「うわ……」

下をのぞくと、園内が灯り始めたイルミネーションできらきらしているのが分かつた。

「お前、初めてか？」

「うん」

夜司の問ひに正直に答える。地上との距離が離れるほどに、おれはドキドキしていた。

「……昨日、面接だつたんだ」

と、夜司が急に言い出して、おれは窓の外をのぞくのをやめる。「へえ、それで？」

「役員面接だつた。二十日辺りに、連絡が来る」とになつてゐるゆつくり、ゆつくり、頂上を目指すゴンドラ。

「……今回は、いける気がしてる」

就活のことなんて全然知らないおれだけど、その言葉は嬉しかつた。夜司の就職が決まるのは、彼氏として喜ばしい。

「すごいじゃん。良かつたね、夜司」

「うん……まだ、分からぬけどな」

と、夜司がちょっとだけにやけた。二十日過ぎ、ところとせくリストマス直前か。

「採用されると良いね」

「ああ」

六十社受けて、ようやく決まるのか。就職は厳しいって世間では言われるけれど、本当のことなんだろうな。

ふと見ると、夜司の向こうに高内と夕樹の乗ったゴンドラが見えた。もうすぐで頂上だ。

「何か、観覧車って思つたよりもつまらないな」と、おれはぼやいた。ただ頂上を目指して、下へ戻るだけの乗り物だ。楽しめるのも景色くらいしかないし。

「それでもないんじやないか」

夜司がふと立ち上がり、おれの隣へ腰を下ろした。ゴンドラが揺れて、バランスが悪くなる。

窓の外が街全体を映し出す同時に、夜司がおれを抱きしめた。いつもよりも力強く重ねられた唇、ドキッとして身体が疼く。ゴンドラが下り始めると、夜司が微笑んだ。

「な？」

二人きりの空間も、楽しむ要素の一つだったようだ。それにしても、王道すぎる。夜司は意外と単純思考だ。

予定通りに帰路へ着いていた。

夜司と夕樹を降ろした電車が動き出す。

「楽しかった？」

と、高内が尋ねてきて、おれは答えた。

「まあまあ」

本当はず「」く楽し�かつたし、とても満足していた。けれども、高内にそんなこと言いたくない。

「それは良かった」

がたんごとんと夜の街を走る。車内にはおれたち以外にも客が居たが、静かだった。

「あなたたち、お似合いだわ

「は？」

「会つ前はちょっと心配もあつたんだけど、真剣交際つて感じ」「……何様だよ、お前」

と、おれは苦笑いをする。高内はくすっと笑つた。

「滝口が幸せそうで、安心したのよ」

「意味分かんねえ」

「まあ、想像してたのとは違つたけど」「はあ？」

想像つて何だ？ いや、高内は何を言いたいんだ？

「だつて、あんたがイケメンだつて言つから」

と、高内。思わず反論しそうになつたのをこらえ、おれは返す。

「勝手に言つてろ」

だつて夜司は十分にかつこいいだる。あの夕樹の兄貴だぜ？ 比べたら、断然男らしい。そりやあ、女子から見たらイケメンとは言い難いのかも知れないけれど、おれにとつてはイケメンだ。かつこいいし、超可愛い。

「……滝口つて、意外とシャイよね」「つぬせえ」

楽しそうにしている高内が憎らしくて、おれは目を合わせないようとした。こいつとはすでに三年近い付き合いになるが、一人で話をするといつもペースを狂わされる。

「恥ずかしがらなくたつて良いのにー」

おれに対して上から目線なのが、その大きな理由だらう。たまにはおれだつて言い返すけど、いつだつてリードを取るのは高内だ。車内にアナウンスが流れ、また静寂に戻る。

ふと高内は笑顔を崩すと、小さな声で呟いた。

「いつまでも、このままでいられたら良いのにね」

どうやら彼女は、おれとの距離を否定的に捉えていたわけじゃないらしい。くだらないことで言い争いをしたり、たまに意気投合したり、同じ高校を受験してクラスがまた同じになつたりと、腐れ縁としか言いようのない関係でつながっているおれたちは、何だから

だで互いのことを気に入っていた。

高内の言葉きわいはおれもよく分かつたから、いつものように頷く。

「そうだな」

中学の時も悪くはなかったが、今が一番心地良い。互いに別々の相手を想つていながら、昔と変わらずにひいて同じ道を帰れることが……。

去年のクリスマスを共に過ごした彼女は、とても可愛かった。小柄で細くて、明るくて。聖なる一月四日も、一人でカラオケに行って朝まではしゃいだ。けれども、年が明けた途端に別れを告げられた。オレって、振られることが多い。

「さみしーよー」

大学近くのファーストフードで、オレは嘆いた。

「じゃあ、そのマイコちゃんとやらに連絡したらどうだ？」

と、向かいの席で夜司^{やっかさ}が言う。

早くも冷め始めたハンバーガーを見下ろして、溜め息をついた。

「それが、風の噂で彼氏^{やつ}が出来たって……くつ」

がぶつとかじりついて、オレは食べることに集中する。まさかマイコちゃんがオレ以外の男に、否、マイコちゃんに彼氏の一人や二人……！

「そうか」

夜司がのんびりとコーヒーに口を付ける。オレはひたすらハンバーガーにかじりつく。

街はどこも赤と緑に彩られ、そこかしこにサンタクロースがいた。比例して、カップルも多くいる。

「俺、内定もらつたんだ」

「あ、そう」

考えれば考えるほど苛々が増していく。がつがつと食べ続けること数分、ハンバー^ガーが残り三分の一になつたところでオレは顔を上げた。

「え？」

夜司は首を傾げる。

「何だよ」

「……あ、いや、何でもない」

思わず俯いてしまつた。夜司が内定をもらつた？ そんなまさか。

「恋人にあげるプレゼントって、どういうのが良いかな」

と、夜司は言つた。数分の沈黙の間に、彼の頭は別のことを考え始めたらしい。さつきの話題を掘り返すのも何だか気が引けてしまつた。聞きたいのに、聞くに聞けない。

「欲しいものとか、聞いてないの？」

先ほどよりもゆっくり食べながら、オレは聞き返した。

「聞いたら、いらないくつて言われた」

「聞いた意味ねえな」

夜司は外をうかがうように振り返つて、またオレへ言つ。

「あいつ、ギター買つたんだって。でも俺、よく知らないからや」

「へえ、ギターねえ……」

オレも音楽はやつたことがない。付き合つてきた彼女にも、そんな子はいなかつた。

「じゃあ、無難にアクセサリーとかどいつよ？」

と、提案すると、夜司が即答した。

「俺、あいつの趣味知らない」

「……お前ら、付き合つて何ヶ月だっけ？」

「えつと……一ヶ月くらいだな」

「それでよくやつてこられたな」

と、オレは思わず溜め息をついた。仕方がないから、今年だけは協力してやろい。

「しゃーねえ。プレゼント選び、手伝つてやるよ」

家に帰ると誰もいなかつた。

まだ夜の七時なのに何故だらうと思つていたら、一階に書き置きが置かれていた。

『おじいちゃんのお葬式に行つてきます』

母さんの字だった。そういえば、一昨日辺りにまた伯母さんから電話が来ていたな。で、昨日は両親ともに慌ただしくしていて……

ああ、そうだ、オレは真咲と一緒に留守番することで決まったんだつた。

とりあえず自室へ行き、コートと鞄を放り投げた。あまりにも家中が寒いので、居間へ行って暖房を付ける。

「じいちゃん、死んじゃつたんだな。

改めて実感すると、心中にぽつかり穴の空いた気分になった。クリスマスを間近にしながら、天国に上ったじいちゃん。きっと、今頃はばあちゃんと再会して、昔みたいに笑っているに違いない。一緒に暮らすはずだったじいちゃんとばあちゃんの顔が浮かんで、らしくもなく泣きたくなつた。オレも、両親に付いていけば良かったかな？でも、真咲も家に残るつて言つてたから、同罪か。

ぱちっとテレビを付けて、台所へ行き冷蔵庫を開ける。

真咲の作ったと思われるおかずがいくつか残つていた。それらを取り出し、次に炊飯器の中をのぞく。

「……ない、か」

普段からオレは料理をしないし、真咲だつてたまにやる程度だ。仕方がないから、オレはご飯を炊くことにした。

米を洗つて水入れて、炊飯器にセットしてスイッチを入れて數十分。

適当な番組を見て退屈を紛らわせていたら、真咲が帰ってきた。

「珍しいわね」

と、オレの横を通り過ぎていく。確かにオレが真咲より先に帰つてきているのは珍しかつた。

真咲は部屋から出でくると、まず初めに風呂場へ向かつた。てきぱきと浴槽を掃除して、湯を張る。

そして真咲が風呂に入つたところで、ご飯が炊きあがつた。オレは構わずに一人、食事を始めた。

真咲は女にしては風呂の短い方だつた。二十分程度で上がつては、オレの隣へ腰を下ろす。

「明日は家にいるの？」

ちらつとそっちを見て、オレは答える。

「暇だからな」

「そう」

真咲は洗面所へ向かい、濡れた髪をドライヤーで乾かし始めた。どうせ食べるんだうつと思つたから、食卓はそのままにしてオレは席を立つた。自分の使つた食器だけ流しに片付けて、自室へ向かう。

さつさと布団を敷いて、はたと気がついた。明日つて、一三三日で祝日じゃね？ 何の予定もないけど。

寝間着に着替えて布団に寝そべる。

それから適当に携帯電話をいじつていたら、真咲がふいに扉を開けた。

「咲真に話があるの」

「は？」

オレは顔を向けなかつた。

「だから、明日は絶対に家にいてね」

と、真咲は扉を閉める。意味が分からぬ奴だ、と思つた。話があるなら、今話してくれればいいのに。

何も予定がないと気が抜ける。オレが目を覚ましたのは昼前のことだった。

「真咲？」

家が静かなので、いるはずの人を呼んだが返事がない。部屋にいるのかと思って扉を開けたが、やつぱりいなかつた。

「……家に居るつつたのに、意味分かんねえ」

話をするはずの本人が家を出るなんて何事だ。マジうぜえ。

とりあえず腹が減つたので何か食べようと冷蔵庫を漁つたが、ほとんど来ない。

マグカップを棚から取り出して、インスタントのスープを作つた。

それをのんびり飲んでも、姉は帰つてこなかつた。

後で絶対に腹が空くと分かっていたが、オレはまた部屋に戻った。外に出るのもかつたるいから、もう一度寝ようと思ったのだ。

そして布団に入ると、携帯電話が着信を告げた。びくっとして通話に出ると、真咲の声がした。

『咲真、起きてる?』

「おう、とっくに起きてるよ」

『じゃあ、これから帰るから。あなたに会わせたい人がいるのは?』

話つて、そういうことだったのか?

『とにかく、家でちゃんと待つてね』

と、真咲が一方的に通話を切る。

オレはどうしたらいいか悩んだが、布団を被つた。携帯電話を枕の下に沈めて、目を閉じる。

眠れなかつた。

「くそつ」

真咲の言葉が気になつて仕方がない。

オレは布団を出ると、さっさと私服に着替えた。携帯電話を手に部屋を出て、居間のテーブルにそれを置く。洗面所へ向かつて歯を磨き、冷たい水で顔を洗う。

どうして、よりもよつてこんな時に話があるだの、会わせたい人がいるなんて言うのだろう。彼氏か? 彼氏なのか?

ああ、苛々する。

居間へ戻つて暖房を付けると、オレは温風がよく当たる位置に座り込んだ。手を伸ばしてリモコンを掴み、テレビを付ける。

昼間のニュース番組では、今日の夕方から明日にかけて雨が降ると言つていた。地域によつてはホワイトクリスマスになるそうだ。

上等じやねえか、東京にも降つてしまえ。

いつものホテルに一晩泊まって、一人で初めての一十四日を迎えた。

「さすがに雪にはならないか」

と、窓の外を見つめた美音が言い、俺は着替えながら言葉を返す。

「ならなくていい」

「何で？ せっかくのクリスマスなのに」

こちらを振り返って文句する彼だったが、俺は構わなかつた。

「ほら、早く着替えろよ。今日は終業式だろ？」

美音はしぶしぶといった様子で服を着始めた。

サクマにいろいろアドバイスを受けて購入したプレゼントは、小さな文字の掘られた長方形のプレートのネックレスだった。シルバーのそれは美音の首にかけられていて、わずかに差してきた朝日を反射する。

「本当は今日、会つけはずだったのに」

と、美音がまた文句する。

「別に何日だって構わないだろ。昨日はずっと一緒にだつたんだし」

「うん、そうだけどさあ」

俺の首には、美音のそれをぴったり包み込む長方形が合つた。そこにも小さな文字が掘られており、いわゆるペアナックレスとなつていた。これなら身につけていてもおかしくないし、美音の場合は制服に隠せるから安心だ。

それから三十分もしないうちに、俺たちはホテルを出た。

外は薄くもやがかかっていて寒かった。一晩中降り続いた雨の名残がそこかしこに見られる。

あまり人気がなく、美音が俺の手を取つて言つ。

「夜司の手、冷たいね」

やつかさ

「…… どうか？」

ぎゅっと手を握りかえし、俺は前を向く。静寂が支配する繁華街には、一人の足音しか響いてこない。

また雨が降りそうだなど、ぼんやり思った。ホワイトクリスマスにはほど遠い寒さだろうが、いつかそんな景色の中を彼と歩いてみたい。

「今日はどこで食べる？」

と、美音が俺を見た。いつも早い時間にホテルを出るので、朝食を一人でとるもの恒例になっていた。

「せうだな、何か食べたいものは？」

「うーん……ファーストフードは飽きたから、それ以外が良いな」大通りが見えてくると、少しずつ人の気配が漂ってくる。美音がぱっと手を離し、ふと立ち止まる。

「どうした？」

振り返って尋ねると、美音はぎゅっと俺に抱きついてきた。

「ずっと一緒にいたらいいのに」

美音にとって、この日は世間と同じで特別なようだ。その頭を軽く撫で、周囲を気にしてからキスをする。

冷気が一人を取り巻く中で伝わる互いの温度。この道を先に進んだら現実に引き戻されてしまうから、互いに離れるのが惜しかった。

「行こう、美音」

「うん」

俺たちはまだ、大多数の中でもがくしか手段を持たなかつた。それでもまだ、幸せだと思えた。

街が明るさを増してくると、どこからか声がする。

「あ、やっぱり夜司だー」

見ると、知つてゐる顔がそこにいた。思わずびっくりして足を止めてしまつ。

「な、何でお前が」

言葉にならなかつた。すぐ隣には美音^{かれい}が居ることもあり、どうし

ていいか分からなかつたのだ。

「オレにも分かんねえ。けど、ラッキー」

弱々しい声でそう言つて、サクマがぼすと俺の肩にもたれてくる。美音が不機嫌そうに「誰?」と、尋ねてきて焦つた。

「大学の友人だ。えつと、ちょっと待て」

と、俺はサクマを引き離し、一人で立たせる。すると、彼の様子がやつぱりおかしいことに気がついた。

ふらふらしているし、皿もうつるだ。サクマの額に触ると、熱があるようだつた。

「あ、きもちいー」

と、咳くサクマを見て、俺は溜め息をついた。美音も状況は理解しているようだが、明らかに困つている。

「悪い、美音。先に帰つてくれないか?」

「えー」

「こいつ、熱があるみたいなんだ。家まで届けるには遠いから、とりあえず俺の家で休ませるよ」

「……分かった。夜司も、気をつけてね?」

と、美音は言つと、一人で駅へ向かつて歩き始めた。後で絶対に連絡しよう、なかなかに嫉妬深い彼氏だから気を悪くしているに違いない。

俺はまた溜め息をつべと、サクマの腕を自分の肩に回して、その身体を支えた。

「で?」

俺のベッドを占領したサクマへ問いかける。

「……んー、家出したっぽい

と、サクマは言つた。

時間をかけて家まで連れてきたら、母さんが大慌てでサクマを看病してくれた。昨夜の雨で濡れた服を脱がし、俺の服を着させてベッドに寝かせ、冷却ジェルシートを額に貼り付けた。

そうしたらすやすや寝息を立て始めやがって、おかげで俺が休めなくなつた。

夕樹が高校へ行くのを見送つて、朝子が教育テレビに夢中になつているのを眺めた。意外と教育テレビは侮れなかつた。

そうして時間を潰すこと数時間。

「家出? 何があつた?」

「んー……」

ぼうつと天井を眺めて、サクマがくしゃみをする。

「ああ、真咲が変なこと言つ出したんだ」

その名前には聞き覚えがあつたので、構わずに続きを促す。

「変なことつて?」

「就職できないあんたに朗報よ、ずっと話題と思つてたんだけど、遅くなつてごめんね」

思い出すよつに言葉を並べていくサクマ。

「あたしの彼氏の何とかさん、どこかの大学で何か専攻してて、起業する予定なの。それで、良ければ咲真も仲間に……」

そこまで喋つて、サクマは口を閉じた。

「いい話じゃないか」

「うん……でも、オレ、見下されたような気がして、苛々してた」「彼には双子の姉がいた。その姉にそんなことを言われて、サクマは苛ついてしまつたらしい。

「彼氏が帰つた後、すげー喧嘩になつて……オレ、あいつのこと殴つた」

「……そつか

「おかしいよな。オレ、暴力反対なのにさ」

と、サクマが自嘲する。俺には彼の事情は分からない。けれども、サクマが誰かに対して手を上げるなんて初めてだつた。

「それで、家出してきたのか?」

「……うん、どうやらしつみみたい」

馬鹿だな、こつづけ。

「そんなにストレス、溜まつたのか」

俺は椅子から腰を上げ、サクマを見下す。

「明日こなは帰つてくれよ」

そして部屋を出みうとすると、サクマが言った。

「え、行つちやうの？」

「はあ？」

寂しいなんて言つなよ、と呟おうとしたら、サクマがいつもみたいにへらつと笑う。

「いや、こせ、何でもない。ありがとな、夜司」と、

と、両手を開じる。

「……………」

いくら相手がサクマでも、普段通り適当に扱うのは良くないようだつた。後悔したが、もう遅い。

扉をがちゃりと開けて、俺はもつ一度振り返る。

「なあ、サクマ」

返事はなかつた。それどころか寝息が聞こえてくる。自分も馬鹿だと思いながら、俺は言った。

「ごめんな」

静かに外へ出て、そつと扉を閉める。先に就職が決まって、俺は少し浮かれていたようだ。

学校へ来的のも今日が最後。冬休みに入ったらお正月だ。

「んー……」

「どう?」

「んー……何といつか」

先ほどからずっと念つていいたいーしゃが、目を上げた。

「二次元と三次元はやっぱり違うよね」

それはどうやら、気を遣つて言つたことのようだ。あたしはーー
しゃからプリ帳を取り上げると、そこに點つたプリクラを見た。
「そりゃあ、当たり前でしょ?」

と、ページを閉じる。

「イケメンつていうのも、人によつて違つてくるもんね」

「そうよ、あたしたちが期待しすぎたんだわ」

そしてプリ帳を鞄の中へ仕舞つ。いーしゃは滝口の方をちらりと
見て、ぼそりと呟いた。

「別に不細工だとも思わないけど、まさかあんな人がタイプだつた
なんて」

独り言のつもりだろうか。

「いわゆる草食系じゃない。まさか彼、襲い受けなかしら
どうやら独り言ではないようだ。

「いーしゃ、変な想像はやめなさい」

「えーー」

あたしが突っ込みを入れると、腐女子かのじょが分かりやすく文句を言つ
てくる。

「これは職業病みたいなものだよ。こいつのこと、つのちゃんも腐
っちゃえばいいんじゃない?」

「遠慮します」

「面白いのにー、B-」

教室内がざわざわしているから良いものの、日常会話でそんな話はして欲しくないし、したくなかった。誰かに聞かれたらどうするつもりなのだろうか、この子は。

あたしが呆れて溜め息をつくと、予鈴のチャイムが鳴った。

寒い体育館で終業式を終え、教室へ戻った途端にみんなが暖房へ群がる。あたしといーしゃは少し離れたところで温風を受けていたが、すぐに担任の先生が来て席へ戻った。

冬休みの注意事項やその他の話を聞いて、通知表をまわってホールームは終了。あー、眠い。

でも、今日はもつと他にやることがあるのよ。

今年最後の号令で挨拶を終えると、あたしは気を取り直して鞄を手に取った。

「ユイ！ 滝口！」

彼らの名前を呼んで、大きく手を振る。いーしゃはのんびり帰り支度をしていた。

「約束、覚えてるわね？」

と、あたしが尋ねると、滝口がめんどくさそうな顔でこりひへ来る。

「カラオケに付き合わされるんだひ？」

「何、嫌なわけ？」

「いや、別に」

と、滝口が欠伸をする。いーしゃの用意が出来た頃にユイも合流した。

「じゃあ、行きましょう」

と、あたしはわくわくしながら先頭に立つて歩き出す。

昨日の雨が嘘のよう、すっかり空は晴れていた。それでも風は冷たく、あたしは「一〇」のボタンを締めた。

「まずはゲームセンターだよ」

「ゲーセン？ 何で？」

滝口の問いに答えたのはユイだつた。

「プリクラ、撮るんだよね」

「そつ、四人でちゃんと遊ぶのは初めてだもの」とすると、滝口がまた嫌そうな顔をして言つた。

「おれ、そんな話聞いてねえぞ」

「聞いてなくても撮るの。四人だと一人百円ずつで済むのよ?」

「分かりやすくて良いよね」

「と、いーしゃがフォローしてくれる。

「まさか、百円も出せないわけじゃないわよね?」

あたしが意地悪に尋ねると、滝口はちょっとムキになつた様子で言つた。

「そこまで貰いだじやねえよ」

学生に金欠は付きものだが、百円くらいは誰だつて持つている。それに、今日は以前からカラオケに行く約束をしていたのだから、持つていないう方がおかしい。

学校近くのゲームセンターへ向かつている最中、いーしゃが滝口へ話しかけるのが聞こえた。

「そういえば、りのちゃんに見せてもらつたよ」

「え?」

「彼氏さんのプリクラ」

滝口が何も言わずにいると、いーしゃがにつこり笑うのが分かつた。

「素敵な人だね。仲も良さそうだし」

「……う、うん」

思つてもないこと口に出来ちゃう彼女つて、すごい。ある意味、大人だと思う。

けれども、そんなことを彼女へ言つと、彼女はいつだつて「思つてないわけじゃないよ」と、言つ。いーしゃは、根が良い人なんだろ?。でも、たまに腹黒いからよく分からぬ。

「今度は直接会つてみたいな。それで、話が聞きたい」

「え、何聞くつもりだよ？」

「もううん、ネタのために」

「……冗談、だよな？」

「え、本気だよ？」

滝口の困っている様子が、見なくても分かる。一一しゃは本当に

おかしな子。

「やめなさい、一一しゃ。滝口をこじめていいのはあたしだけなんだから」

と、あたしは後ろを振り返る。

「そうなの？」

一一しゃは首を傾げると、すぐにあたしに向けてにっこり笑った。

「じゃあ、りのちゃんをいじめていいのはわたしだけね」

「そう言つ事じゃない。つていつか、自覚あつたの？」

「じゃあ、コイをいじめていいのはおれだけな」

と、滝口まで言い出しつゝ、コイが困惑した表情であたしたちを見る。

「え、じゃあ僕は？」

「……」

「……一番格下、言つてしまえば奴隸みたいなものだね」

「ひどい言い方だ。さすがは一一しゃ、恐るべし。

「ど、奴隸？ そんなの嫌だよ！」

と、コイが慌てると、滝口がひらめいた。

「分かった、お前は塚田をいじめりやいいんだよ」

「え？ えつと……」

コイはここにこじつたままの一一しゃをじっと見て、ぱっと視線を逸らした。

「塚田さんには勝てる気がしないよ……」

弱気な声がそう言つて、あたしは笑い声を漏らした。滝口もくすつと笑つて、一一しゃも楽しそうに笑い出す。

コイは微妙な表情をしていたけれど、まんざらでもないよつだ。

自然と出来上がった上下関係は、そう悪いものじゃなかつた。

年が明けてしまつたら、この四人で過ごせる時間も残り僅かになる。一年生になつたら、みんな一緒にクラスとは限らない。それなら、今日はめいっぱい楽しもう。コイの可愛い姿をすぐそばで見られるのも、きっと今だけだから。

「今日は思いつきり遊ぶわよ」

「りのちゃん、やる気いつぱいだね」

「おれはやる気ゼロだけどな」

「つていうか、ミオはそんなことしか言わないから、じめられんじゃない?」

「……じゃあ、やる気出す」

「じゃあって何よ? 無理矢理やる気出されても嬉しくないわ

「そうだそうだ!」

「はあ? じゃあ、どうすりやいいんだよ!」

「ミオ、落ち着いて落ち着いて」

今だけは、心許せる仲間と笑つていよいよ。

真咲の話は、確かにすゞしい話だった。就職先を探さないで済むし、真咲も彼氏に協力するというから、言つてしまえばオレたち姉弟が手を取り合つて起業するようなもの。それなのに、オレは冷静な判断を放棄していた。

自分が何いふて言葉を投げたのか、よく思い出せない。分かるのは、すごくひどいことを言つた、ということだけだ。そして、気づいたらあいつの頬を叩いていた。たぶん平手だから痛くないと思うんだけど、その後の、真咲の驚きで見開かれた目が忘れられない。それに自分でもびっくりして、部屋に逃げた。でも落ち着けなくて、外へ出たんだ。

ぐるぐると思考回路をいろんな考えが行ったり来たりして、眠れなかつた。夜司のお母さんのおかげで熱はだいぶ下がつたが、それは違う頭痛がオレを襲つ。

ああ、オレだって、なりたくてこんな状況になつたんじゃないよ……。

やつかさ

夜司に迷惑をかけていることは自分でもよく分かつっていた。「オレが家に帰りたくないって言つたら、どうする？」

と、おかゆを口へ運ぶ。

夜司はすぐ嫌そうな顔をしたが、すぐにやつぽを向いた。

「もう家には泊めないぞ」

「だよね」

答えは分かりきつていた。

彼の妹の朝子ちゃんが、テディベアや他のぬいぐるみに一生懸命話しかけている。来年小学校に上がるにしては、ちょっと幼いのかなと思った。

「駅まで送つてやるから、後は自分でどうにかしろ」

と、夜司は言つ。

「うん」

オレは姉弟の問題に夜司と藤堂家を巻き込んでいた。これ以上の迷惑はかけられない。

朝子ちゃんは遊ぶのに飽きたのか、うさぎのぬいぐるみを頭からテディベアに突っ込ませる。そして倒れたテディベアをはつと見て、ぎゅうと抱きしめる。

「実物は可愛いな」

と、オレが言つと、夜司もそちらに目を向けた。

「だろ?」

と、夜司が白慢げな笑みを浮かべる。年が離れていても、兄妹仲は良いらしい。羨ましいものだ。

テディベアと会話をしていた朝子ちゃんは、やがてオレたちの方へ来た。

「やつちゃん、くませんがたいいくつなの」

「はあ?」

退屈なのは自分だらうと心の中で突っ込みを入れたくなる。夜司も同じ気持ちだらうと思つたが、彼は妹を抱き上げると膝の上に座らせた。

「ほら、朝子。この人がどうしようもない馬鹿のサクマだ」何だかとてもひどい紹介の仕方だが、朝子ちゃんはオレをじっと見ると言つた。

「いけメン?」

語尾に疑問符付いてますけど。

「そうだ、イケメンだ。でも馬鹿なんだぞ」

「……あーちゃんはあさこつていいます」

と、名乗つてくる朝子ちゃん。可愛いけど、兄貴に言われたことは頭の中でどう処理しているのか気になる。

「サクマです」

と、オレはにっこり微笑んだ。すると朝子ちゃんは夜司の顔を見

た。

「しゃべった！」

……うん、オレ、人間だからね？　喋るに決まってるでしょ。

「一応人間だからな、馬鹿だけど」

と、夜司。こいつは妹に何をさせたいんだ。

朝子ちゃんは床へ降りると、放置していたぬいぐるみの中へ入っていき、小さなティベアを取り出して戻ってきた。

「さくまにこれあげるー」

と、オレへそれを差し出す。受け取ったオレは、ちょっと困惑いながらも彼女の頭を撫でてやつた。

「ありがとな、朝子ちゃん」

「いえいえー」

につこり笑つて嬉しそうにする朝子ちゃん。オレはぬいぐるみをテーブルの上に置いた。

「もうつちやつた」

「でも返せよ。それ、誕生日プレゼントなんだから」

「分かってるよ。朝子ちゃん、誕生日いつなの？」

朝子ちゃんはまたぬいぐるみの方へ行くと、ひかりをひかりと氣にしながら再び一人で遊び始める。

「十一月の一日前だ」

「へえ」

この可愛い幼女は十一月生まれらしい。でも、もうつたばかりのプレゼントをオレにくれるって何事だ。

「あの子、お持ち帰りしていい？」

と、オレが冗談で聞くと、夜司は即答した。

「駄目だ」

「相変わらずつれないねえ」

と、オレは笑う。本当にお持ち帰りしたところで、オレは彼女の面倒なんか見きれない。

でも、やっぱり可愛いなと思う。相手が一次元だったら、確實に

襲つてゐるんだけどなあ……いやいや、もちろん冗談です。うん、オレはそこまで変態じやない。

夕方の四時半、良い子はお家へ帰りましょ'うと町中にアナウンスが流れたところで、オレは藤堂家を出た。

「まっすぐ家に帰れよ」

と、隣を歩く夜司が言つ。

オレはまだ迷っていた。すっかり日が暮れて、街灯が眩しく見える。

「……でも、や」

「何?」

「何つーか、こんな激しい喧嘩つて久しぶりでさ。オレ、どうしたら良いかな」

夜司は前を向いていた。

「素直に謝れ。それしかないだろ」

「……正論はやめて欲しいな」

と、オレは苦笑する。分かりきつていることだから、そう言われるのが嫌だった。

「双子の事情は分からぬいが、兄弟は兄弟だと思ひづや。昔も今も、関係は変わらないと思う」

冷たい風が足元をすり抜けていく。

「そうかな」

「そうだよ」

と、夜司。何か確信もあるのか、実体験なのか。

「……オレ、昔は本当に仲良かつたんだ。あいつ人付き合いが苦手でさ、だからオレが代わりにいっぱい友だち作つて、いつも一緒に遊んでた」

その他のことがあいつが先に立つていたから、物心ついたときは自然と役割分担がされていた。

「小学校に上がつてからは、あいつに勉強教わつたりして……あの

頃は、僻むこともなかつたんだよな

むしろ、あいつにはいつも感謝してた。尊敬してた。あいつもオ

レの」と、そんな風に思つてくれていたと思つ。

「プライドが高くなつただけじゃないのか

的外れでもない指摘に、何だか心が落ち着くのを感じた。

「あー、そうかも」

性格が卑屈になつたとか、ネガティブになつたとかじゃなくて、オレはプライドが高くなつただけか。でもそれって、たぶん真咲もそうだ。

「お前が本当は悩んでたつてこと、俺は知ってるよ」

と、夜司は言つた。直接そんな話はしたことがないはずなのに、夜司は気づいていたらしい。やっぱり自分つて、自分では分からない。

「たぶん、俺と同じで不真面目な自分に嫌気が差してるんだろ?」

「嫌気つていうか……まあ、自業自得つて口では言つな」

道の先に明かりが増え、駅へ近づいているのが分かる。

「お前にもさ、きっと自分を偽つてる部分があると思うんだ。だから、それを外せばどうにかなる」

「外すつて、どうやって?」

「……さあな」

オレは思わず溜め息をついた。夜司は優しくけど、やっぱりひどい奴だ。嫌いじゃないけど。

「まあ、いいや。諦めて帰るわ」

それまで俯き加減だった顔を、しっかりと前へ向けた。

家の中は静かだつた。そういうえば今日はイヴだし、真咲もデーターに行つてゐるのかもしれない。

そんなことをぼーっと考えながら一階へ上がり、居間に明かりがついていた。

びくつとして、進むのを一瞬躊躇つ。

「……ただいま」

声をかけて中へ入ると、真咲が椅子に座つて居眠りをしていた。

「……あら、咲真？」

ゆづくと顔を上げ、じちらを見つめる真咲。オレはびしょりが悩んだあげく、真咲の向かいの席に腰を下ろした。

「ごめん、真咲」

と、テーブルに両手をついて頭を下げる。

真咲は何も言わなかつた。そつと顔を上げて見れば、姉が昔みたに笑う。

「ううん、謝るのはあたしの方。急に変な話持ちかけて、『ごめんね』何て言葉を返したらいいか分からなかつた。はつとして、オレは真咲の左頬に手を伸ばす。

「痛くなかったか？」

「別に。すぐ冷やしたから平氣よ」

と、真咲が呟つ。

オレは安心して、手を引っ込めた。一人で、こんな風に落ち着いて話をするのは数年ぶりだつた。

顔を合わせているのが妙にくすぐつたく、懐かしい。

真咲も似たようなことを考えているような気がして、視線を逸らした。双子だからだとは思わないけど、お互に複雑な感情を抱いていることが徐々に伝わってくる。

やがて真咲は呟つた。

「あたしね、あんたには良」とこりがいっぱいあるつて思つてる

「……おう」

「まず顔が良いでしょ」

顔かよ、と突っ込みたくなつたがやめた。

「次に、顔が広い」

「……」

「初対面の人とも、すぐに仲良くなれる」

「……」

「す」「ぐ営業向をだと思つの」

「営業かよ」

まあ、確かに自分でもそれは思つけれど。

「だから、協力してほしいの。あたしは大学院行くから、たまにしか顔出せないけど、きつと上手く行くわ」

「……うん」

真咲がにこにこして、オレも自然と笑みを浮かべる。これ以上、話をしても無駄だった。すでにオレたちは許し合っていたからだ。その表情のまま、真咲は言った。

「ところで咲真、どういった内容でやるか覚えてないでしょ？」

「うん、全然覚えてない。つつか、聞いてなかつた」

姉の表情が威圧的になる。オレはちょっと苦笑ぎみになる。

「もう、しょーがないんだから。今夜、みんなでパーティーするから来る？」

「え、行って良いの？」

「もちろんよ。彼もいるし、他にも協力してくれる仲間がみんな集まるから、良い機会でしょ」

「わーい、やつた！ タダ飯？」

「一人一千円」

「……ATM寄らせて」

「はいはい」

夜司の言つことは本当だつた。実感としては、昔から変わらないんじやなくて、昔に戻つた感じ。いや、昔よりも仲良くなつたかも。起業とか何とか、難しい話はまだよく分からなけれど、姉と一緒にならやれる気がした。

仲間がいるなら、きつと出来る。やれるところまで、やってみよう。……双子つていうのも、案外悪くないものだし。

突き刺すような寒風が流れてくる。せめて駅構内での待ち合わせにすれば良かつたかな、なんて思つていたらりのちゃんの声がした。

「いーしゃ、あけおめ！」

ちょっとどびっくりしたけど、わたしは彼女の方を振り向いて納得した。

「明けましておめでとー、りのちゃん」

りのちゃんは着物を着ていたのだ。それも何だか、すっごく素敵なやつ。髪型もそれっぽい花の飾りで留められていて可愛い。

「氣合い、入ってるね」

「え、そう？ お正月は親戚の家に集まるから、毎年こんな感じよ」と、りのちゃん。普段は男勝りでクールな彼女にも、意外な一面があつた。やはり毎年着ているからか、あまり違和感がないのが素晴らしい。

「ふうん。藤堂くんと一緒にじゃないんだね」

「ええ。だつて、お兄さんも来るって言つから」

そう、今日は滝口くんの彼氏さんと一緒に初詣へ行く約束になっていた。だから兄弟は兄弟で来るといつわけだ。

「そつか。楽しみだなあ」

と、わたしは冷えた両手をこすり合わせる。一応、手袋をしているのだけれど、正直、防寒になつていなかつた。

「あ、滝口くん！」

人波の中に彼の姿を見つけて手を振ると、滝口くんもこちらに気づいて寄ってきた。

「あけおめ、滝口」

「あけましておめでとー」

滝口くんはわたしたちの前で立ち止まり、りのちゃんを見た。

「おー、あけおめ」

正月だからといって、着物を着ている人はそんなに多くない。つまり、りのちゃんは目立っていた。

「歩きにくくなっ？」

「別に」

「……そつか」

と、口を開じる滝口くん。彼もりのちゃんの着物姿を見るのは初めてのようだ。

「滝口くん、髪切ったんだね」

わたしが指摘してあげると、滝口くんはそっぽを向いた。

「無理矢理、美容室に行かされたんだよ」

「あら、可哀相に

りのちゃんが興味なさそうに呟いて、わたしは言へ。

「でも、まだ長い方だよね」

「そこは頑張つて抵抗した。結果がこれ

と、滝口くん。前髪はすっきりと短くなつていたが、横はまだ耳が隠れている。ちょっと後ろをのぞいてみたら、襟足が出来ていた。その他は割と短いので、ワックスとかつけたらかっこよくなりそうだ。

そして藤堂君がやつて來たのは、待ち合わせの時刻をうよつと過ぎた頃だった。

「あら、お兄さんは？」

りのちゃんが挨拶を忘れて尋ねると、藤堂くんは申し訳なさつにする。

「それが、風邪引いちやつてて」

滝口くんが何か言いたそうに口を開けたが、すぐに携帯電話を取りだす。

「えー、すごく残念」

「写真でしか見たことがなかつたから、今日はとても楽しみにしていたのに。」

「僕が謝るにとないんだけれど、」めんね、塚田さん

と、藤堂くん。

まあ、とりあえずみんな集まつたから良いか。結局、今年の初めもいつもの四人で迎えることになるなんて……悲しいやう、嬉しいやう、ちょっと複雑ではあるけれど。

初詣へ向かう人達に紛れて歩き出すと、前方を行く藤堂くんがりのちゃんの手を取つた。ぎこちなく繋いで、ぎゅっと握る。

「藤堂君、背伸びたね」

と、わたしが咳くと、隣にいた滝口くんも前を見て呟つた。

「ああ、本当だ」

「前までは全然身長差なかつたのに」

靴の厚みを考えても、彼はりのちゃんより五センチは大きい。

「良いなあ、男の人は」

「……」

「わたしも、また成長期来ないかなあ？」

と、滝口くんを見上げる。

「別に今のままで良くな？ 女は小さい方がモテるんだろ？」

と、滝口くんは返した。言い方からして、女子に興味ないことが分かる。

「わたしなんかがモテると思つ？」

「え……うん」

どこか戸惑つた様子で肯定する滝口くん。わたしなんて地味だし、

小さいし、取り柄と言つたら身体に合わないカップくらいなのに。

「まだ一度も、告白されたことないよ？ したこともないけど」

「……そんなもんだる、普通」

「彼氏だつてまだ出来たことないし」

「おれだって、今のが初めてだよ」

滝口くんの言葉に、わたしはつい興味をそそられてしまつ。

「そういえば、どうやつてお兄さんとは知り合つたの？」

すると、彼は気まずそつに視線を逸らして、藤堂くんの背中を見つめた。

「……何ていうか、その、ちょっとな」

「言いたくないようだ。一人とも三つしか駅が離れてないから、街の中に出逢った可能性もある。否、もしかすると、一丁目で出逢つたとか？」

「別に言いたくないならいいよ。深く聞くつもりはないから」と、わたしはにっこり微笑んだ。機会があれば、深く聞かせてもらいつつもりだけね！」

流されるようにたどり着いた神社で、四人揃つてお参りをした。とりあえず百円投げとけば良いか、とわたしはそれを一枚投げて、

今年も素敵な一年になりますように、と願つた。

他の三人もそれぞれに祈りを捧げて、ようやく人波から解放される。

「じゃあ、僕たちはこれで

と、神社の外へ出たところで藤堂くんが言った。

「え？ どこか行っちゃうの？」

目を丸くして尋ねたら、りのちゃんがにこにこしながら言つた。

「だつてお正月よ？ 福袋買いに行かなくちゃ」

ちらつと滝口くんを見やると、目があつた。藤堂くんに起つらつるであつた苦労を、わたしも彼も心配していた。

「あ、そういうえば夜司^{やつかさ}のことだけだ」

と、滝口くんが藤堂くんを見た。

「見舞いとか、行つても平氣？」

藤堂くんは少し考へると、へんやつと笑つた。

「大丈夫だと思つよ？ 退屈してゐるだろ？ から、むしろ喜ばれるんじゃないかな」

「そつか……じゃあ、行こうかな」

そう言つて気遣うようにわたしを見る滝口くん。もう、身近にリア充が二組もいると嫌になるなあ。

「じゃあ、わたしは真つ直ぐ帰るよ。他にやることあるし」

と、につこりすると、三人が納得した。

「行きましょう、コイ。一人とも、またね」

「また学校で」

と、りのちゃんが藤堂くんを引っ張つてていく。わたしたちは反対の駅の方へ歩き出した。

「なあ、塚田」

「何？」

前方からは絶えず人が歩いてきており、初詣の魔力だなと思う。「素朴な疑問なんだけど……お前、好きな奴いないの？」

あらまあ、第三者が聞いたらドキドキしちゃいそうな台詞！ でも残念ながら、わたしたちの関係はそうじやないのです。

「いないよ。今はむしろ、妄想が恋人つて感じ？」

冗談めかして答えると、滝口くんが苦笑いをした。

「あ、そう……」

わたしは彼がわたしのことを心配しているんだって分かつていた。わたしだけが一人きりで、取り残されているんじやないかって。

「大丈夫だよ。わたしは、友達みんなと遊んでる方が楽しいから」

笑いかけると、滝口くんは「そうだな」と、納得した様子を見せてくれた。

藤堂家へ来るのは久しぶりだった。加えて、夜司^{やつかさ}の部屋に入るのは初めてだ。

扉をこんこんと叩いて、そつと開く。おばさんからは眠つてゐるかもしれない、と言っていたから氣を遣つた。

中へ入ると、夜司がベッドに入つてすーすーと寝息を立てていた。静かに扉を閉め、歩み寄る。

床に膝をついて、彼の顔をのぞき込む。とても無防備な寝顔だつた。今までにも何度か見たことはあつたけれど、今の方がいつにも増して可愛い。

頬にキスしてやううかと思つて手を伸ばすと、彼がじそつと寝返りを打つた。

……顔が見えない。

ちょっと考えて、おれは諦めた。夜司が目を覚ますのを待とう。後ろを向いて床に座り込み、ベッドに背をもたれる。夜司の部屋を改めて見回すと、すごく普通な感じがした。きっと小学校の時からずっとそこにある勉強机と椅子に、本棚は辞書などの参考書と漫画や文庫本が入り交じっている状態、その隣のクローゼットも少し古ぼけていて、床は掃除されたばかりという感じがする。

こんな部屋で彼は育ち、今も暮らしているのだと思うと、何だか不思議な心地がした。

夜司は無趣味だと自分で言つているだけに、部屋の中に趣味を感じさせる物はない。強いて言つなら、フォトアルバムらしきものが机の棚に並んでいることくらいか。

ふと気になつて、おれはベッドの下をのぞいて見た。彼のことだから、何かやましい物を隠してゐるに違いない。

そつと腕を伸ばしてみると、紙らしき手触りがした。ずずつと引張り出してみれば、おれも見たことのある雑誌が一冊。

「……」

いわゆる、ゲイ雑誌というものだ。値段が高いから買ったことはないが、いつか出会ったおじさんに見せてもらつたことがある。他にもいくつか似たような雑誌はあるらしく、それぞれ対象とする男性の傾向^{ジャンル}が違うらしい。つまり、これを教えてくれたおじさんも夜司も、この雑誌で取り上げられるような男性が好きということになる。ということは、おれはこの雑誌の傾向にカッコライズされるわけだ。

若年層、少年系。……おれ、まだ十六だしね。つつか、むしろシリタじやね？

一応成人向けの雑誌なので、中身が気にならないこともない。けれども、おれはそれを元あつた場所へ戻した。他にも探せばアダルトなものがいっぱい出てくるんだろうけど、所有者が風邪引いて寝込んでいるのでやめておこうと思つたのだ。

……夜司も、やっぱり男だなあ。

おれが再びベッドに背を向けると、夜司がもぞもぞと動いた。顔を上げて振り返ると、彼と目が合つ。

「……？」

寝ぼけているのか、じつとおれを見る夜司。体勢を変えておれは膝で立つと、じつにこり笑つ。

「見舞いに来た。具合はどう？」

夜司は両をぱちくりさせ、まつとした。

「ちょ、何でお前が」「と、咳をする。

「だから見舞いだつて。コイから聞いてさ」

「……た、ただの風邪だ。わざわざ見舞いなんて」

夜司は戸惑つているのか、寝返りを打つておれに背を向けた。

「えー、嬉しくないの？ 新年早々、来てやつたのに……あ、そうだ。あけおめ」

と、言い忘れていたことを思い出してもうすと、夜司は何も言

つてくれなかつた。

やつぱり突然の訪問は良くなかつたかと思つが、すぐに帰るのも何だか嫌だ。

「つづーか、どうやって家入つた

と、夜司が尋ね、おれはすんなり答えた。

「コイがまずおばさんに連絡してくれて、おれが夜司くんにはいつも世話になつてゐ、つておばさんに言つたら、なんとなく察してくれた」

「……嘘だろ」

「本当だよ。そんなに深く考えてくれてないみたいでや」

夜司が溜め息をついた。これでおれは晴れて藤堂家に、長男の彼氏として認められたわけだ。

「あと、朝子ちゃんは相変わらずおれに、ぎゅーっとしてくれたよ」

「……そうか」

呆れているのか、ちつともこぢりに向いてくれない。おれはそんな彼に飽きて、床にあぐらをかいだ。腕を伸ばして、夜司の髪に触れる。

「熱とかあるの？」

「ああ……ちよつとだけな」

「せつかくの初詣、残念だつたね」

「……仕方ないだろ。サクマに移されたんだ」

ピンと来て、おれは手を上げる。

「それって、この前のふらふらしてた友達？」

「そうだ。正確には、あいつが朝子に移して、それが俺に移つたらしい」

「なるほど、もう十日くらい前のことだもんね」

あの人何があったかは聞いてないし、知りたいとも思わない。もつ過ぎたことだから、掘り返すつもりもない。

「災難だつたね、夜司」

と、おれは腕を引っ込める。弱つてゐる彼を見るのは初めてだつ

たから、本当はもっと触れたかった。キスだつてしたいし、ハグだつてしたい。

それは相手も同じだったようで、夜司はまた寝返りを打つた。おれの方に手を伸ばして、そつと唇に触れてくる。

「お前に風邪移したくないから、帰れよ

と、優しく言う夜司。

おれはその手を取つて、指を絡ませた。

「ここにいちゃダメ？」

「駄目だ」

「……そっか」

夜司の気持ちちは嬉しいけど、おれの気持ちまで汲んでくれる」とはないらしい。

仕方がない。帰つて、ギターの練習でもじみつ。まだ楽譜もきちゃんと読めてないから、頑張らなきや。

そこまで考えて、おれは夜司の手を放した。

「じゃあ、帰るね」

「ああ

「風邪、早く治してよ」

と、立ち上がる。夜司はおれの方をじっと見ていた。

「美音」

歩き出そうとしたら、袖を引っ張られた。

おれが振り返ると、夜司は言つ。

「じめんな。気をつけ帰れよ」

「……うん」

頷いて、歩き出す。扉に手をかけてそつと開くと、おれはまた彼を振り返つた。

「またね、夜司」

「ああ」

布団に潜りなおす夜司。静かに外に出て、ゆっくり扉を閉める。

今年も、ずっと夜司のそばにいられますよつよ。あと、ギター

が上手くなつまゐつて。

ユイの背が伸びたことには気づいていた。彼が大人になろうとしていることも、分かつてた。

「福袋って、けつこうするんだね」

と、ユイが言つて、あたしは口を開く。

「でも、今日買ったのは安い方よ。ブランドだと一万や二万が普通だもの」

「そうなんだ」

お年玉があるからといふつか福袋を狙つていたのだが、結局手に入つたのは一つだけだった。

「ただでさえお得だから、みんな買っちゃうのよね」と、呟いてみる。外れることもあるけれど、それはそれで楽しいから良いのだ。

「そつか……僕も、買つてみたいなあ」

「買つたことないの？」

「うん。お年玉つて、すぐに使つともつたいないって思うからユイらしいな、と思つ。消極的というよりは、慎重なタイプ。

「面白いわよ、福袋」

「うん、そうだろうね」

あたしのワガママに付き合つてくれる優しい人。

中身は変わらないはずなのに、彼が以前と比べて大人になつていくことを寂しく思う。もちろん、ユイのことは大好きだ。「ユイの好きそうな服が入つてたら、あげようか？」
「え、別にそんなことしなくていいよ。気遣わないで

「そう？」

「うん、その気持ちだけで十分つていいか」

「……そう」

「うん」

あたしも大人になつていくんだけれど実感はある。身長も体重も、毎年変わっていく。

だけど今が一番だから、これ以上なんて必要ない。このまま、ずっと今のままでいたい。

「ねえ、コイ」

「何?」

大人になんか、なりたくない。

「あたしのこと、好き?」

「え?」

ぱつと顔を赤くして、巨惑のコイ。

「も、もちろんだよ。きょ、今日だつてすいじへ、りのせん、すいじへ

可愛いし」

恥ずかしそうに俯いて、視線を逸らす。

その姿が可愛くて、ああ、好きだなつて思える。

「あたしもよ、コイ」

ほんの少し背伸びをして、彼の白い頬に口づける。

「今年も、一緒にいようね」

まるで自分自身に言い聞かせるように、あたしはやつぱつして。

「つ、うん……っ」

嬉しそうに頬を赤らめる彼を、ただ愛しいと思つ。ずつとはきっと無理。

「りのせん?」

振り返つても、そこにあるたしはいない。

「ううん、何でもない」

だからまた前を向いて、出来るだけ後悔しないようにして、隣にいる彼を確かめる。

「じゃあ、帰りましょ」

荷物を持ち直して、互いにぎゅっと手を繋ぐ。

すぐに消えてしまつ今という瞬間に想いを馳せることも叶わぬまま、気づくと次の一步を踏み出している。

「……三学期も、楽しくしたいわね」

「うん、そうだね」

あまりにも儂い今に、あたしはまだ向き合えない。無駄にするしか、術がない。

どんなに想いを伝えても、次の瞬間には消えてしまう。どうせなら、時間が止まればいいのに。

ずっとずっと、この新しい年の最初の一日が、延々と繰り返されればいいのに。

そうしたらあたしは 。

「ずっと、コイのそばに」

いられる、のにね。

呴いた言葉は彼に届かず風に溶けて、気づいた時には忘れてしまう。ぎゅっと締め付けるような嫌な胸騒ぎは、すぐにあたしの足で踏みつけてコンクリートに染み込む。

そしてあたしはまた、コイの笑顔を見たくて笑うんだ。人生は思い通りにならないって事、気づかない振りして。

「今年もよろしくね、コイ」

風邪がようやく治ってきた頃、そいつは何の連絡もなしにやって来た。

「あけましておめでとうー。」

新年早々うるさいサクマの顔を見て、思わず嫌な顔になる。

「今年もよろしくー。ってゆーか、どうした?」

と、俺を見て首を傾げるサクマ。お前のせいでせつかくの初詣がぬしになつたのだと言つたが、じらえむ。

「何の用だ」

聞き返すと、サクマが手にしていたビニール袋を持ち上げた。

「こ前の前のお礼をしに來たんだ」

いやー、本当に世話になつたからなあ……と、サクマ。

「上がれ」

言つてから、俺はくしゃみを一つする。玄関で立ち話をしたら風邪がぶり返しそうだし、どうせすぐに帰るつもりもないんだろう。

「わーい。お邪魔しまーす」

と、予想通りに遠慮無く入つてくるサクマ。

俺は先に居間へ向かって、母さんへ言つた。

「家にあげたけど良い? まあ、すぐには帰らせるナゾ

後ろでサクマが「ひどー」と、声を上げる。

「あらあら、別に構わないけど……あ、お汁粉食べる?」

と、台所へ向かっていく母さん。

「あ、すみません。ありがとうございますー。」

へりへらしているサクマを無視して、暖房のよく当たるソファに腰を下ろす。すると、テレビを見ていた妹が振り返つた。

じつと俺の隣に座つたサクマを見て、言つ。

「さくまだー。」

サクマはひつひつ笑うと、ビニール袋から包みを取り出して、妹

のそばへ寄つた。

「はい、これ。お年玉」

「！？」

「わーい、おとしだまあ！」

思わずびっくりして、俺はすぐにサクマへ声をかけた。

「何してんだ、お前。朝子は受け取っちゃ駄目だぞ」

妹が伸ばしかけた手を引っ込めて、俺とサクマを交互に見やる。

「別に怪しいものじゃねえよ」

と、サクマは言つと、朝子の頭を撫でた。

「この前はすゞぐ世話になつたから、そのお返しをしたいだけや」

「……ままだまでもらえるものはもらつておけつていつてた！」

と、妹は言つと、サクマからのお年玉を受け取つてしまつ。

「あ、朝子、それはちょっと違つだー。」

と、慌てて妹に近づくと、たたたつと逃げられてしまった。サクマは口リコンだから、朝子を物で釣ろうとしている気がしてならないといつうの。

包みを開けた妹が目を輝かせる。

「わーい！ うわわわわん！」

出できたのは歓喜じこつわざのぬいぐるみだつた。干支を意識してこるのか、その首には紅白のリボンと鈴が付いている。

「ま、ま、ま、まくまからもらつたーー！」

と、台所にいる母さん元へ行く。

俺は溜め息をついてソファに戻つた。

「喜んでもらえたみたいで良かつた」

ここにこじつた顔でサクマは言つと、また俺の隣に腰を下ろした。

「でー？」

「夜間に何もあげないよ

「そうこうじやねえ」

妹へあれをあげるために来たのか、と聞いているのと、サクマは相変わらず不真面目に笑う。

「安心してお兄さん。オレ、あと十年待つから」「んなわけないだろ。両親は許しても俺が許さねえ！」

「真面目に答える。何をしに来た」

俺が不機嫌になるのを知つてか、サクマは口を閉じた。タイミング良く、母さんが俺とサクマの分のお汁粉を持ってきて、目の前の机に置く。熱いから気をつけてね、と言い残し、今度は妹の相手にとりかかる母さん。

「えっとね、とりあえず真咲と和解した」

「……そうか」

「で、運命の人と出逢っちゃった」

「は？」

横を見ると、サクマは心なし真面目な顔をしていた。

「真咲の彼氏が双子でさ、その妹さんが見た目は地味だけどむちやくちゃ良い子で、すごく良い感じなんだ」

と、サクマは言つ。

「でさ、彼女も兄貴と一緒に会社やる仲間なんだ。これってすぐくね？」

「……そうだな、良かつたじゃないか」

俺がそう言つてやると、サクマが嬉しそうに頷く。

「ああ、だからオレ、超頑張ろうと思つて」

たつた一週間の間に、サクマはずいぶんと前向きになつていた。就活が上手く行かないとうだうだ文句していた頃とは大違ひだ。

「だから、夜司も頑張れよ。仕事が辛いからつて、すぐに辞めたら怒るからな」と、サクマは言つた。

「安心しろ、一年は絶対に続ける」

そう言い返せば、サクマがまた笑つて。

「たつた一年だけかよー。定年まで続けるつづーの」

友人がすっかり元気になつたことを実感して、俺も笑つた。

「お前こそ、女遊びばかりして仕事をないがしろにするなよ

「まさか！ オレはもう、彼女一筋だから大丈夫。むしろ社内恋愛」

「じゃあ、もう妹には近づくな」

「えー、朝子ちゃんはオレの癒しなのにー」

何が癒しだ。彼の頭を軽く小突いて、俺は溜め息をついた。

「まあ、とにかく良かつたな」

「……うん、良かつた」

後は大学を卒業するだけだ。心配事はもう、ひとつもない。

一月が終わりに近づいた頃、塚田さんから唐突な質問をされた。
「藤堂くんって、どこまで男の娘なの？」

「え？」

思わず目を丸くしたら、塚田さんは説明をしてくれた。

「だから、女装するのが好きなだけか、女の子のやることが好きだつたりするのか、中身も乙女なのか」

教室移動の途中だった。誰かに聞かれてやしないかと冷や冷やしだが、塚田さんはにつこつしたまま答えを待っている。

「えっと……僕は、少なくとも性同一性障害じゃないから、中身は違うね」

と、僕は声を潜めた。

「だよね。りのちゃんラブだし」

と、塚田さん。そう言ひこともあんまり校内では言ひて欲しくないのだけれど……。

「何て言ひかな、僕は見た目だけそなりたいっていうか……可愛い物が好きなだけで」

「お菓子作ったりはしないの？　あみもの編んだり？」

「え？」

お菓子にあみもの？　彼女の質問の意図が分からなくて、僕は戸惑う。

すると、塚田さんが僕の耳に口を寄せた。

「バレンタイン」

「……ああ」

ピンと来た。ついであと一週間程度でバレンタインマークがやってくる。

「最近は逆チョコなんてのもあるよ」と、塚田さん。

「しないの？」

「……うーん、どうだらう。ちょっと分からないや」

僕はそう言つて苦笑いを返した。

確かにバレンタインデーといえば、女の子たちが友達同士でお菓子をあげる「友チョコ」だつたり、仲の良い男子にあげる「義理チョコ」だつたり、本命の人には「本命チョコ」をあげたりする。それのどこが楽しいのか、僕は正直理解ができない。中学生になつてからは大して仲良くもない女子からよく「義理チョコ」をもらつたけれど、本命は一度だつてない。……でも、今年は期待するつきやないよね。

「……でも、ホワイトデーに返すのつてめんどくさだよね」と、僕は美音へ呟く。

「あー、確かに。つつつとも、おれ返したこと無いけど」「え、何で？」

僕が視線を向けると、美音は笑つた。

「だつて忘れちゃうんだもん」

確かに、義理チョコを誰から受け取つたか一ヶ月先までちゃんと覚えている事つてない。でも僕は、出来るだけ返すようことしてきましたけれど……あれって、無視しても良かつたのか。

「ほら、さつさと貰つてこいよ」

「あ、うん」

美音に背を押された僕は購買の列に並んだ。

朝子が生まれる前は母さんからチョコをもらつていたけれど、去年から朝子もチョコをくれるよつになつた。やっぱり女の子だから、そういうた流行には乗りたがるのだろう。

お風呂上がり、暖房で温まつた居間でまつたりしていたら、テレビにお菓子メーカーのコマーシャルが流れた。『今年は逆チョコ』とか言つて、イケメン俳優が宣伝をしている。

「逆チョコ、かあ……」

「彼女に渡すのか？」「

「独り言のつもりで呟いたら、背後から声をかけられてびくつとした。

「や、やつちゃん……別に、そういうわけじゃ……ない、よ」と、視線をさまよわせる僕。

やつちゃんはソファに腰を下ろすと、手にした缶ビールを開けて「ぐつと飲んだ。

「やつちゃんって、ビール飲めるんだっけ？」

ふと不思議に思つて尋ねると、彼は言つ。

「好きじゃないけどな」

「じゃあ、何で飲んでるの？」

「何となく」

よく分からぬ。就職が決まってすっかり落ち着いたものだと思っていたが、何かあつたのだろうか。

僕は立ち上がり、やつちゃんの隣に座つた。

「チョコって、やつぱり手作りかな？」

「知らん」

「義理チョコも用意したほうがいいのかな？」

「知らん。女子に聞け」

やつちゃんが冷たい。やつぱり何かあつたんじゃないかな。

「やつちゃんは、あげないの？」

「は？」

と、僕に目を向けるやつちゃん。

「美音に、バレンタインチョコ」

「……あげてどうするんだよ」

と、興味なさそうに言つて、やつちゃんはまたビールを流し込む。僕が反論できず、にいると、やつちゃんは唐突に言い始めた。

「そもそもバレンタインっていうのはな、結婚を禁止された兵士を秘密に結婚させていたバレンタインっていう司教が、処刑された日なんだぞ」

どこかで聞いたことがあったので、別に何とも思わない。

「キリスト教徒でもないのに、何かする方がおかしいんだよ。」

「やつちやん、何かやな事あつた？」

「は？」

「あ、あの、だから……苛々してゐるみたいだから、何かあつたのかなつて」

僕が思わず肩をすくめると、やつちやんはビールをまたじっくりと飲んで言った。

「……別に何でもねえよ」

と、ビールを一気に飲み干して居間から出て行ってしまう。美音のことなら、ギターに触れているのが楽しくて仕方ないらしいよ？ と、僕は思ったが、まさかやつちやんがそんなことで嫉妬するような人だと思いたくないのでやめた。

ようやく練習曲を覚えてきたと美音は言っていたし、もつと完璧に弾けるようになるまで頑張って練習するとも言っていた。それから、やつちやんに一番に聞かせる、って。

「……あ、でも、そのせいでメールが途切れがちになつてゐるって、申し訳なさそうにしてたなあ……だからやつちやん、あんなに荒れて……うん、納得。」

塙田さんが早い時間から教室にこることは知つてたから、僕も久しぶりに早く来てみた。

「おはよう、塙田さん」

「あ、おはよう」

室内には彼女しかいなかつた。部活の朝練に行つてゐるのか、荷物だけはいくつかあるけれど。

「ちよつと聞きたい」とあるんだナビ、良一？

「うん、どうぞ」

落書き帳りしきノートをぱたんと閉じて、塙田さんが僕をじっと見る。

「えつと……チョコつてやつぱり、手作り？　あと、義理チョコも作るべき？」

塚田さんはにっこり笑った。

「もつちろん」

「あ、なんだ……」

僕は自分の席に荷物とコートを置いて、また塚田さんへ声をかけた。

「チョコつてどうやって作るの？」

「市販の奴買つてきて型に入れて固めればオーケー。別にマフィンとかクッキーでも良いよ」

「僕に、出来るかな？」

「大丈夫、りのちゃん意外と聲音痴だから」

と、自信たっぷりに親指を立てる塚田さん。

「……そ、そつか」

りのさんが聞いたら怒りそうだ。僕は苦笑いをしながら、椅子に腰を下ろした。

「手作りのお菓子セットつていろんなとこに売つてるから、そういうのを見て決めるのが良いかもね」

と、塚田さんが補足をすると、廊下から人の声がした。間もなくしてクラスメイト数人が教室へ入つてくる。

僕は塚田さんに「ありがとう」と、言つたけれど、あまりにも小さくて届かなかつたかもしがれない。

未だに人見知りしてしまう自分が嫌だ。りのさんとカップルになれても、僕は全然成長できていない。

バレンタインデーといえば、母さんと姉ちゃんに義理のチョコメントをもらひのがいつものことだった。小学三年生の時、クラスの女子に本命らしきチョコレートをもらつたこともあるけれど、反応に困ったのでお返しはしなかった。母さんはいつも父さんに本命チョコをあげるし、姉ちゃんはむしろ友チョコの余りをおれにくれる感じだったから、本命をもらつたのはその一度だけだ。

夕樹は塚田にそそのかされて「逆チョコ」をあげるとか言つてゐるけど、何かそれって流行に乗せられている気がする。

そんな風におれがバレンタインデーを馬鹿にしたら、塚田は言った。

「じゃあ、滝口くんにだけチョコ用意しないね」

最初は呆れたけれど、おれにだけ、という部分をその後何度も繰り返されて泣きそうになつた。どぎめは「クラスのみんなにはあげるつもりでいたけど、滝口くんの分はいらないよね」と、いつか見た悪魔の笑みだ。

仕方がないから、おれも「逆チョコ」をやらされるはめになつたのだが……これって、夜司^{やつかさ}にもあげるべきなのか？

今朝コンビニで買ったチョコレートを取り出して机の上へ置く。「バレンタイン」

と、おれが言つやいなや、塚田がその箱に手を伸ばす。

「わー、ありがとー！」

そして昼食前だとこいつのに箱をびりりと開け、あつといつ間にチョコを口へ入れる塚田。こいつ、ただ食べたかつただけじゃ……？

「りのちゃんと藤堂くんもびりびぞ」

と、塚田はおれのチョコを勝手に一人に分ける。やこはかとなく

むかつぐ。

気にしないようにして昼食のパンを食べ始めたら、塙田がお菓子を取り出した。

「はいこれ、義理だけど」

と、おれたち一人一人にクッキーの入った小袋を渡す塙田。普通のクッキーのようだが、おれはそれをよく見てびっくりした。

「滝口くんにはギターの形にしたかったんだけど、上手く出来なくてごめんね」

と、塙田が謝る。おれの袋にだけ、丸や四角ではない不格好な形のクッキーが入っていた。

「……ありがとう」

ちょっと嬉しくなつてお礼を言つと、塙田が笑う。

「いえいえ、毒とか入つてないから安心して食べてね」

そう言わると怪しくなるが、塙田はただの変人だから大丈夫だろ？

「じゃあ、あたしからは普通のチョコを」

と、高内がアルミカップにチョコを入れて固めただけの素つ気ないものをくれた。

「で、ユイには生チョコよ」

そう言つて、きらきらなりボンのかけられた箱を取り出す高内。夕樹はどきまきしながらそれを受け取ると、すぐに自分も用意してきた物を取り出した。

「あ、えっと、チョコチップクッキー作つてみたんだ、けど……」

と、綺麗にラッピングした袋を高内へ渡し、残りの適当な一つをおれと塙田に渡す。

「ありがとう、ユイ！」

と、高内がにっこり笑うと、夕樹もつられてにっこり笑う。

……一番努力していないの、おれだけだな。夕樹が本当に手作りするとは思わなかつたし、義理でも何かをもらえるつて意外と嬉しい。「滝口くんも来年は手作りね」

「え？」

考えを見透かされた気になつて田を丸くすると、塚田が意地悪く笑う。

「自分も手作りすれば良かつた、つて後悔してたんでしょう？」

「……してねえし！」

「ほんと図星だった。やつぱり塚田つて怖い。

「あら、ところで滝口は本命どうするの？」

と、話を聞いていたらしに高内が割つて入つてくる。

「な、どうするも何も、やらねえよ」

おれがとつさに答えると、夕樹が「えつ」と、田を丸くする。

「ミオ、あげないの？」

「……え？」

無意識に苦笑いが浮かぶ。まさか……あいつまでそんな流行に乗せられているのか？

「あ、いや、別に何でもないよ。それはそれで、良いと思つ」

と、慌てて視線を逸らす夕樹。ああもう、これじゃあ渡さないわけにいかねえじゃんかよ！

帰り道にコンビニやスーパーに寄つてみたが、残念ながらバレンタインチョコはどこも売り切れ状態だった。その当日なのだから、当然だ。……やっぱり、事前に買っておけばよかつた。仕方なく家に帰つたら、母さんが化粧をしているといふがだった。

「おかえりなさい」

と、おれの方を見ずに言つ。

「ただいま。どこが出かけるの？」

尋ねてみると、母さんは嬉しそうに言つた。

「今日は克美さんと外食するの」

とキッとした。

「おかげは買つておいたから、勝手に食べていいよ」

「……そう」

自室へ向かおひつとして背を向けたら、母さんは言つた。

「ついでにドライブしていくから、帰りは遅くなるわ。あんたは先に寝てて良いからね」

「うん、分かった」

母さんと父さんが一人の時間の大切にするのは昔から変わらない。けれども、姉ちゃんが寮に入つてから家族の形は確実に変化している。

部屋に入つて、おれは溜め息をついた。

鞄を床に放り投げて、上着を脱ぐ。ハンガーにかけて、制服から私服に着替える。

それから携帯電話を手にベッドへ寝転ぶと、鞄の中にみんなからもらつたお菓子があることを思い出した。でも、食べる気がしない。ばたばたと支度を済ませた母さんが、何も言わず家を出て行く。がちゃりと鍵を閉める音が冷たい。

嫌なことは考えない方が良い。

重たい上半身を起こしたら、タイミング良く携帯電話が鳴った。
夜司だ。

はつとしてすぐに通話に出る。

『今日、会えるか?』

すぐに投げかけられた問いに、おれは何故か迷つた。迷つ必要な
んてないはずなのに、答えを返せない。

『あ、それとも忙しいか? 練習の邪魔したない、ごめんな
と、電話の向こうで夜司が優しく言つ。

「……うん、大丈夫。いじよ、会おう

おれがようやくそう告げると、夜司が安心したように息をつくの
が分かつた。

『良かつた。今は家にいるのか?』

「うん」

『そつか。じゃあ……六時に、いつものことひで

「おれん家、来ない?」

『え?』

自分でも自分の言った意味がよく分からなかつた。何で、そんなことを言えたんだろう。一人でいるのが寂しいから？

「あの、今日、親が帰ってくるの、遅いからさ」

すると夜司は『分かつた、行くよ』と、言つてくれた。俺は安心したけれど、すぐに言葉を返せない。

『じゃあ、五時半に駅で待ち合わせな

ど、時間まで早めてくれる夜司。彼には、おれの気持ちが分かるのだろうか。それとも、おれの声が震えていたのだろうか？

「うん、分かつた

『ちゃんと待つてろよ、美音』

「うん」

夜司は『また後で』と言つて、電話を切る。携帯電話を耳から離して、おれはまた溜め息をついた。

別に流行に乗ったわけじゃない。サクマから「バレンタインは普段伝えられない気持ちを贈り物を通して伝えるイベント」だと聞かされて、ちょっとと考え直しただけだ。

「お邪魔します」

美音の家に入るのは初めてだった。中には誰もいないと分かつていても、気を遣わずにいられない。

「親つて、何時頃帰ってくるの？」

俺がそう質問すると、美音は言つた。

「早くても十一時過ぎるから、あと五時間は余裕」

「ふうん、そうか」

どうしていいのか、親は共働きなのか、色々聞きたいことはあつたけど我慢した。

美音の部屋は電気が点けっぱなしになっていた。その中へ入って、俺はちよつとびっくりする。

「シンプルだな、す、ぐく」

「まあね」

と、美音は言つと、ベッドに腰を下ろす。

室内を見渡しつつ床に座ると、机の隣にギターが置かれているのが目に入る。紺に近い青色のエレキギターだ。

俺の視線に気づいたのか、美音は嬉しそうな声で言つ。

「かつこいいでしょ、おれのギター」

ベッドを降りて、運命を感じたそれへ歩み寄る。

「予算はちょっとオーバーしちゃつたけど、むちゅくちゅく氣に入ってるんだ」

「そこのの」

「うん」

美音がしゃがみこんでギターに手を触れる。俺は楽器の事なんて

全然分からなければ、そのギターは美音の言つよつにとても大事にされている気がした。

「……まだ自信ないから、今度スタジオ行つた時に聞かせるよ」と、俺を振り向いて笑う。ギターの横にはケーブルや機材が置かれていた。ふと目に付いたヘッドホンはまだ綺麗だ。

「全部でいくら使つた?」

「うーん、十万くらいかな。チューナーとかも買つたから」と、美音が俺の隣に座る。

その十万は、全て男に抱かれて得たものなんだろう。束縛するつもりはなくとも、何だか嫌な気分だ。

「あ、そうだ」

ふと思いついた風を装つて、俺は鞄から小さな箱を取り出した。

「これ、やるよ」

と、美音へ差し出す。すると彼は呆れたように苦笑いをして、受け取る。

「おれ、用意してないんだけど……」「

「別にいらねえよ。気にするな」

と、俺は言つて、美音の頭を軽く撫でる。

「……つつーか、高そう」

美音はその箱を隅々まで観察してから開けて、また言つ。

「うわ、やっぱり高そう!」

俺は思わず笑つた。値段なんて込めた気持ちに比べりや大したことはないのに、美音は目をきらきらと輝かせて俺を見る。

「いくらしたの、これ

「一千一百円、だな」

と、俺がばらすと、美音が中身を数えて言つ。

「いち、に、さん、し……五つだから、一つ一千一百四十円?」

「大学に行く途中にあるデパートで売つてたんだ」

と、思わず嘘をつく俺。途中の道にデパートなんてなく、わざわざ遠くまで足を向けて買ったのだ。それも「逆チョコ特集」なる特

設「一ナーがあると聞いて。

「……ありがとう、夜司！」

と、美音は箱を丁寧に閉じてテーブルに置くと、俺に抱きついてきた。

「おれ、来月までにギター、すげーがんばる。んで、ホワイトテーまでに披露できるようにするから」

ぎゅっと抱きしめてくる美音。

「おう、分かった」

と、俺も抱きしめ返す。勢いでキスできるかと思ったが、美音は俺の肩に顔を埋めたまま動かなかつた。

様子がおかしいと思った俺は、声をかけてみる。

「美音？」

彼は顔を上げなかつた。

「……愛してる、夜司」

泣いているのかと思ったが、そうでもないようだ。俺は安心して、美音へ言い返した。

「ああ、俺もだ」

猫みたいに気まぐれで弱いお前を、誰よりも愛してる。

春、桜、進級、クラス替え。

「えー、あたし一組だって。知り合いいいるかなあ？」

ざわめく高校生、やわらかな陽光、ふとよぎる不安。

「あ、僕四組だ。離れちゃったね、りのさん」

「そうね。で、いーしゃは？」

「わたし？ わたしはえつと……」

人の頭の隙間からクラスを確認したわたしは、後ろにいるりのちゃんへ言う。

「また六組みたい」

「おれもな」

と、言う滝口くん。

りのちゃんはわたしたちを見て文句した。

「何であんたたちが一緒なのよ！？ ひどいわ、ひどいじゃないっ」

「仕方ないよ、りのさん。落ち着いて」

と、彼女をなだめる藤堂くん。

「付き合つてもいないあんたたちが同じクラスになつたって、しうがないじゃない。あーもうつ

そう言いながらも、りのちゃんは諦めている様子。ただ文句を言いたいだけなのだろう。

携帯電話で時刻を確認した滝口くんが言う。

「もーすぐチャイム鳴るぜ」

と、さつさと群れから抜けて歩き出す。

「そうだね、早く行こ」

と、わたしも彼の後を追つた。

去年と同じクラスなので担任の先生は変わらない。変わったのはクラスの雰囲気。

「あ、いーしゃだ！」

「ああ、スズちゃん」

この前までは、廊下ですれ違つたら声をかけるだけの友達の友達。

「やつた、同じクラスー」

「うん。一年間よろしくね」

「こちらこそー」

悪い子じゃないから良いけれど、わたしが高校二年生という一年間をどう過ごすかが、これで決まった。スズちゃんは漫画研究会所属だから、完全にオタクの領域……！

「他に知ってる子いないかなあ？」

「どうだろう、わたしはあんまり……」

こうなると、唯一の救いは滝口くんということになるのだけれど……前を見たら、彼は誰とも話をせず退屈そうにしていた。今はまだ出席番号順に座っているため、彼とは前後になっていた。

「まあ、いつか。いーしゃがいてくれて安心した」

と、無邪気な笑みを向けるわたしの新たな相棒。りのちゃんとは距離が遠いから会いにいくのかつたるいし、他に気の合う人がいなければ、わたしは彼女と二人組のままだ。まあ、それも面白そうだから良いか。

始業式とホームルームを適当にやり過ごすと、スズちゃんがバス通学だつたことを知つた。

「一緒に帰れないのは残念だなあ

と、漏らす彼女。

「確かに寂しいけど、仕方ないよ」

と、返すわたし。

スズちゃんはわたしにぎゅっと抱きつくり、

「じゃあ、またね」

と、言ってバス停へ向かつていった。そのちょっと丸い背中を見送つて、わたしも駅に向かつて歩き出す。

滝口くんは一人でさっさと帰つてしまつたようだつた。友達がないみたいだから、それも仕方のないことなのだけれど。

駅前の桜並木が綺麗で、ふと足を止めたくなる。学校にも桜はあるが、こっちの方が断然綺麗だ。風に舞つてふわふわ地面を目指す花びらに手を伸ばすと、ひらりと交わされてしまつ。

「……」

「ああ、でも、と、青い空を見上げて思つ。
スズちゃんは絵が上手だから、いろんなことを教えてもらおう。
わたしも、もっと上手く漫画が描けるよ！」

一日目。

決まつたばかりの学級委員の司会進行により、そもそもな委員を決めていく。わたしはそれを右から左へ受け流しつつ、先ほどの自己紹介を思い出してまとめをしていた。

去年は大人しくてほんわかしたクラスだったが、今年はちょっと騒々しい。というのも、DQNな女子が数人に、加えて噂のイケメン君がいるからだ。

「では、図書委員をやりたい人、いますか？」

わたしは机に突つ伏している滝口くんの背をつけた。顔を上げた滝口くんへ言つ。

「一緒にやらない？」

「は？」

「図書委員。部活がある人は仕事しなくても良いんだよ」

「何だよ、それ」

と、嫌そうな顔をする滝口くんだったが、学級委員の目は完全にわたしたちを見ていた。

「えつと……塙田さん、やる？」

と、名簿を確認しながら聞いてくる学級委員。滝口くんはまだ嫌そうな顔をしていたけれど、構わずにわたしは彼の腕を上げさせる。

「はい、塙田と滝口でお願いします」

「え、ちょ、おれは……っ」

わたしの手を振り払うも、クラスメイトの視線も集まり始めてい

て。

「えーと……やらないの？」

学級委員の困惑した表情に、滝口くんが折れる。

「……やるよ」

と、重たい溜め息。安心した様子でわたしたちの名前を書き留めると、学級委員が次に進める。

「じゃあ、次は保健委員、やりたい人ー？」

去年はまだ入学したてで慣れるのに時間がかかつて消極的だつたけれども、今年は自分のやりたいことを思う存分やるつもりでいた。その内の一つが、図書委員だ。

中学の時もやっていたから、高校でもやりたいと思つていた。でも図書室を使用する生徒が少ないらしく、委員会はかなりゆるい。だから、滝口くんでも出来るはずだと思つた。

「「めんね、滝口くん」

小声で謝ると、滝口くんはまた机に突つ伏した。

「別に」

で、そのイケメン君というのが身長高くて体格の良い男子で。

「いーしゃって、滝口と仲良いんだね」

「同じクラスだつたから」

学級委員ではないけれど、クラスの中心的存在になつたりつたり、DQNな女子とも平氣で会話する。

「ふーん……どんな関係なの？」

「どんなつて、ただの友達だけど？」

「嘘つけー。あんだけ仲良しで友達？」

「え……あー、えーっと、うーんと」

噂では中学の時からモテモテで、相当な遊び人だとか。

「スズちゃんの思うような関係じゃないよ。本当にただの友達」

「えー、もつたといない」

でも年上の彼女がいるなんて噂もあるくらいだから、何が眞実か

は分からぬ。

「だつて、滝口くんには恋人いるし」

「マジ、で?」

「……あ、いや、ち、違うの…。聞かなかつた」と、いや、えつと、な、内緒にじてるから、このことせえつと……あれ、わたしおかしいな

「あはは、いーしゃが壊れたー」

「で、でも本当にね、わたしたちは何でもないから」

「はいはい、落ち着け」

わたしが見た限りでは、むしろ純情ね。口調とか言葉はアホっぽいし、裏がなさそうな感じ。

「あーもひ、滝口くんに恋人いるって、誰にも言わないでよ? わたしだつて口止めされてるんだから」

「大丈夫。深く詮索したりしないよー」

軽音楽部もやつてる人だから、ファンがついてモテるのは当然だる。お近づきになりたかつたけど、取り巻きのDQNが怖いから諦めよう。彼女たち、イケメン君にぞつこんみたいだし。

「……お願いね? ジゃないとわたし、スズちゃんの本性見抜いちやうから」

「あはは、何言つて…… え? ちょっと、いーしゃ? いーしやー! ?」

席替えの結果は、一言で言つなら奇跡。とにかくよつも、素晴らしい偶然。

廊下側の壁際四番目。わたしの左斜め前に噂のイケメン君、左斜め後ろに滝口くん。DQNな女子の中でも大人しい子がわたしの後ろにいるけれど、お近づきにならなければ万事オーケー。ちなみにわたしの隣は学級委員の女子、仲良くやろう。

「滝口くん、来週ライブあるんだけど行かない？」

席が近いので、立ち上がることも近寄ることもせずに話しかけてみた。

「今度は誰の？」

と、こちらを見る滝口くん。

「コウノトリのツアー最終日だよ」

滝口くんがはつとして、若干身を乗り出す。

「出るバンドはこの前とほぼ同じだけど、どう？」

「行きたい。それっていつ？」

鞄からスケジュール帳を取り出して答えを返す。

「木曜日。授業終わつた後、そのまんま向かう感じかな

「……よし、分かった。行く

「そこになくなっちゃ」

滝口くんがコウノトリを気に入つてるのは知っていた。どうやらリードギターの翔にびびつと来たようで、本気でギターを始めるきっかけにもなつたそうだ。

「チケット代は三千五百円ね

「了解」

と、心なしかつきつきする様子の滝口くん。翔がレスポールを使っていたから、自分もレスポールをやる運命だと感じたなんてことも言つていた。意外と滝口くんって、面白い。

スケジュール帳を鞄へしまい、次の授業の教科書を机の上に置く。

「そういえば、ギターはどう?」

「ん、頑張ってるよ」

と、滝口くんは言つて、すぐに苦笑いを浮かべる。

「でも最近、独学の限界を感じてきた」

「弾けるようになつたんでしょう?」

「そつなんだけど、何かしつべり来ないつていつか……いまいちなんだよなあ」

と、溜め息をつく。

「へー、滝口もギターやつてんだ?」

急に話しに割つて入つてきたのは、何とあのイケメン君。

「え、ああ。まだ、初めて半年くらいだけど……」

と、警戒するような目で滝口くんが彼を見ると、イケメン君はにかつと笑う。

「オレ、寺崎^{てらさき}新つて言つんだ。軽音部で部長やつてる」

「……知つてゐる」

「マジで! ? わー、オレちょっと有名人ー」

わたしからしたら、何を今さらつて感じなのだが。つていうか、自己紹介の時にそう言つてたじやん!

「良ければ教えてやろうか? つつか、軽音部入っちゃえよ

「え? いや、別におれ、軽音部に興味は

「音楽室だから防音だぜ? マイナーなくせに機材は一通り揃つてるし」

滝口くんの心が揺らいだ。

「あ、そうか。良いな、それ。学校の機材?」

「もちろん。つてゆーか、先輩達抜けちゃつて部員少ねえんだよー。一人でも入つてくれると助かるんだけど」

と、寺崎くんが滝口くんに迫つたところでチャイムが鳴つた。

「じゃあ、詳しい話、後で聞く」

「おう! つか、一緒に昼飯食べようぜ」

「え……？」

いつもの取り巻きDQN女子は？

「オレ、まだクラスに友達いねえからさ」

友達じやない、ということでFA？

「ああ、いいぜ」

何故かすっかり意氣投合した様子の滝口くんと寺崎くん。

「あ、良ければ塚田さんも一緒に」

と、わたしを見る寺崎くん。びっくりして困惑している内に先生が来てしまい、わたしの返答を待たずに寺崎くんが席へ着いた。せつかくイケメン君と話すチャンスだったのに逃した……スズちゃん巻き込んで、今日は彼らと休みを過ごそう、そうじよつ。

小学校の給食の時間にやるよつこ、わたしたちは何故か机を合わせていた。学級委員とDQN女子の机が犠牲になつたけれど、構わずに寺崎くんは言つ。

「活動日は水曜と金曜。練習しないこともないけど、ライブがない時はみんな適当に遊んでる。で、一つ上の先輩たちなんかは全然来ない」

「ねえねえ、何でこんな事になつたの？」

と、スズちゃんに耳打ちされて、わたしは言ひ。

「さあ？ でも、こんなこと滅多にないでしょ」

「そうだけど……緊張するなあ」

と、向かいにいる男子一人をうかがう。

寺崎くんは滝口くんを口説くのに必死で、滝口くんは興味深そうに話を聞いている。……お弁当のおかずを盗んでも気づかないんじゃないだろうか。

「それが先輩達は外で活動してゐるからって。で、真面目にやつてるオレが部長に任命されたってワケ」

「ふうん、他の奴らは？」

「えつと、同学年の奴らはオレ含めて七人いて二つに分かれてる。

でも、オレじゃない方がすげーやる気ねえんだよ」

「どうやら、寺崎くんは本気で音楽をやっている人らしい。

「新入生も全然見学来ないし、」そのままだと地味な部活のまま終わ

つちまうんだ」

「そんなに地味だっけ？」

「地味だよ！ ライブを観に来てくれるファンはいるけど、バンド

が現状三つなんて寂しすぎるだろ」

「で、おれが入つたらどうなるの？」

「オレのバンドが四人になる！」

「でもやっぱり、アホだ。

「決定事項かよ！」

「だつて今、スリーピースだぜ？ ギターだつてヴォーカル兼任で
れ！」

「あれ、寺崎つて何やってるの？」

「オレはベース」

「と、誇らしげに笑う寺崎くんに思わずきゅんと来た。良いよね、
ベース！」

「ああ、それで三人目がドラムか」

「そうそう。だから、ぜひともオレのバンドに入つてくれよ

「何でバンドだっけ？」

「シユガージヤンキー」

「あ、ちょっと可愛い。」

「……うーん、ちょっと考えるわ」

「え、何で？ 入ろうよ、軽音部。つつか、入つてくれよー」

「と、何を思ったのか滝口くんにもたれかかる寺崎くん。ああ、机
の上に携帯電話出しておけば良かつた……！」

「ちょ、やめる。重い、重いって寺崎」

「滝口くんに嫌がられてぱっと離れる寺崎くん。

「……あの、悪いんだけど、田の前でいちゃいちゃしないでくれる

？」

複雑な思いでわたしがそう言つと、寺崎くんは笑つた。

「はは、悪い悪い。だって滝口がつれないこと言つからうあ

……これだけ明るくて人懐こいと、女子の多くは彼にときめくだ

るわ。さわやかな笑顔は反則ですっ！

「おれはただ、考えるつて言つただけだろ。別に入りたくないわけ
じゃねえよ」

と、溜め息をつく滝口くん。

「あ、マジで？　じゃあ、良い返事待つてるな！　期限は今日の放

課後で」

「短えーーー！」

駄目だ、滝口くんがすっかり寺崎くんのペースにはまつて突っ込み役になってしまつている。

「もうちょっとと考えさせろよ」

「あはは、冗談だつてーーー！」

「まったく、何なんだよ、お前は…………」

まあ、楽しそうだから良いか。イケメン君も噂とは全然違つて楽しい人だし、DQN女子の妬みさえ買わなければ大丈夫だろう。…

…ええ、妬まれないことを切に祈ります。

身体計測の結果を見て、僕は喜びを隠しきれなかった。

去年に比べて、身長が約六センチも伸びていたのだ。よつやく訪れた僕の成長期！……のはずなんだけど。

通勤ラッシュの車内で溜め息をついてしまう。目線が前よりも高くなつたのは明らかだし、その分だけ女の子たちが小さく見えるのも当然だ。

ただ、窓に映る自分自身を見ると、どうしても溜め息が出てしまう。

中学生の時は丸かつた顔が、縦に長くなっている気がするのだ。つまり、大人の顔になつてきているわけだけれど……言い換えると、童顔じゃなくなってきたということ。可愛いという言葉が、似合わなくなつてきたということだ。

ようやく覚えたマイクに対する自信もなくなつてきて、僕は悩んでいた。男子の成長期つて、結構辛い。

電車が停止して扉が開く。僕と同じ制服を着た人が乗つてきたと思うと、目が合つた。

「久しぶりだな、ユイ」

美音だった。

「ああ、久しぶり」

と、僕はちょっとだけ元気を取り戻す。美音は僕の隣へ来ると、「そつか、お前こんなところ乗つてたんだな」と、言つ。

「うん、他よりも空いてるから」

僕は電車でぎゅうぎゅうになるのが嫌だった。潰されそうだし、息苦しい。だから、端っこの人気が少ない車両に好んで乗り込んでいた。

「じゃあ、おれも今度から」「こいつかな
良いと思うよ。つていうか……」

「僕が彼の背中に視線をやると、美音は言つた。

「ああ、ギター」

そして首を傾げる僕へ、美音はにこりと誇らしげに笑う。
「おれ、軽音部に入ったんだ。今日がその、活動初日でさ」

「……そ、そうなんだ」

存在が遠くなつたように思えて、ちょっと寂しくなつてしまつ。ギターを始めたと思つたら、軽音部にまで入つてしまふなんて。「クラスの奴に誘われたんだよ。先輩たちいなくなつて廃部寸前だつて言つから、仕方なく」

「そつか……楽しくやつてるみたいだね」

美音つて、ちょっと近づきにくく雰囲氣あるから、それは友人として素直に喜ばしかつた。

「お前は？」

でも、自分のこととなると、これもまた溜め息の出ることで。「一応、何人か友だちは出来たけど、なんかしつくりこないんだ。嫌ではないんだけどね」

「ふーん。だからそんなに落ち込んでるわけ？」

「え、落ち込んでるよつに見える？」

「うん」

即答されて、僕はがくりと肩を落とす。やっぱり、美音は僕のことをよく分かつていて。

「えつと……それもあるけど、実は、靴が入らなくなつちやつて」

「へえ、成長期だな」

「普通の靴じやなくて、その……」

僕が言いにくそうになると、美音がひらめいて笑う。

「ああ、そつちか。買い換えなきやな」

「あれ、けつこう高いんだよ？」

「そうか。それは可哀相に」

「それだけじゃなくて、服もきつくなつてきて、本当に困つてゐるんだ」

やつちやんみたいになつたら、確實に女装は無理だらう。それなら僕は成長期と引き替えに、今の自分を維持したい。出来れば、一年前の自分を。

「うーん、難しい問題だな」

と、美音が大して何も考へていない様子で言ひ。

「これ以上身長が伸びたら、今持つてる物全部^{ヒル}無しだよ」

そう言つて、僕はまた溜め息をついた。

「成長期が終わるまで、しばらくやめようかな」

衝動的に着たくなつて、外に出かけたくなる日もあるだらう。けれども、あんなきつい靴では歩けない。

「ネットオークションとかで売つたら?」

「え、手放せつて貰^{ハサフ}つの?」

びつくりして言い返すと、美音はさうりとひどこ^{ヒドコ}とを言ひ。

「だつて着れないんじや意味無いだろ」

それくらい、僕だつて分かってるのに……。一

「……売つて、どうするの?」

「新しいの買^{ハサフ}う」

「無理だよ。つていうか、売りたくない」

きつと美音には分からぬんだらう。

「そうか。ワガママだなあ」

お気に入りの衣装が僕から離れていく気持ち。女装がだんだんと似合わなくなつていく気持ち。いつか、誰からも可愛いと言われなくなる気持ち。

「まあ、何なら塙田に相談すれば? もつとあいつ、良いことてくれるよ

と、美音に言われてはつとした。もつだ、塙田さんなら僕の気持ちをきつと理解してくれる。

「そつか、そうだよね。ありがと^{ハバ}、ハオ」

僕が表情を明るくすると、美音は若干引いた。

「……お、おひ」

「出来たら今日、休み時間に会ってに行くな」

その言葉通り、僕は昼食を終えるとすぐに六組へ向かった。廊下から教室の中をのぞき見て、見知った顔を探す。

「あ、塚田さん！」

廊下側の席にいた塚田さんがはつといひひらを振り向く。僕はすぐに彼女の元へ歩み寄った。

「藤堂くん、どうしたの？」

「あれ、ミオから聞いてない？ ちょっと相談があるんだけど……と、僕は室内を見渡して、塚田さんへ問う。

「ミオは？」

「校庭で遊んでるよ」

「そ、そつか」

いつも教室でうだうだしていた美音が外で遊ぶなんて……本当に遠い。

僕は溜め息をこりえ、塚田さんのそばにいた女子をひりと見た。

「えつと……

「あ、羽山鈴奈です。もしかしてお邪魔？」

と、首を傾げる羽山さん。僕はどうしようか迷つたけれど、今日はちよつとやめることにした。

「あ、ううん、気にしないで。つていうか、また今度でいいや」

「本当だっ？」

「うん」

塚田さんは納得していない様子で僕の顔をじっと見るのであると、羽山さんが言った。

「ところであなたのお名前は？」

「え？ ああ、藤堂夕樹、です」

「彼女はいる？」

「え？」

急な質問に思わず戸惑った。

「スズちゃん、これが噂の、りのちゃんの彼氏さんだよ」と、塚田さんがすかさずフォローしてくれて助かった。

「えー、嘘！？ うつわ、そうだったの？ うわー、うわー」

どうやら、羽山さんは彼女のことを知っているらしい。それにしても、この反応にどうリアクションすればいいんだろう？ とりあえず苦笑いをしていたら、塚田さんが羽山さんの袖を掴んで言つた。

「スズちゃん、自重」

「はいっ」

塚田さんが立場は上にあるらしい。新しい一面を垣間見たな、と思つた。

「人に聞かれたくないことだつたら、メールか電話でもして。夜だつたらだいたい空いてるから」

と、にっこり笑う塚田さん。さすが、よく分かってくれている。

「うん、分かつた。じゃあ、今度メールするね」

と、僕は言葉を返して、教室へ戻ろうと扉へ向かう。

「ああ、りのちゃんとは一体どこまで行つてゐるのか聞きたかったのに！」

「やめなさい、スズちゃん。あの一人、まだまだ清いんだから」

と、後ろから彼女たちの声がしたが、僕はやっぱり苦笑いするしかなかつた。

48・美音 ? (前書き)

1 / 16
一部修正。

五月晴れの下で思い切り遊んだら、久しぶりにいい汗をかいた。これも他のクラスメートとすぐ打ち解けた寺崎のおかげだろう。彼が軽音部の部長を任されたのも、きっとその気さくな性格からだと分かる。

初めは苦手なタイプだと思つたけれど、実際に話してみると悪い奴じやないし、面白かった。

「つか、何でお前まで来るんだよ」「な

放課後、清掃を終えて音楽室へ向かう。

「だつて気になるんだもん」

と、にこっとする塚田。好奇心旺盛なのはいいけれど、彼女は部外者だ。おれが不満を顔に表したら、塚田は前を行く寺崎に言つた。

「見学するだけなら、構わないんだよね？」

「おひ。つか、女子ならいつでも大歓迎するぜ」

と、寺崎。そんなものなのかと思いつつ、放課後特有の賑わいを見せる廊下をぼーっと見やる。

グラウンドでは体育系の部活がそれぞれに活動をしていて、通り過ぎる教室からは時折人の声がする。一年の時はさつと帰宅していく知らなかつたことばかりが、校内にひしめいていた。

廊下の突き当たりに音楽室はあった。技術選択で美術を選択していたおれは、音楽室なんて数えるほどしか来たことがない。今年は塚田に誘われて音楽を選択したけれど、週に一度の授業だからまだ慣れていない場所だつた。

音楽室の隣に音楽準備室、その隣に第一音楽室。

「金曜は吹奏楽部があつち使つから、オレたちはもつぱり第一に集まつてる」

そうおれたちに説明をして、寺崎は第一音楽室の扉を開けた。

「部長のお出ましだぞー」

自分で言つたか、普通。

「遅かつたな、新！ 待ちくたびれたぞー」

「おはよう。後ろにいるのは？」

中には一人の男子だけだった。寺崎に似てお洒落な感じの奴と、普通な感じの奴。

「聞いて驚け、新入部員だ！」

と、あつたり言つ寺崎。一人は目を丸くすると、普通な感じの奴があれと塚田を見つめました。

「あ、えっと……見たことある」

がたつと椅子を立て、おれたちをじっと見つめ考える。彼が答えを出す前に、塚田が控えめに口を開いた。

「同じ図書委員、だつたよね？」

ああ、そういうえばそうだったかも。最初の集まりに参加して以来、ほとんど仕事してないから記憶は定かじやないけれど。

「そうそう、やっぱりそつか」

と、納得した様子で彼も言つ。といつゝとは、彼とはすでにつながりを持つていたわけか。

「えつと俺、四組の三藤頼人」

先に自己紹介をしてきた三藤へ、塚田はにこりと笑つて返す。

「六組の塚田依紗よ」

「あ、おれは滝口」

「ストップ！」

急に寺崎が大声を上げ、おればびくつとしてしまつ。先ほどまでも様子を伺っていたはずなのだが、どうやら何か気に障つたらしい。「知り合いなのは分かつたけど、まずはオレの話を聞け」

「うん。で？」

と、三藤。もう一人の方はすっかり置いてけぼりにされて退屈そうだ。

寺崎は黒板の前に立つておれを指さした。

「あれが噂の新メンバー、ギターの滝口美音くんだ」

「……えっと、初めまして」

と、軽く会釈するおれ。

「そしてあちらにいるのはオレらのヒロイン、塚田さんである！」
意味の分からぬ肩書きで呼ばれて、塚田は反応に困っていた。
構わずに寺崎はもう一人の方を見て問う。

「質問は？」

「はーい、二人とも部活入んの？」

その視線がおれに向いて、おれは答えを返す。

「いや、おれだけ。塚田はただの見学者」

「見てるだけなので、お気になさりや」

と、塚田も言つ。

「ふーん」

どつちつかずの返答をして、そいつは立ち上るとおれたちの前へ来た。否、塚田の前に。

「オレはシュガーファンキーの天才ボーカルこと平沼万。^{ひらぬまばん}よろしく」と、彼女に手を差し出す。ああ、やっぱり寺崎と同じ類の人間らしい。

「よろしく」

塚田が手を出した直後、寺崎が一人の間に割つて入る。

「つづーか、来てるのお前らだけかよ？」

一瞬びくつとした平沼だが、構わずにヒロインと握手を交わそうとした。すると、今度は三藤が言つ。

「抜け駆けは駄目だつてさ、万」

「別におれはそんなつもりないっていうか、握手は礼儀の一つだろ
常考」

と、塚田の手を半ば無理矢理取る平沼。塚田はついて行けない様子で苦笑いをする。

「つづか何言つてんだよ、頼人！ それじゃあオレが嫉妬してるみたいじゃねえか！」

「え、だつてあまりにも……あ、殴らないで」

丞先が三藤に変わり、ぎやあぎやあと責め立てられる。満足したはずの平沼も加わって、隅に追いやられる三藤。 良心が一人と騒々しいのが二人、といったところだらうか。……苦労するだらうなあ、三藤。

「で？」

ちょっと大きめの声で問いかけたら、三人がはつとした様子でおりを振り返る。

「全くついていけないから、まず説明をしてくれ」

三藤が壁際に積まれた椅子を一つ取り出し、それらを中央へ、先ほどまで座っていた椅子と合わせて円を図るように配置する。

「どうぞ、座つて

と、おれたちへ言つ。

廊下側の壁の近くにそれぞれの荷物が無造作に置かれていたから、おれもそれに倣つて鞄とギターを置いた。塙田も鞄を降ろして、三藤の用意してくれた椅子へ向かう。

寺崎が自分の分の椅子を用意して塙田の隣に着くと、三藤と平沼も椅子に座つた。

「じゃあ、改めて。オレはベースの寺崎新

「ボーカルアンドギターの平沼万

「ドラムの三藤頼人」

今度は眞面目に自己紹介をするシユガージャンキーの現メンバー。

「部員は他にもいるけど、今日は来てないらしい」

「音楽に対する情熱が足りねえんだよ、あいつら」

平沼がそう付け足したが、構わずに部長は言つ。

「それで、滝口にはオレらのバンドに入つてもらうわけだけど……ちらつとおれを見て、改まつた口調で尋ねる。

「主に聞くジャンルは？」

「え？ あー、えつと……」

おれはロックが好きだけど、そんな広い範囲じゃ答えにならないだろう。そうすると、おれは別に何でもいいっていうか。

「ロック？ パンク？ メタル？ J - POP？」

「え、つと……まあ、J - POPは聞く」

寺崎の問いに答えたなら、平沼がおれを見て尋ねた。

「V系は？」

「ああ、けつこう好き」

「よつしゃ！」

何故かガツシッポーズする平沼。次に尋ねてきたのは三藤だ。

「洋楽は？」

「うーん、あんまり聞いたこと無いな」

「……そつか」

正直に答えたなら、ちょっとがっかりされた。ビリヤー、今聞いてきたのはそれぞの好きなジャンルらしい。

「オレらの敵だな。なあ、頼人？」

「うん、残念ながら」

と、寺崎と三藤が言つて、平沼が反論をする。

「何を言ひ、お前たち。これで一対一だぞ！」

と、おれの方に椅子を寄せてくる。何だかよく分からぬけれど、あつちとこつちで敵対関係が築かれているようだ。

また言い争いでも始めるのかな、と思つて様子を見ていると、寺崎がころりと表情を変えた。

「まあ、基本的に流行の曲laporteしてゐるから、あんま関係ないんだけどな」

そして陽気に笑う。流行の曲というとJ - POPが主だろう。つまり、敵とは口先だけで、バンド活動に大した影響はない……ってことか？

「オレもV系よく聞くんだ。よろしくな

ど、平沼が人懐こい笑みを浮かべておれに握手を求めてくる。癖なのだろうか。

「ああ、よろしく」

手を出してがつしりと握手をする。

「俺は洋楽しか聴かないけど、まともな人で良かつたよ。これからよろしく」

と、三藤もこいつと笑って、おれも笑みを返した。

「ああ、こちから」

やつぱり三藤は、寺崎と平沼の面倒を見るのに苦労しているようだ。おれも必然的に巻き込まれると思つて、とても嫌な感じしかしない。慣れるまで大変だろうな……不安だ。

「ギターの練習は第一音楽室でやると良い。ここだと他の奴らが邪魔になるし、集中できないんだよ。あと、何かやりたい曲あつたら、早めに教えてくれよな」

と、寺崎がちょっと部長らしさを言つた。いや、部長なのだから当然ではあるのだけれど。

「せめてライブの一ヶ月くらい前じゃないと、ちゃんと練習できないうからな」

「そつか……そういうや、次のライブつていつの？」

おれが尋ねると、寺崎は言った。

「七月の末、定期公演の夏休みライブだ」

「これは近くの公民館でやるんだぜ」

「その次が文化祭でのライブになるよ」

「で、三月には一年の締めくくりとして、また公民館で定期公演するんだ」

一年間に三回、ライブをするらしい。で、その初めが七月、と。
「何やるか決まってんの？」

「まだ」

笑つてそう言つた寺崎を見て、おれの胸に不安がよぎる。あと二ヶ月しかないのに、マジかよ……いや、マジなんだろうな。
おれは苦笑するより先に、溜め息をついた。

あたしの高校一年生は、とても大変な一年になるだらう。何故なら、新学期早々にクラスの女子と言い争つてしまつたから。そしてその結果、あたしが学級委員をやることになつたから。別に嫌ではないけれど、意外と仕事が多くて苦労しているのが現状。あたしの味方でいてくれる子が何人かいるから、どうにかやっている。

強いて言つながら、ろくな仕事をしない日直に苛々するだけであつて、別に悪くはない。

放課後、黒板を綺麗にせずに帰つてしまつた日直を呪いながら、一人で黒板を綺麗にした。

しばらく教室に残つているクラスメートもいたけれど、終わる頃にはあたし一人になつていて、ちょっと寂しかつた。

溜め息をついてから、廊下に出る。

水道の蛇口をひねつて、チョークの粉で白くなつた手を洗う。水の音だけが周囲に響く。

制服のポケットからハンカチを取り出して、もう片方の手で水を止めた。

教室に戻つて鞄を掻む。ようやく帰ることが出来る。

ふと見た時計は五時を指していて、時間を無駄に使つてしまつた気がした。

また溜め息をついて、あたしは教室を後にした。

部活動に励む生徒の声しか聞こえない。廊下を行つて、階段をマペースに下りる。

今のクラスでは、いーしゃのよつて辛抱強くあたしを待つてくれる友だちはいない。

コイには、学級委員をやつしていることすら知られていない。あた

しが今、どんな風に過ごしているか知らせてしまつたら、彼はきっとわたしのそばを離れないで助けてくれるから。

優しさは嬉しいけど、わたしは誰かにもたれかかるほど弱くはない。あたしは、一人でも平気。

一階へ着くと、床に座り込んで話しかけている女子たちが田に付いた。面識はなくとも、苛々する。

気にせず下駄箱へ向かい、靴を履き替える。

ユイがいてくれたら、と思うこともある。だけどそうしたら、やっぱりあたしは弱さをさらけ出してしまつだろう。そんなことで、わざわざことで、あの子を困らせたくない。

校舎を出て、正門を田指す。知り合いにすら会わないのは寂しいけれど、安心もした。

誰かに愚痴を聞いてほしいと思わないこともないけど、聞かされる方は迷惑だらうから。家に帰つて、お母さんに愚痴を聞いてもらおう。お父さんでも良い、弟でも。

校舎裏から、楽しそうに笑う声が聞こえてきた。見上げた三階の音楽室、何か話をしているとおぼしき男子生徒たちの姿。

ああ、やつぱり寂しいな。

学級委員の朝は早い。

朝練習に励む生徒しかいないような静かな時間に学校へ着き、鞄を教室へ置く。

ちらほらと登校してくる生徒たちを横目に職員室へ行って、名簿と日誌を取つて教室へ戻る。

もう一人の学級委員である男子は不真面目すぎて頼りない。だからあたしが一人でさつさと仕事をする。

教室へ戻ると、三分の二くらいクラスメートが登校してきているため、ちょっと賑やかだ。

「おはよう」

比較的仲良くしている女の子たちに挨拶をして、名簿と日誌を教

卓へ置く。

「あ、おはよー」

「おはよー」

その返答に満足して、あたしはちゅうとだけ笑顔を作った。

彼女たちの中に割り込んで話をする日もあるけれど、今日はそんな気分になれば、すぐに席へ着いた。

鞄から筆記用具を取り出して、一時間目の授業に備える。彼女たちは地味なタイプだけど、話してみるとけっこうしつかりしている。あたしを敵視する女子と相容れないから、あたしの側に着いているらしい。あたしも、あの女子たちと仲良くする気なんてないから、別に構わない。

中立の立場を取る女子も数人いるが、そういう子に限っていじめの対象になりやすいので、そこは学級委員として注意して見ているつもり。

男子たちは去年と似たり寄つたりな雰囲気で、どうも頼りない奴らが多いからあてにならない。

予鈴が鳴る頃、ほとんどのクラスメートが教室について、遅刻していくのはいつものメンバー。

授業によつてはチャイムが鳴る前に先生が來るので要注意。氣を抜いてぼーっとしていると、号令が遅れる。

今日はチャイムの後に來る先生だつたから、様子を見てれば大丈夫。時には五分くらい先生が來なくて、職員室に行つて先生を探しに行つたりもする。そういう時つて、だいたいが自習になる。先生が何かしらの理由で休んでいたり、早退していたりするからだ。

チャイムが鳴つて数分後、数学の先生がやってきた。

席へ着くクラスメートたち。もうすっかり慣れた号令をかける。

「起立！」

学級委員の何が嫌かつていうと、やっぱり仕事が多いことこの。

去年のように、のらりくらりとやり過ごせないとこ。

何か問題があると、担任に呼び出されて話をしなくてはいけないこと。クラスをまとめなければならないこと。

誰かが嫌がる仕事を、自分が引き受けなければいけないこと。

文化祭の前に予定されている修学旅行について、計画をしなければいけないこと。

第四章開始時点での設定になります

＜メインキャラクター＞

滝口美音／173cm

・夜司の彼氏で同性愛者の少年。他人をいじめるのが好きだけど、基本は受け身。

・第四章より、軽音楽部に所属。シユガージャンキーのメンバーになる。

・愛機は青のレスポール。

藤堂夜司／183cm

・美音の彼氏で同性愛者の青年。頭は良いのに不真面目で時々へたれ。

・第四章における出番はほとんど無し。

藤堂夕樹／166cm

・美音の親友で夜司の弟。女装癖があつて可愛い物が大好きな少年。

・第四章より、成長期に直面し、悩み始める。

高内りの／160cm

・美音と同じ中学の出身でいつも強気な少女。可愛ければ何でも好き。

・第四章より、自分のことについて改めて知り始める。

塚田依紗／153cm

- ・美音のクラスメート。普段は大人しい腐女子。イラストとピアノが趣味。

・第四章では、シュガージャンキーのメンバーと親しい関係に。

寺崎新／178cm

- ・美音のクラスメート。軽音楽部の部長で誰に対しても気さくなイケメン。
- ・第四章より登場。シュガージャンキーのリーダーでベーシスト。
- ・愛機は黒のプレシジョンベース。

三藤頼人／177cm

- ・美音と同じ図書委員。洋楽が好きな常識ある少年。何かと前向きで優しい。

・第四章より登場。シュガージャンキーのドラム担当。

平沼万／175cm

- ・シュガージャンキーのヴォーカル&ギター。
- ・第四章より登場。V系が大好きな明るいお調子者。
- ・愛機は赤のストラトキャスター。

＜その他・脇役＞

藤堂朝子

- ・夜司と夕樹の妹。小学一年生になりました。

＜第四章以降、出ないと思われる登場人物＞

逢野咲真

- ・夜司の友人。

逢野真咲

- ・夜司の友人。

・咲真の双子の姉。

<今後、重要なかも知れない登場人物>

滝口美歌

・美音の姉。大学の寮に入っている。

朝子が食卓で宿題をやっていた。鉛筆を握つて、もう片方の手で数を数えている。

「教えてあげようか？」

僕が声をかけると、朝子はこちらを見もせずに言ひ。

「あーちゃん、ひとりでできるもん」

「そう」

小学校に上がつてから、朝子は生意気になつていた。幼稚園で一緒だつた友だちと離れて、新しい友だちが出来たおかげだろつ。ワークブックに数字を書き込む朝子をぼーっと眺めていたら、母さんが僕に声をかけた。

「ゆい、テーブルの上片付けて

「はーい」

台所の方から良い匂いが漂つてくる。今日は焼き魚かな。

朝子の勉強の邪魔をしなによつ、テーブルの上に置かれた雑誌やお菓子の袋を片付ける。

台所へ行つて母さんから台布巾を受け取り、食卓を拭きはじめた。

「朝子、テーブル拭くからじけて

「……ん」

集中していたところを邪魔されてむつとした朝子が、隣の椅子にワークブックと筆記用具を置いた。

僕が食卓を拭き終えると、朝子は一つの椅子の上に寝そべるようにして宿題を続けていた。小さいつて良いなあ。

「教えてあげようか？」

もう一度問い合わせると、やっぱり朝子は首を横に振つた。

「つうん、だいじょうぶ」

と、また指を使って計算をする。朝子の宿題が終わつたら、見てやつて、その後褒めてやろうと思つた。それで今日は、一緒にお風

呂に入つて遊ぼう。

再び台所へ行き、とりあえず三人分のお茶碗を棚から取り出した。この春、社会人になつたやつちゃんはいつも何時に帰つてくるか分からない。

それからお箸も三人分取り出して、食卓に置きに行く。がちやつと玄関の方から音がしたので顔を出したら、やつちゃんが帰ってきた。

「おかえり」

と、声をかければ、やつちゃんは疲れ切つた顔で「ただいま」と、返す。

やつちゃんがすぐに部屋へ向かい、僕は台所へ行つてやつちゃんのお茶碗とお箸を取り出した。

「今日は早かつたわね」

と、咳く母さん。壁に掛けられた時計は七時を指していた。

「そうだね」

相づちを打つて食卓にそれらを並べ、朝子へ言つ。

「そろそろ」飯だよ

「うん」

朝子はまだ宿題をやりたがつている様子だ。僕も昔はこんな風だったのかな、と思つと、不思議な気分になる。母さんの手伝いをせつせとこなしていたら、私服に着替えたやつちゃんが食卓へ來た。

「おわつたー！」

と、急に声を張り上げた朝子に、席へ着いたやつちゃんが言つ。「見てやうか？」

朝子は少し考へると、ワークブックを差し出す。

「はい、ビーぞ」

僕がやううと思つていたの、やつちゃんに取られてしまった。せめて褒めるのだけでもやりたいな。

「うん、よく出来る。偉いぞ、朝子」

と、やつひちゃんはワークブックから皿を離してそれを返した。

「……うん。」

にっこり笑った朝子の頭を、まるで犬でも愛でるよつこ撫でるやつちゃん。あーもう、僕の仕事が……。

仕方ないので、僕はお茶碗にご飯をよそつことじた。部屋に宿題をしまいに向かった朝子と入れ違いに、母さんがサラダの盛られた皿を運んでくる。

「珍しく早かつたじゃない。どうしたの？」

母さんの問いにやつちゃんは欠伸をしてから答える。

「うん、何か仕事が早く終わって、飲み会もなかつたから」

「今日くらい、さつまと寝たら？　お風呂も一番先に入つちやいなさいよ」

一番、といつと、朝子も一緒に入るのが家のルールだ。僕の予定が崩されそうになつて、ちよつと冷や冷やした。

「え、朝子は？」

尋ねるやつちゃんに母さんが言ひ。

「大丈夫よ、その後すぐによいが入れてくれるから」「え？」

そう言われると複雑で、僕は一人の方を振り返つてしまつた。

「あら、嫌だつた？」

「いや、別に……ただ、最初に入るもんだと思つてたから」と、僕が返すと、やつちゃんは言つた。

「じゃあ良いよ。俺が一緒にに入るから」

普段は嫌がるくせに、どうしてやつちゃんはいつも気分屋なんだ
るか。

「いこよ、ゆづくつしたいでしょ？」

言にながらやつちゃんのお茶碗を前に置いたら、兄は何を思ったのか、笑つた。

「ああ、たまには二人で入るか？」

「えつ」

絶対嫌だ。

戻ってきた朝子が席に座り、やつちゃんが朝子へ問い合わせる。

「今日は一緒に風呂、入ろうな」

田を丸くした朝子だが、褒められたのが嬉しかったのか素直に頷く。

「うん、いいよ」

「ちょっとだけ上から田線、生意氣だけど可愛い妹。」

「まったく、なるべく早く上がるのよ」

と、母さんが注意すると、やつちゃんは楽しそうに返事した。

やつちゃんもたぶん、朝子と遊んで癒されたいのだな。

そう結論づけて、僕は夕食の後、自分の部屋に閉じこもった。一人がお風呂から上がるまで暇だ。宿題は学校で済ませてしまつたし、やることがない。

ベッドに寝そべって、枕元に置いたぬいぐるみたちを見つめる。幼い頃からずっと一緒に居るせいで、どれもこれも薄汚れていた。中でもお気に入りだった猫のぬいぐるみに手を伸ばし、足を掴んで引き寄せる。久しぶりに抱きしめると、何だか安心した。普通の男の子は、きっとこんな風にすることってないんだろうな。

ふと思いついて、僕は上半身を起こした。充電中の携帯電話を床から取り上げ、すぐにメール作成画面を出す。

塚田さんに相談しなきゃいけないことがあるんだった。

ぬいぐるみを抱いたまま、ぴひつとボタンを打つて相談内容を書いた文章を作り、一度読み直してから送信する。

返信が来るまでまた暇になつた。ぬいぐるみの頭に頬を寄せ、そのままばたつとベッドへ横になる。

携帯電話から手を放すと、すぐにライトが光つた。思ったよりも早い返信に、僕はちょっと喜んだ。

すぐに取り上げて画面を開く。

『靴は諦めるしかないけど、服ならリメイクしちゃつたら良いくじ』

やないかな

リメイク？

続きの文章には、いつも書かれていた。

『めんどくさいから、電話して。詳しく述べよ』

塚田さんは絵文字を使っていたけれど、内容はひとつもわざわざ書いていた。りのさんと似て、彼女にも男らしげ部分があるようだ。ドキドキしながら塚田さんの電話番号に発信すると、すぐに出でくれた。

「あ、あの、どうこう」と。

『えっと、リメイクってこののは作り直すって事でね、着られなくなつた服をもう一度着られるようにするの。わたしもひつだけやつたことがあるんだけど、お家にシンはある?』

「う、うん」

『じゃあ、できるね。藤堂くんの持つてる服でもよんだけで、裾を伸ばすのなら簡単よ』

塚田さんはぱぱりす。こんなことに精通している。

『服そのものがまったく入らないなら、それを使って新しく服を作つちやうの。まあ、これはそう簡単にできるものじゃないし、最初は簡単な物を作つて練習しなきゃ駄目ね』

「そうなんだ」

『あ、だけどお母さんがシンやるなら、頼んでみるのもいいかもね。ちゃんと丈を測つて、どんな服を作りたいか図案も描いて』

「……けつこう、めんどくさい?」

苦い顔を浮かべたら、塚田さんは言った。

『うん。慣れれば簡単だろ?けど、わたしは挫折したよ』

リメイクにはそつとうな時間と労力がかかりそうだ。

『でも、着られなくなつた服をもつたいないと想つない、それくらいいしか活用する方法はないと思つた』

「やうだね……ごめんな、塚田さん」

『ううん、謝らないで。わたしこそ、良いアドバイスできなくて』

めんね。もし中古で売るなら、良いお店知ってるから紹介するよ

「うん……、ありがとう。もう少し、考えてみるよ」

塚田さんの優しさに感謝しつつ、僕は心の中で溜め息をついた。

やっぱり、成長期に抗うのは難しそうだ。

図書室は退屈なところだと思つていたけれど、実はそうでもなかつた。

「頼人は何で委員になつたの？」

「負けたんだ、じゃんけんで」

普段は部活があるからと仕事をさぼつてゐるおれだけど、集まりに参加した時くらいはついでに仕事する。

「あー、なるほど」

「実際にやつてみたら面白かつたから、結果オーライだけどね」と、頼人は手にした本を棚へ戻していく。

何冊もの本を抱えたおれは、腕が痛かつた。パートナーが頼人だから楽しくやつていてるけれど、何気に重労働だ。

頼人がおれの抱えた本を上から一冊ほど手にとつて、棚へ戻す。

「塚田さんや美音とも友だちになれたし、負けて良かつたよ」

ははつと笑う、新や万とはまた別の意味で爽やかな笑顔。

「そうだな、おれも別に後悔はしない」

塚田の言つたとおり、委員会は規則がゆるいから気が楽だし、たまにこゝして仕事をするだけで良いなら喜んでやる。

「あれ？　でも美音は、何で塚田さんに誘われたわけ？」

「え？　あー……」

ただ仲が良いだけだとおれは思うが、普通の奴らがそれで納得しないのは当然で。

「去年も同じクラスで、あいつの友だちがあれと同中で、んで、そいつがおれの親友と付き合つてる、から？」

「……ややこしいな」

「ごめん」

頼人がまた本を取り上げ、腕の痛みが軽くなる。

「つまり、ただの友だちって事？」

「んー、まあ、やつこり」と。出席番号も並んでるから、誘いやすかつたんじゃね？」

おれがそう返すと、頬人は頷いてくれた。

「なるほどね」

変な誤解をされていいそつで冷や冷やしたが、それを口にしたらさらに誤解されてしまうだろ？

気になりつつも、おれは我慢して本を抱えなおした。

軽音部に入つてから、おれのギターに対する考え方があわつてきていた。

前は、普通に弾けるよつになれば、それで良いと思つていた。今は、みんなと音を合わせて一曲通せるよつにしたい。それを、他の人たちに聞いてもらいたい。

「なあなあ、スピーカーつてバンド知つてる？」

万は目立ちたがり屋で、中学の頃からV系にはまつてゐる。

「いや、知らない」

「むちゅやくちゅや好きなんだけど、二月に解散しちゃつたんだよ」

「へえ」

おれの知らないどころか、塙田さえも知らないよつなバンドをいくつも知つていて、将来はV系バンドをやるのが夢らしい。

「夏には何かやるかもつて言つてたけど、全然情報なくつてさあ」

「本命だったの？」

「もち本命。大本命」

と、真面目な顔で返してくれる。

おれはとりあえずコウノトリが憧れだけど、万の感覚は塙田と近い。

「別のバンド追いかければいいじゃん」

「やだ。オレはあの人のギターが好きなんだ。つか、あの人人が好

き」

「誰」

「リーダーの、にーちゃん。ちょっと待て、画像あるかも」と、万は携帯電話を操作し始めた。少し待たされてから、おれの方に画面が向けられる。

「見づらいけど、この右の人」

それはどこかに飾られたと思われるポスターだった。真ん中に女性の可愛い顔したヴォーカルがいて、左に金髪の色白な男性、右に長い黒髪でスタイルの良さそうなイケメンがいた。

「テライケメン！」

そう言って目をきらきらとさせる万。どうやら、本気で好きなようだ。おれの思うそれとは違うと思つた。

「……三人だけなんだ？」

同意するのを遠慮して質問をぶつけたら、万は携帯電話を自分の方に戻して言った。

「ドラムがサポートだったからな。噂では、正式メンバーに入れるとかないと、いやむやで終わつた」

「そつか……色々あるんだな」

と、おれは遠くの方を見て呟いた。

まだあれから一週間くらいしか経つてないが、万は良い奴だった。共通点もあるし、男に憧れる男を素でやるから、何となく気が楽なのだ。

恋愛対象と憧れは違うと分かつてはいるが、万といふと落ち着く。V系で誰がかっこいいとか、ギターが上手いとか、そういう話が出来るから、すぐ楽しかった。

「新つていうのは、おれのクラスメートでベースやってるんだけど、いつも一緒に飯食つてるんだ」

母さんは適当に笑つた。

「良かつたじゃない」

だからおれは、話を続けた。

「新は自転車通学だから、一緒に帰る時は駅まで乗せてつてもうつ

の

「せう

母さんはおれに興味がないよ、つだ。

「『飯出来たから片付けて』

「……うん」

夜司に話したら、どんな風に相づちを打つてくれるだろ、う。毎日楽しくて仕方ないと言つたら、夜司は嫉妬してくれるだろ、うか。

「十月の修学旅行だけ」

テーブルの上を片付けながら話題を変えたら、母さんはいつもを見なかつた。

「大阪行くから」

本当に話をしたいのに、ぶつせりませつた口調になつてしまつた。

「せう」

溜め息をつきせうになつて、おれは携帯電話を手に取つた。すぐに夜司へメールを打つ。

『今日、会える?』

返信はいつも同じ。一時間後くらいに来る『今まで残業してた。ごめんな』という文章。社会人になつて忙しいのは分かるけど、春休みの終わりに会つたきり、全然会えてない。

電話はこの前の日曜日にしたけれど、そんなこと満足なんてできなかつた。ホールデン・ウイークだつて、会おうと思えば会えたのに。

「明日は美歌のところに行つてくるから、留守番お願ひね」

何かが変だつてことくらい、おれは知つてゐつもりだよ。

月曜日は退屈。体育が一時間続けて入ってるから、すいじく嫌。
火曜日は音楽の授業があるから楽しい。教室移動の際には、藤堂君やりのちゃんともすれ違える。

水曜日は軽音部があるから楽しい。わたしはただみんなを見ているだけだけど、放課後が待ち遠しくなってしまう。

木曜日はピアノのお稽古。スズちゃんや滝口くんを置いて、さつわと家に帰る。

金曜日はまた軽音部。だけど図書委員の仕事があるから、音楽室に行けない。仕事が終わって時間が合えば、寺崎くんたちと合流して途中まで一緒に帰る。

そんな様子を田嶋されたのか、最近DQN女子たちの視線を感じる。

寺崎くんは相変わらず彼女たちと普通に会話を交わすけど、何だか心配だ。

「はい、この前言ってたCD」

と、朝からわたしに声をかけてくれる寺崎くん。

「あ、ありがとう」

なるべく自然にCDを受け取ると、すでに登校していたDQN女子たちの視線が背中に当たる。

「歌詞とともにオピーして入れといったから。ちなみにオレのお気に入りは

「

と、べらべらしゃべり出す彼。おしゃべりな男の子は嫌いじゃないけど、あんまり得意じゃない。寺崎くんは田の保養になるから、許す。

「洋楽って難しそうに思えるけど、一度聞いたりマジではまるから

「うん、分かった。ありがとう」

「じゃあ、また後でな」

そしてにっこり笑う寺崎くん。彼は本当に、誰に対しても優しい。わたしの背中を見つめていた女子たちが、じそじそ何かを話し始める。

「マジ、調子乗ってるんじゃね?」

「つざいよねー。ちよつと可憐にからつて、ぶりつこして聞こえますけど。

「つづーか、生意氣なんだよ」

同じ年に生意氣って言われても……あーあ、つざこ。いつそのこと、寺崎くんを通して大人しくするよつまつもありおつかな。迷惑かけるだけか。

「いーしゃ、大丈夫?」

「え? 何が?」

聞き返したら、スズちゃんは言葉を濁しておかずの唐揚げを見つめた。

「そのー……だから、えつと、寺崎と、あんまり仲良くしない方が良いんじゃないの?」

と、気遣うようにわたしを見る。どうやら、スズちゃんも気づいていたらしい。

「そう言われても、寺崎くんの方から近づいて来ちゃうから、どうしようもないでしょ?」

「うーん……そうだよねえ」

と、スズちゃんは唐揚げを口の中に放り込んだ。

お母さんの作ってくれたおにぎりを食べながら、具が梅だったことに気づく。すっぱい。

「やっぱり、いーしゃは誰か好きな人いないの?」

「いないよ」

「寺崎は?」

「ただの友だち」

「それが駄目なんだって！」

梅の種をお弁当箱の隅に吐いて、わたしは返す。

「だって、それ以上でもそれ以下でもないもん」

「だけど、それだとあいつら納得しないよ？ 女は怖いんだからね

「知ってる」

何でもない振りをしておにぎりを食べる。

スズちゃんが溜め息をついた。

教室の隅、ほとんどの生徒が食堂に集まつていて静かなお昼時。
「悪口だって、いーしゃに聞こえるように言つてるじやん

「うん」

「……あーもう、いーしゃは危機感ないんだから
ないわけじやなかつた。ただ、こつちが何かしらの行動を起こして、対立構図が完成してしまつのが嫌なだけ。

「どうにかしないと。誰か先生に相談するとか
「無理でしょ。うちの担任、弱いし」

スズちゃんが唸つた。

「じゃあ、保健の先生とか

「わたし、あの人よく知らない」

「学年主任とか」

「体育系の先生は嫌い」

我慢すればいいつてものでもない事くらい、分かつてた。

「じゃあ、どうすりやいいのよ？」

「堂々としてる。何か言われたり、何かされても無視

「……それだと、逆にエスカレートしない？」

「そう？」

と、わたしが首を傾げたら、スズちゃんは頷いた。

「うん。だってあいつら、ガキだし」

「……じゃあ、程々に相手にする」

あーいうDQN女子つて、構つてやらないともつといじめてくる
んだつた。でもわたしが相手すると、逆なでしちゃこそうで不安な

んだよね。

「それが良いよ。って言つても、根本的解決にはならないんだけどなあ」

と、不満そうにするスズちゃん。わたしのことを心配してくれるのは、素直にありがたかった。

「万が一、何かあつたら、その時はよろしくね」「わたし、こう見えても強くないから。

「よろしくって……まあ、うん。そうだね」

と、呆れたように息を吐くスズちゃん。分かってくれてはいるようだけど、わたしはスズちゃんがそこまで強い人だと思つてはいい。むしろ、何か起きたら一目散に逃げ出すタイプだよね。

「それよりも、もうすぐ中間試験でしょ？ スズちゃん、大丈夫？」

「え？ あー、微妙かな」

「ノート貸そうか？」

「……うん」

午後のホームルームだった。その前の授業ですっかり熟睡していたおれは、ぼーっとしていた。

「じゃあ、五人か六人に分かれて班を作つて下さい」

学級委員の指示にクラスメートたちが席を立ち始める。

「美音！」

名前を呼ばれてはつとする。いつの間にか新があれのそばに来ていた。

「ああ」

適当に返事をしておれも席を立つ。おれらはいつも一緒に立った。この場面でも、そうなるのが当然だった。

ざわざわする教室の中、新がよく一緒に立つむクラスメートたちの名前を呼んだ。

「一緒に組もうぜ」

と、教室の隅にいた彼らと合流する。新のおかげで増えた友人たちは、おれを含めて八人。

「二つに分かれないと駄目じゃね？」

一人が言い出し、全員が頷く。半分にしたら四人で一人足りないので、二人か三人が抜けなければならない。

「よし、グーパーで分かれようぜ」

「それじゃ駄目だろ。普通にじゃんけんで負けた奴でいいでしょ」「そうだな、そうしよう」

公平な手段だった。おれもこのメンバーだったら、誰と一緒に立つたって苦ではない。たまには、新と離れるのだって面白いだろう。「いやいや、じゃんけんしてたらキリねえよ」「だからグーパーだつて言つてるだろ」

「そつか……じゃあ、グーパーで」

結局グーパーになつた。

全員が手を出す準備をし、中心である新が掛け声をかける。

「グーパー、ジャス！」

一斉に手を出すと、半々だった。沈黙の後、新がまた口を開く。

「グーパー、ジャス！」

めんどくさいのでさつきと同じくグーを出した。結果はグーが五つでパーが三つだった。

「よし、決まりだな」

と、新が言う。パーを出した三人が顔を合わせ、その内の一人が他のクラスメートたちを見る。

おれはまた新と一緒にだった。ちょっと期待したのに、何だか残念だ。

「決まつたら前に来て報告しろよ」

と、担任教師が言う。そちらを見た新は、すぐさま前方へ向かって行つた。あいかわらず行動力のある人だ。

「でも、いつもとあんま変わらない結果だつたな」

おれの隣にいた奴がそう言って、他の二人が相づちを打つ。おれは構わずにおくびをした。

「他の奴らと組むよりマシだろ」

新がいるおかげで、おれらはクラスの中心的存在として認知されていた。分かれた三人が学級委員のいるグループと話をしている。

「氣、遣わなくて済むもんな」

ありがたいことに、おれは影のいじめっ子として役を果たせていた。言うなれば、リーダー格の新の補佐的な立ち位置だ。

「あっち、大変そうだしな」

「うん」

「嫌いじゃないけど、学級委員といたら堅苦しくなりそう」

学級委員が自ら紙に班員の名前を書きに行き、すれ違うように新が戻つてくる。

「次はバスの席決めろって」

「ああ、じゃあ俺、江川と組むから良いよ」

と、一人が言い、自然とペアが決まる。おれはやつぱり新の隣だ。
「よし、じゃあさつさと決めちゃおうぜ」

「こーいうのは早いもん勝ちだからな」

ぞろぞろと教卓の方へ歩き出す。その一番後ろを付いて行きながら、おれはふと塚田と羽山が隅で一人ぼっちになつてゐるのを見た。女子は男子に比べてグループ意識が強いから、上手く班が決まらないらしい。

「美音、お前どっち？ 憲際？」

名前を呼ばれてはつとし、おれはすぐに新に顔を向けた。

「ああ、えーと」

「あとでコピーさせて」

「え、また？」

来週から始まる中間試験に向けて、第一音楽室で勉強会が開かれていた。

「だつて忙しいんだもん」

と、開き直る方に頼人が呆れ顔を向ける。

「それは知ってるけど、それじゃあ大学行けないんじゃない？」

「いーよ、オレ専門行くから」

その言葉が本気かどうかは分からなかつた。けれども、万は高校を出てからも音楽は続けると言い切つていた。

「社会は？」

「それもコピーさせて」

「国語」

「あ、それも」

全くやる気の見えない万。これには、さすがのおれも呆れてしまう。

「万を見ると、自分がすゞしく眞面目に思えてくる」

そう独り言を言つと、隣にいた新が顔を上げた。

「オレも最初、同じ事思つたぜ」

そして再び英語の教科書に目を落とす。

おれは今までの授業で配られた社会のプリントを整理する作業に戻った。も、らつたら適当にノートの間に挟むだけなので、順番が狂つていたり、紛失してしまつたりして、「こちやこちや」になつていることがよくあるのだ。

歴史の範囲の再確認的な意味も込めて見ていくと、今回はきちんと最初から最後まで揃つていた。

「あ、ノート、教室に置いてきたっぽい」

鞄の中を探つていた頼人が言い、万が不満げな声を出す。

「えー、さつさと取つてこいや」

「言われなくとも行くよ」

がたつと席を立つ頼人。万は歩き出す彼の背を見ていたが、すぐにぱつと立ち上がつた。

「やっぱオレも行く」

「え、何でだよ」

「暇だから」

相変わらず馬鹿げたことを言いながら、一人が音楽室から出て行く。

そして室内が静かになると、新が言った。

「なあ、聞きたいことあるんだけど」

「何?」

おれが顔を向けると、新はおそるおそるとこつた様子でおれを見た。

「お前、塚田さんと付き合つてるの?」

「は?」

突拍子のない質問にびっくりしてしまう。笑いながらおれは答えを返す。

「付き合つてねえよ。つか、あいつとはただの友だちだつて」

「……そうか」

どこか納得していない様子で視線を戻す新。頼人にも突っ込まれ

たけれど、やはり男女の友情はなかなか理解されないものらしい。

「そーいつ気持ち、ないの？」

「ない。全然ない」

プリントを束にしてまとめ、右上をホチキスで止めた。

「互いに？」

「だろうな。だってあいつ、ただ目の保養がしたいだけだし」

彼女の言葉を借りて返すと、新は笑うこともせずに息を吐く。

「……そうか」

何だか様子が変だ。まさか、あいつに惚れてるわけじゃないよな？

聞くべきか迷って声をかけてみる。

「あー、えつと……新？」

「……」

新は何も喋るつもりがないようだ。仕方なく諦め、俺は作業に戻る。

あんな腐女子、付き合つたら大変なことになるぞ。それがなければ良いかもしれないが……ノンケの気持ちなんて、全然分からなかつた。

答えを鵜呑みにするなら、安心だ。一人の間に何もないなら、それがオレにとって一番ありがたい。

本当はいつも一緒に居たいと思うほど好きだけど、オレだって人間だから、あからさまな行動は取りたくない。

試験が終わって昇降口へ降りると、万と頼人に偶然遭遇した。

「お前らも帰る二二?」

「おう」

返事をした万は、一緒に帰るのが当然であるといった様子で先に下駄箱へ向かう。

たくさんの生徒でざわめいていた。オレも下駄箱からスニーカーを取り出して履きかえた。

「自転車取つてくる」

と、後ろにいた美音に言つて自転車置き場へ。

そこもたくさんの生徒で溢れていて、スムーズに自転車を取り出せなかつた。

校門の前で待つていた美音は、先に着いていた万や頼人と話をしている。

「ほら、乗れよ」

と、いつものように美音の前に自転車を止めて、後ろに乗せた。

「さんきゅ」

と、笑う美音。

そして自転車をこぎ出さうとしたら、後ろを向いた頼人が手を上げた。

「塚田さん!」

校舎から出てきた彼女が、羽山と別れてこちらへ寄ってきた。いつもメンバーが揃つた。

「駅まで送るよ」

「本当？ ありがと！」

と、ちやつかり塚田さんを後ろに乗せる頼人。こうして帰るのはもう三度目になるが、頼人の場合はわざとらしくないから羨ましい。

「じゃ、行くか」

万が先頭を切って走り出し、すぐにオレたちも走り始めた。

五月も下旬に近づいて、何となく空気が湿っぽくなっていた。

「そいや、まだ早いかもしんねーけどさ」

と、万が少し速度を落とし、頼人の隣へ付けた。

「文系と理系、どっち選択する？」

一学期になると、授業は文系と理系で異なる仕組みになっていた。早くも進路を決める、と言われているようで考えたくなかつた。

「俺は理系かな」

「わたし文系」

と、二人が答えた。万がオレたちを振り向く。

「お前らはー？」

「あ、おれ理系」

と、美音。俺たちの中では一番数学が得意だから、その選択に疑問はなかつた。

オレはまだ決められずにいた。どちらかといつと文系なオレだけど、科学はそれほど嫌いじゃない。

「オレもやっぱ理系かな」

「そつかあ。じゃあオレ、素直に文系行くわ

と、万。何が素直に、だ。

「おい、楽しそうとするなよ！」

オレがそう突っ込むと、万がははっと陽気に笑う。

「だつてオレ、大学受験しねーもん」

でも今の時代、大学に行くのはほぼ当たり前だ。それともやはり、万は専門学校に行く気なんだろうか？

「文系だと、古典とか漢文やるんじゃなかつたつけ？」

と、頼人が口を挟む。

「げ、何それ。じゃあやめようかな」

「大丈夫、わたしが教えてあげるから!」

と、楽しそうに言う塚田さん。

「やつた、じゃあやつぱ文系でいいや」

「そんなことで決めちゃ駄目だよ、万」

「別にいいだろー。だつたらお前も文系にすれば?」

「断る。数学勉強とかないと、受験で苦しめられるからね」

頼人は進路をちゃんと考えていた。行きたい大学もすでに何校か

調べていると言うし、オレとは大違いだ。

「あー、そうだよね。でもわたし、大学と専門、どっちが良いか分からぬの」

と、塚田さんが言った。すると、ふいにオレの後ろで美音が呟く。

「おれも、理系には行くつもりだけど、全然考えたことねえや」

それからすぐに尋ねてきた。

「新は大学行くの?」

「え……まあ、親には行けって言われてるけど」

大学といつても、私大に行くのか国立に行くのか、学部や学科などを含めると選択肢はたくさんある。どれを選べばいいかなんて、今オレには分からぬ。

「そつか。おれは……」

美音が空を見上げている気がした。すぐそこにあるはずの距離が、今は何故だか感じられない。近すぎて、遠い。

「あ、でもおれ、ギターは続けたいな!」

と、明るい調子で美音が叫ぶ。 そうだよな、オレだって音楽は続けるつもりだよ。それが趣味に終わるのか、仕事になるかは分からぬけれど。

「お前、すげー上手くなつたもんな。良いと思つぜー!」

「うん。もつと上手くなるよ、おれは」

笑つて、空白の未来に思いを馳せて、今をただ楽しんだ。

俺たちには思っているよりも、時間がない。あつという間に過ぎていく時間を楽器の練習にあてて、勉強して、授業を受けて、くだらない話で盛り上がって、不安と怯えでそわそわとやり過ごす。それでは駄目だと分かっているつもりだから オレは悩んでいた。

今日は一ヶ月ぶりのデートだった。りのさんと会う時は出来るだけ可愛い格好で、というのが今までの僕だったのだが……。

「今日は普通なのね」

開口一番にそう言われて、ドキッとした。

「うん、ちょっと今日は……」

と、僕は下を見た。ぎゅっと僕の手を掴んで離さないのは、僕の妹。

「えーと、朝子ちゃんだけ？」初めまして

りのさんが腰をかがめてにっこり笑う。すると朝子は僕の影に隠れるようにして、ちらりと僕の顔を見た。

「大丈夫だよ、朝子。ほら、ちゃんと挨拶して」

僕がそう言って促すと、朝子がよやく口を開く。

「はじめまして、あさこです」

「あたしはりの。よろしくね」

と、朝子の頭を撫でるりのさん。頼りになる優しいお姉さん、という印象だ。

僕はどうしようかと考えて、ひとまず事情を説明することにした。「ごめんね、りのさん。今日は両親が出かけてて、やつちゃんは何か会議の資料作るって部屋に引きこもつて、朝子の面倒見る人がいなくつてさ

「あら、そういうこと。でも良いじゃない、たまには」

と、腰を上げるりのさん。気を遣われているのだろうか、何だか後ろめたい。

「本当にごめんね。それで、えっと……どこに行こうか？」
氣を取り直して彼女へ尋ねる。りのさんは少し考えると、朝子に手を差し出した。

「とりあえずランチしましょ」「う」

朝子は疑わしげにしながら、りのさんと手を繋いだ。

「三人ならファミレスが良いわね」

と、どこか楽しそうに言いつのさん。そんな彼女があまりにもしつかりしていて、僕も兄としてしつかりしなきや、と思わせられた。

「そうだね、朝子もお子様ランチ食べたいよね?」

「……うん!」

僕の方に顔を向けて頷く朝子。その様子は可愛いけれども、りのさんにはまだ抵抗がある様子だ。

そして三人で歩き始めると、りのさんがふいにくすっと笑った。

「親子みたいね、あたしたち」

「え?」

子どもを間に挟んで歩く夫婦は確かによく見る。けれども、急にそんなことを言われてびっくりしてしまった。

「今日は仲良くしましちゃうね、朝子ちゃん」

「……」

「あら、お返事は?」

「……こちらこそ、なのです」

やはりまだ、朝子は緊張しているらしい。僕が思わず笑い声を漏らすと、一人の視線がこちらを向いた。

「そんなに緊張しなくて良いよ、朝子。りのさんも、あんまり気遣わないで」

そうしてにこりと微笑むと、りのさんもにこり微笑んだ。

「そうね」

と、朝子の手を強く握つて、離さないようにしてくれた。まだ僕たちは軽いキスまでの清い交際しかしていないけれど、その内にもつと先まで進めたら……いいな。

中間試験からようやく解き放たれた日の昼休みだった。
昼食を終えると、普段は教室で友達と他愛のない話ばかりして過

ごす僕だったが、今日は事情が違つた。他のクラスの人たちが教室に雪崩れ込んで、がやがやうるさかったのだ。静かな方が好きな僕は、ちょっと嫌だなと思っていた。

「今日はやけに騒々しいな」

と、一緒に昼食をとっている友達の一人が言い出し、もう一人が「あつ」と、声を上げる。

「職員室行くの忘れてた。やべー、行つてくる！」

返却されたばかりの答案用紙を取り出し、本来の点数を取り戻しに慌てて廊下へ出て行つてしまつた。相変わらず元気な人だ。残された僕たちは顔を見合せた。

「暇だね」

「うん」

友達は何か考える様子を見せる、席を立つた。

「ちょっと図書室、行こつ

「え、何で？」

「暇だから」

僕もすぐに立ち上がり、彼の後を追つた。

校内はどこも賑やかだつた。グラウンドではサッカーをしている男子生徒の姿が見えるし、廊下の端々では女の子達がきやあきやあと黄色い声で盛り上がつている。

図書室に近づくにつれて人気が少なくなつていき、図書委員でもある友達が慣れた様子で図書室の扉を開けた。

他の教室とは違う独特の匂いが鼻をつき、カウンターでは委員の生徒が本を読んでいた。

きょろきょろと周囲を見回しながら、友達は奥の長いすが置かれている方へ足を進めていった。何か探し物だらうか。

「あ、いた」

と、ちょっと嬉しそうに友達が声を上げると、その視線の先に見覚えのある人がいた。

「あら、三藤くん。それに、藤堂くんまで」

塚田さんだつた。目を丸くさせて、それまで読んでいた本を閉じる。

「あれ、知り合い？」

と、僕を振り返る友達。すると塚田さんがにっこり笑つて答えた。「去年、同じクラスだつたの。むしろ、二人が仲良いなんて知らなかつたよ」

「ああ、俺も一人が知り合ひなんて知らなかつたし」と、笑う友達。つていうか、僕には一人の関係性が見えないんだけど……あれ、そういえば。

「一人は、同じ図書員だつたっけ？」

僕が尋ねると、彼が言った。

「それだけじゃないよ。塚田さん、よく軽音部に来るんだ

「……あれ、えっと、じゃあもしかして？」

と、塚田さんに助けを求めてしまう僕。

「そうそう、滝口くんとも仲良いんだよ。一緒にバンドやつてるくらいだもん」

「あれ、藤堂つて美音とも知り合？」？

今度こそ田を丸くする三藤くん。むしろ驚きなのは僕の方だ。僕でさえミオつてあだ名で呼んでいるのに、名前を呼び捨てだなんて

……！

「その、何ていうか……僕の親友、だよ」

あまりの出来事に頭が混乱していた。まさかそんなところでみんなが繋がっていたなんて、衝撃的すぎる。

「へえ、意外」

と、呟く三藤くん。意外なのは僕の方だつてば！

「ところで、図書室に何の用？」

塚田さんがにこつと首を傾げて問うと、三藤くんは三十センチほどの距離を置いて彼女の隣へ腰を下ろした。

「暇だったから来てみただけだよ。塚田さん」そ、本当に図書室で過ごしてゐるんだね」

「まあね。教室はちょっと、居づらくて」

僕は友達の隣に座りつつ、自分は場違いなんじゃないかと考え始める。塚田さんも三藤くんも、すっかり仲良しの様子で僕だけ置いてけぼりな気分だ。

「いつも一人なの？」

「んー、そうね。スズちゃん連れてくることもあるけど、図書室に来るとすぐ本が読みくなっちゃうから」

と、笑う。三藤くんはそんな彼女に相槌しながら笑い返して、僕たちといふ時よりも楽しそうに話をする。

三藤くんはしっかり者で頼りがいがあり、優しくて大人っぽい。友達のいない僕に声をかけてくれた最初の人で、修学旅行でも一緒に班だ。そんな彼は軽音部でドラムを叩いている。そして図書委員。趣味は洋楽。僕からしたら共通点が少なくて、すごく遠い人。

一方の塚田さんもしっかりしていて、好奇心旺盛で面白い人。いろいろなことに精通していて、僕の趣味にも寛大な良きアドバイザー。ただ、そんな彼女と三藤くんが意気投合している様子はすごく意外だった。

そして予鈴が鳴り、塚田さんと別れて教室へ戻る最中に三藤くんが言つ。

「塚田さんって、可愛いよね」

「え、うん」

僕はりのさんの方が可愛くて大好きなのだけれど、と考えたところではつとする。

「まさか、この前言つてた氣になる子つて……？」

三藤くんはにこっと笑つた。

「さあ、どうだろうな」

……塚田さんにもようやく、春到来か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481n/>

パッション・アイデンティティー

2011年2月12日11時25分発行